

旅行

七十年に於て左の如く書き送れり「兒童等は毎週日曜日曜の兩日に於て會合し居れり彼等は野卑なる一小群なれども教を受くるとを喜ぶが如し予と彼等の中より働き熱心にキリストの教會を益せんことを望めり」ウエスレーはロンドンより又エセックスに赴きオウイングトン及びテットベリーの會堂に於て説教し再びロンドンに歸りて閑時を書翰及び其他の書類其中の多くは之を焚けり」の再査校訂に費せり二月十八日暫時ノルウヰッチに赴きしが從來に勝れる快樂を以て數日間を過せり三月十日午前九時スビエルフヒールツのグレイ、イーグル街なる舊佛蘭西會堂に於て説教し而して無業ある織工は爲めに貧きメソヤスト會友より四十パウンドの義捐金を得たり同夜此會の其會友の困難中にある者の爲に更に十四パウンドの金を募れり次日氏の三十二週又立る旅行を始めしがプリストルお赴く途中其乗れる馬倒れて死せり氏はストラウダに到り新講義所に於て説教し夫よりウオルセストル、ボルミングハム、デルビ、及びセフヒールドに進めり、ンチエストル、ボルトン、及びリヅルフルに於ては何れも聴衆堂々溢れた

蘇國へ赴く

り氏の愛爾蘭を渡らんと欲せしも風の爲に障へられ二週間の後(四月十一日)遂にケンダルに向て出發せりケンダルより暴風劇雨中諸山を越へてバルナルドキヤスソルに進み四月二十二日蘇格蘭に向ひ、ドンバル、エデンボロー、ムンセル、ホルグ、及びグラスゴーに於て説教したる後巡回傳道者ゼームスコルシヨードと共に途を蘇國の西岸に取り遂にボルトバトリックに着し其處より小船を投じて海峽を渡り愛爾蘭のドナグハデーに達し五月二日より八月二日迄此國に於て絶えず旅行、執筆、説教等々執掌せり、ウエスレーがダブリンに着したるは七月十八日として其夜より働きを始む氏曰く「予は聖書中最も深奥なる部分即ち約翰第一書を講説し始めたり予は凡ての若き傳道者や他の書聖書よてもに従て已が説教の体裁を形成せんよりの寧ろ此書翰の風に從いんとを勸告す、此書翰は威嚴と單純最も強き思想と最も適切率直ある語とを併有せり、神の託宣として語らんと欲する者誰か此書翰中にある者より強き語を用ふるを得んや」と

愛國へ航す

氏は八月二日英國に向て出帆し、同六日ホワイトヘーヴンに上陸し夫よ

約翰第一書とウエスレー

「六十歳以上の人が在ては可なりの勞働」

マンチェストル年會
新派進歩の
速力

り急ムニユーキヤソルに赴き十一日即ち日曜日にては三回の説教を
おせし外契約會を開き或集會も於て一時間の説教をかし而して馬を驅て
殆んど三十英里を旅せしが六十歳以上の人に在ては可なりは勞働ありと
云ふべし

氏は八月二十日マンチェストルに於て年會を開けり當時英倫に二十五
蘇格蘭に四、ウエールスに二、愛爾蘭に入の巡回ありて之も働く巡回傳道者
の數は總て九十二人ありき但其中十二人の此年會に於て試用巡回傳道者
とありし者なり是に由て讀者はメソヂスト教派の歴史中多事なりし最初
二十五年間も於ける該派進歩の一端を推知するを得べし然るに下の事實
は讀者をして一層其進歩も驚かしむるならん此年即ち一千七百六十五
年のマンチェストル年會に於ては英倫、蘇格蘭、愛爾蘭及びウエールスも於
ける總巡回中に只九十二人の巡回傳道者ありしのみなるが夫より一百年
の後即ち一千八百六十五年に於ては只マンチェストル巡回のみにて巡回
傳道者の數一百十七人に下らざりき語を換へて言へば一千八百六十五年

議決せし事
件

よ於てはマンチェストル巡回のみにて一千七百六十五年に於けるメソヂ
ストの總傳道者の數より多きと殆んど其三分の一なりしあり○此年會に
於て老衰傳道者、傳道者の寡婦及び遺兒を扶助する慈惠金處理の規則を議
定し、又多くの講義所の猶ほ負債の中にあるを以て以後はウエズレーの補
助者の一人之を認許するも非れば新講義所を建つ可らざると而して其補助
者は若し止む可らざるの必要ある外は容易く之を認許す可らざるとを決
そ、又何處に於ても男女席を異にすべきと、從來傳道者等は其會或ハ長吏の
喜を迎へて屢々屋外説教を怠りしも今後は決して斯る事を爲すべからざ
ると、平日も在て夜の説教は秋收時を除くの外七時より遅く始むべからざ
ると、饗餐と長くとも決して一時間半を越ゆべからざると、蓋誰よても九時
又は歸宅すべき者なればなり、或傳道者が自用の馬などに無慈悲なりしは
不當なるを以て向後の苛酷なる使用をなさず又其馬を善く拭ひ飼ひ遂に
寢床に就かしむるまで已れ親しく監視すべきと、及び會友の甲會より乙會
に轉ずる時は其退きたる會の傳道者より保証狀を受け之を携帶すべき者

一千八百六十五年

三百七十一

にして之を有せざる會友は何れの會も於ても受け容る可らざるを議定せり

會友減少の理由

マンチエストール年會は四日間なりしがウエスレーはロンドンを去てよ
を既に五ヶ月餘なるも猶歸らず年會後直にコルンウォールに向て出發せ
り九月二十二日プリストルに歸り而して一年前に氏が此地を去りし時よ
比すれば會友五十名の減少あるを見たり氏記して曰く其理由は基督信
者の完全成就に注意せざりしが故あり何處も於ても若し此点に注意せざ
る時の假令其傳道者如何に能辯なるも會衆を増し又は之の恩惠の加ふる
と甚だ少なし今此處に自ら罪より救はれざりと信する者二十人あり然る
に若し是等の人々其受けたる恩惠を失ふに於ては彼等自ら之を受けざり
しと思考せると甚だ容易なりロンドンに於て自ら救はれたりとの經驗を
有する者四百人あり若し彼等予の偽りを告げずば然るに假令其中半數の
者之を失ひ而して自ら嘗て其恩惠を受けしとなしと思考するとあるも予
は決して之を怪まざるなり神の恩惠を棄つるに就き自らを免すの道は

實に容易なる者なりと

キヤプテンウ
エツプ

ウエスレーがキヤプテンウエツプと相識るに至りしは恰も此頃の事か
りトーマスウエツプの當時三十一歳の壯年にして七年以前に將軍ウルフ
と共に加奈太に在りしが其處にて右眼を失ひ右腕に負傷せり氏は一千七
百六十五年三月二十二日プリストルに於て「モレヅイヤン」の傳道者カリ
氏と談話の際神と和らぐとを得暫時の後セームス、ロクエツト氏の紹介に
依りプリストルメソヂストに入れり氏の改悔後直にバスに於て説教を始
め而して一千七百六十九年に於ての亞米利加メソヂスト教派を起すと
も最も力を致せり一千七百八十三年の頃英國に居を定め而して餘生を舉
て一千七百九十六年迄キリストを宣ぶるに費せり

ホ非ツトフヒ
ールドヒウエ
スレー

ウエスレーは十月二十一日プリストルを去り三日にしてロンドンに着す
氏は同二十八日左の如く記せり予はホ非ツトフヒールド氏と朝餐を共ませ
り氏は未だ五十歳ならざるも主の務に於て主の務に執掌しての意殆んど
全く衰耗し今恰も高齡の老人の如し然るに予は今六十三歳に達したるも

落馬

只少しく齒數を減じ白髪を増したるのみにて毫も疾病、虛弱、老衰等なく、恰も二十五歳の少壯なりし時と異なるときは之れ偏へに神の聖旨あるなり、
 ウエスレーサウスワルクを經過するの際馬轉倒して氏の足を其下と數さし、
 一人の紳士之を見て氏を扶け起こし近傍の商店に携へ往けり氏は其處まで劇しき痛を感せしも鹿角と水とに由て漸く其痛を減じ暫時休息の後馬車を命じ其旅行を續けしむ少時して右腕、胸、膝、脛、脚目等大に腫れ爲り自ら甚だしく之を傷めたるを知れり、
 ショールハムに着して後毎日二回糖蜜膏を粘け一週間に馬車めてロンドンに歸るとを得るに至り其處にて糖蜜膏の他に毎朝毎夕電氣を用ひ以て大に快癒に赴けり、
 氏ハ其痛の氏が働を妨ぐることを許さざりまも尙多月の間大なる痛困の中にありたり、
 一千七百六十六年五月六日氏記して曰く予はクリスマスの時落馬せしが今に全く快復する能はず或は此世に於ては全き快復を見ると能はざるべし或時の脚目或時は膝又時は肩の痛を覺ふ、然れども予ハ爲り召かれたる事業を爲すに尙充分の力を有するなり予は徒歩するに堪へざるに至れば馬を

用ひ又時々驛車を用ふ斯の如くして是迄予がロンドンを去る時計齎したる諸所の巡回を爲すに於て少しも妨げられざりしなり」と

一千七百六十六年 六十三歳

一千七百六十六年ウエスレーの日記の第一葉に記されたるものは左の如し
 一月一日午前四時大衆ファウンドリに會し讚美と感謝の聲を以て新年を迎へ夜お至り神と我儕の契約を新々にせんが爲に常例の如くスピタルフヒールツに會せり此會に於ては常々數人の囚人(惡魔の)解放さるゝありて實一の新時期たるなり、
 ウエスレーは尙身軀に痛を覺へ且つ歩むに少しく跛ありしも一月十三日ノルフォルク巡回の途に就けり、
 一月二十四日ロンドンに歸りロンドン會の負債六百十パウンドなるを見三たび集金をなせしむ其得たる金額の負債の全額に越へたり當時該會友の數は二千八百人より二千二百人に減せり

ホヰットフヒールドの當時ロンドンに在りし身軀甚だ衰弱して殆んど絶息するに至りしと屢々ありき然れども尙一週三四回の説教を爲さん

一千七百六十六年

感謝會を以て新年を迎ふ

此年に於けるホヰットフヒールド

彼とウエスレー兄弟及びハントイングドン貴夫人

とを力めたりウエスレー記して曰く一月三十一日—ホ非ットフヒールド氏予を訪へり氏は只平和と愛のみを呼吸す固執頑硬の如きは氏の前より立つ能はずして氏が到る處より其頭を隠せりと此時よりしてホ非ットフヒールドとウエスレーの間には過去二十五年間於るより一層親密なる一致を來たせり彼等は從來時々書翰を往復し又相互の講義所より於て説教せしも衷心より協同一致の働をなすとなかりしなりウエスレーは英國教會の教師等と一致せんとして事成らば今ホ非ットフヒールド及びハントイングドンの伯爵夫人と協同せり此頃チャールズ、ウエスレーは左の如く記せん「今朝予は予が兄弟と共にジョージ、ホ非ットフヒールド氏との有益なる會話をなせり我儕は此三條の索は爾後決して切斷せざるを信ず、次の火曜日は予が兄弟バスに於けるハントイングドン夫人の講義所より於て説教すべし此バス講義所及び其他該夫人の講義所へ皆我儕三人の手より委託されたり」ウエスレーはウィットに於て年會を終り例年の如く秋期巡回の途に就きしが幾許もなくしてハントイングドン夫人より直にロンドンに歸り呉れよと

の書を得たり依て先づロンドンに歸り夫より直にバスに至り該夫人の講義所に於て説教せしが是れ實に尋常の事にあらざりしなり此時迄該夫人の諸講義所は殆んど英國教會の諸會堂の如く嚴にウエスレーを謝絶して入れざりしが今は暫時其狀況を異にせりウエスレー曰く「一千七百六十六年八月二十六日—バスに於て予がハントイングドンの伯爵夫人の講義所に於て説教するを見て人々大に驚けり其會衆は只多量なりしのみならず又甚だ嚴肅なりき予は此時充分に予が靈を注ぎ出せり故に予は其處にて復び説教するを得るも得ざるも更に意に介する處なし」と○斯の如き者は當世の三大傳道者と一人の貴夫人との協同一致にして該夫人の如きは若し男子なりせば監督となると決して難からざりし人あり然るに此同盟は長く續くと能はずして遂に敗れしが是れ四人の中孰れの不信實なりしにも非ずして恐くハ一はホ非ットフヒールドの死と一は伯爵夫人を圍繞したるカルヴァイン派の教師の嫉妬に出でたる隠謀とに起因せし者なるべし此等教師の中或者はサウセーの言の如く甚だ熱心ありしが又固執小量

にして他を容れざるの俗物なりき、ウエスレーは十月中數度バスに於て説教し一回は主の晩餐を司どり

北部巡回

キングスウー
ド學校

三月十日氏のロンドンを去り例の長き北部旅行を始め常例の如くプリ
ストルプリストルに來り而して左の如く記せり予ハキングスウー
ドに赴き教員僕婢
等に悉く予が思ふ處を告げ且つ嚴肅に兒童等を教戒せり予は此學校の困
難を全治する可然らざれば全く之を廢すべし予は基督教主義の學校キ
ングスウー
ド學校よ
らずんば一切之を有つを欲せず氏ハプリストルより途をストラウド及び
ケルテンハムケルテンハムと取れり此ケルテンハムには是より三年の後メソヤストの
巡回傳道者其働を始めし改悔者中ハペネロープ、ニューマン娘あり娘は
改悔後幾許もなくして二の組會及び一の撰拔バンドの長となり且つ多
年ウエスレーの通信者となり其改悔前に於ては書店を開きしが其後の
神の事業の爲に全身を献げ近隣の市邑村落を訪ひ又サラ、シロスビー及び
他の婦人等の如く時々公衆に向て勸話をなせりウエスレーケルテンハム
を去りイヴェンヤムイヴェンヤムと到りしが其處にては愚民等市長の煽動により大あ

ペネロープ、
ニューマン

ノッテングハ
ムの會場

騒然たりしも土石を投せざりしを以てウエスレーは我儕ハ充分満足した
り」と云へり氏はノッテングハムに進み八角八面の講義所ノッテングハムに於て説教せし
が此講義所の百二十八パウンド七ペンスの費用にて當時漸く落成せし者
おして此時嚴肅なる聽衆場中に充滿せり此時迄ノッテングハムのメソヂ
スト信徒はマレニュー、バグシヨマレニュー、バグシヨの家に於て集會せしが氏ハ人々の便利を計
り其室に大なる墜戸トランドを設け之を上ぐれば氏が寢室ハ宛然會場の二階の如
くありて説教者は其間隙トランドに立ち頭を床より出して同時ニ室下の婦人と室
上の男子とを向て説教するを得せしめたり

セフヒールド
會三たび會場
*建つ

ウエスレーハノッテングハムより進んでセフヒールドセフヒールドに赴けり此處に
ては既に二のメソヂスト會場は暴民の爲に破壊され今在るものハ近時
モルベリ街モルベリ街に建てたる第三の會場として縦五十四英尺横三十六英尺なり
き、ウエスレーは三月二十六日此會場に於て説教し而して左の如く記せり
「今宵は夥多の人々來集せり客臘には多くの妨害ありしも今宵は全く安靜
なりき、ウエスレーが爰に記載する妨害とは左の如し滑稽有害なる一人の

滑稽漢

巨魁ありて十六歳乃至廿歳位の無頼漢を率ひ屐々婦人の外套及び上衣をば小刀又は剪刀を以て寸断し或時は右の巨魁滑稽者の服装をなして講義所に入り來り其被服の下に猫又は牝牡の雞を隠くし之を鳴かして聴衆を妨げたり而して若し場内より追ひ出さるゝ時は屋根に上り殆んど講壇の眞上なる天窗の前より立ち下なる説教者の形容を眞似せり是等の悪徒は講義所の硝子窓を破り戸を閉づれば瓦石棍棒を以て之を打ち碎けり然れども何なる故もや夫の巨魁も其黨類もウエスレーの説教中の静穩なりき斯て其妨害の尙三ヶ月間繼續せり三ヶ月の終りに至り右の巨魁一日ドン河に浴して同友等と戯むれたる後嘲弄の語氣を以て今一度河底より下り后復メソヂスト信者と暫時愉快なる戯をなさんと云ひ卒然水中に跳び入りしが水底の泥土より突入して果なく溺死せりウエスレーのセフヒールドよりイヤム、ストツクポルト、及びマンチエストルも進み四月七日ウオリングトンに着せしが此處に既に會の組織ありて氏が到りし時は貧富賢愚の別なく來り聴くもの雲の如くありき氏曰く予は此時程明白(有)に語りし

「必用は徒て之れを爲すの力を得」

となく又此會衆は悉く注意して聴きし會衆を見しとなしと當時此處の會友にウイリヤム、ヤングある者ありしが彼の凡そ二十年間毎月曜日之夜ウオリングトンに於て説教し尙其働を擴張してランカシール及びチエシールの各所に傳道し遂より一千八百二十三年左の辞を遺して眠りよ就けり曰く主イエスよ來り給へ榮光の中天使來る天使我をアブラハムの懷に携へ往かんが爲に來ると四月十一日ウエスレーはウイガンにて嚴肅ある大衆に向て説教せしむ數人の甚だしく愚昧無禮なる者ありし外聴衆の舉動は一般に善良なりきウエスレー記して曰く予は一日に二回或は三回以上の説教をなすことを望む者に非らず然れども之をなすの必要ある時は幾回なすも予に於ては同一あり予は必要に従て幾回にても之をなすの力を得るなりと四月二十八日ヨルクに着し次日ソルスに於ける新講義所に於て説教せり氏ニエーキヤスルに着して其處に殆んど三週間滞留せしが其間若干日を休息に費やし餘を説教及び近隣諸會の訪問に費せり氏曰く予は今春お於て多年未だ嘗て感せざりし疲勞を覺ゆるは其何の故なるを知

らず恐くハ夫れクリスマスの落馬が予が自覺するより一層甚だしく身体
の力を弱めたるハ由るなるべしと

蘇國に向ふ

沼中の難

五月十九日氏の夫人及び一女と共に蘇格蘭に向て出發し次の五週間を
トウイーの市邑村落に費せり、氏のハダムフライズに到て蘇國旅行を終り
ソルウェイ、フリスは於ては多少危険の事に遭遇せり之に就き氏は左の如
く記せり、六月二十四日我儕は森の側なる一旅店に投せんと欲せしが或人
我儕に告て此大道を離れ向ふ見ゆる家直行すべきを云ひしかば其
指教に従て往くと凡そ十分時を以てドンキャン、ライト忽ち沼澤に遮蔽せ
られたり然れども馬を驅て其沼を渡り難く對ふの岸に達せり予ハ後に
返へらんとせしもドンキャン予に告て少しく左せを可なりと云ふを以
て其如く少しく左するや否や忽ち馬肩を達するの深處に陥り馬は二回跳
び上て二回沈み三回目には予を一方に投出せり予馬と共に力を極めて深
處を脱せしが全身汚泥に染まりたるのみも毫も害を被るとおかりき

ウエスレー英國に歸りホワイトヘーヴンに赴き而して六月三十日嶮岨

降雨中屋外に
説教す

一奇事

なる山路を経て七十英里以上を旅しハルナルドキヤスソルに着せり氏は
其處にて左の如く云へん予は六時に説教所接近の空地に於て説教せしが
此邑の民兵多く來て之を聴き又隣村より來集しる者も甚だ多かりき予
が説教の間は多くハ雨なりしも去り往きし者は五六人に過ぎざりしなる
べし七月二日ウイールデルに於て説教し而して左の如く云へり此處よ
て或人一人の婦人を我儕が許に携へ來りしが其婦人は數年間亂心せる者
にて今甚だしく狂ま實に恐るべき状態にて胃潰詛言を吐き分時も靜かな
ると能はざりき斯く恐る可き状態にて振動せしむも拘はらず其夫は力を
極めて彼を保持し居たりしが凡そ十五分時を経て全く其振動を止め靜か
く坐して遂に神に頼み求むるを始め我儕が彼を離るゝ迄殆んど間斷な
く之をなせりウエスレーニューキヤスソルに於て三日を費し後
南に向て出發せり氏は七月九日ハルムに於て四季會を開き而して左の言
をなせり此巡回中の諸會は漸次増進せり蓋し貧者の中は在て増進せしな
り何となれば富者は一般に「更なる是等の事を意とせざりし」を以てなり當時

「貧者の中
在て増進せし
なり」

リボンの市長
に寄せたる書翰

ヤルム循環は南方三十英里なるリボンに達せり此處の或メッセスト信徒は殘暴不法なる待遇を受けたればウエスレーはリボンの教長ワンレー氏に左の書翰を送れり、氏の當市の市長なるも常に夫の迫害を受けざる信徒等の爲には正當の裁判をなすことを拒みたり

「敬呈小生貴下との未が一面識も無之候へ共小生が基督信徒特に教師及び市長に對する尊敬小生と驅て遂に左の數行を以て貴下を煩はすに至り申候、ラルフ、ベル近時リボンに於て起りたる事を小生に報道致候が同人の要求する事は第一に其受けたる損害の償ひ、第二に良心の自由に御坐候、抑も此良心の自由は何人も神と自然の律法、又凡て英國人民たる者の時に自國の法律に由て得たる權利よて皆之を主持し得べき者、御坐候小生は是等我國の法律が目下の事、於て我儕に利益を興ふる者あるを能く了知致居候此お我儕と申せしは今回の事を以て小生自らの事となすが故にて是を小生が事となすの小生に於て免かれざる義務なりと思考致候、小生は是迄多くの訟訴を法庭に提出致候が未だ嘗て一度も

敗訴したると無之候併し若し出来べくば事を平穩に済ますと素より小生が幾重おも希望する處、御坐候是れ費用も堪へざるを爲にあらす、若し小生自ら之に堪へざるも他よ之に堪ゆる者有之候、只平和を愛するが爲にて小生の己の如く隣人を愛し候故何人の上にも毫毛の損害を來たすを好み不申候、此事に付小生が關涉の罪は前述の精神に歸せらんとを奉願候敬白

ヤルムに於て

一千七百六十六年七月七日

ジョン、ウエスレー

權利を重んずる人、同情深き人

ウエスレーは平和の人なりしも自己及び會友の正當なる權利を輕々しく放棄するの人あらざりしなり、氏は世の大教導者たるの寛大なる資格を具へし、又其從者等の最も卑き者の爲に力を致すとは尙自己の爲にするが如く、よして夫のリボンのラルフ、ベルの如き世上に名無き者もウエスレーの同情眷顧を得るの明確なると恰もウエスレーが最高弟に於けるが如く然りしなり

一千七百六十六年

三百八十五

「一奇事」我
儕は長に掛れ
り」

ウエスレーの夫より進んでヨルクに到りしが其所にて一奇事こそ起り
たれ、之に就き氏の單に左の如く記せり「ヨルク、一千七百六十六年七月二十
日(日曜日)一八時の説教を終り予はセント、セーヴ非ヨル、ゲイト會堂へ赴き
り祈禱の終に當て牧師小吏を使いして予に説教を依頼す依て予は「主よ主
よと曰ふ者」云々の聖語を題として説教せしが夥多の會衆中一人の微笑だ
にせし者あるを見ざりき、ウエスレーの一人の微笑だよせし者なしと云へ
り然れども其事實は全く價なき者なり何となれば今回れ起事は全く人々
の志望を反し彼等が毫も預想せざりし奇事なればなり、抑此起事たる全く
牧師コルデユークス氏の平素淡泊なるより出でたる過失にして是迄氏は
其會衆の夫の流浪人ウエスレーの説教を聴くとを戒むるは已が義務なり
と思考し屢々之を戒めしが今已が其人の説教を聴く可らずと戒めたる會
衆に向て説教せしめんが爲に自ら其人を招けり蓋し斯る事の起りたる次
第の左の如し、ウエスレーはヒーシヨルム、グリーンの講義所に於て説教し
たる後其法衣のまゝコルデユークス氏の會堂に往けり氏はウ氏が一個の

教師なるを見其誰あるを知らずして之に説教を依頼せり説教後氏は下吏
よ此旅客の誰たるを問ひ之に下吏答て「君よ、彼は足下が平素其人に就て我
儕に警戒を與へ給ひし流浪人ウエスレーなり」と云ひしかバ氏は大に驚き
「ア一實然るか、我儕の畏に掛れり併し意に介する勿れ我儕は善き説教を
聴けりと云へり、ヨルクの教長此事を聞き大監督又訴へんと恐嚇せしがコ
ルデユークス氏教長に先だつて事の始末を大監督又告白せしかバ大監督
は「足下正當なる事をなせり」と答へ事全く茲又結了せり、コルデユークス氏
のウエスレーが再び來りし時復氏に其講壇を讓與せしむ此時ウエスレー
の夫の山上八福の教を説けり

ウエスレーはヨルクよりタドキヤストル及びペートレイ、ブリツヂへ赴
きしが此ペートレイ、ブリツヂに於ては氏がニューキヤストルを去て以來
最多數の聽衆を得たり氏曰く「此時雨なりしを以て予の聽衆に皆帽を戴か
んとを請へり然るも僅か二三十分時よして復之を脱せり實に彼等の主イエ
ス、キリストの恩恵を識るの外何をも意に掛らざりしを如し」と斯る敬虔な

聽衆の敬虔な
る舉動

る舉動ハ夫の十四年前トーマス・リーニ與へたる待遇と天地霄壤の相異あり其時彼等ハ石を以てトーマス・リーの頭を傷け又彼が自ら暗渠に陥りたるを捕へて河中ニ投せり、ウエスレーペイトレイを去り迂回してスキプトン、アツディングハム、ペイルドン、及びブラッドフォールドを巡回せり氏記して曰く「ブラッドフォールドニ於てハ實に夥多の聴衆ありしガ降雨の爲に予の音聲は能く周邊の聴衆ヲ達せると能ハざりき此地の會友ハ方五十四英尺の説教所を新築したるガ之れ英國ニ於て我儕が有する最大の八角堂也リ其屋根の高さは只巾の三分の一に過ぎずして常識を以て建てられたる此種の家ノ屋根は之を以て始めとす而して其堅固あると他に劣らず又毫も壁を害する等のとあるとなし然らば他の建物ハ何故其屋根を高くする乎之れ單ニ建築者の拙なるか又は其正直ならざるに由るなり

氏は又左の如く記せり「八月四日月曜日予ハ午后一時ペンングレーに於て説教せしガ此地許多のメソヂヤスト信徒が夫のハツォルスの信徒の如くアナバプテラスト聖見受洗の教理を拒むの徒の爲ニ或ハさき居るを見て大

八角堂ウエスレー

教會分離ニ就

リーツ年會
(一大緊要なる年會)
年會議事
の三大問題

第一問題
教會論

に憂へたり予ハ彼等が若し教會に連ならざれば我儕も連ならざるべきとを愈々明に認識せり誰ホても教會より分離する者ハ又メソヂヤスト教派より分離するや明かあり是に由て夫の教會分離の一件ハ尙ウエスレーの行路ニ出沒したる怪物なりしとを知るべし實に此事件は是より八日の後にリーツに於て開きたる年會議事中之一大問題ありしなり是迄年會議事中之三大問題(教會分離、ウエスレーガ行政權、及び傳道者の充分なる改革)に關してウエスレーガ熱心努力せしは此年會を以て最とす

其第一問題に關しては左の問を提出せり

「我儕は脱會者に非るか 答—我儕ハ不規則なり即ち 第一、神の領地内ニ於ては何所に於ても罪人を悔改に導くことニ由て 第二、時々隨意の祈をなすと云ふ由て我儕ハ不規則なり然れども我國法に所謂教會の禮拜ヲ出席するは罪ありと信する者(は脱會者と認定す)との点ニ於て我儕は脱會者にあらざるあり何となれば我儕は機會を得ることニ之に出席すを以てあり……」

然れども或人の云ひん、我儕の禮拜ハ公拜なりと、然りされど教會の禮拜ハ代用するにわらず我儕は決して斯ることをなさんと謀りしとなく却て反覆其正反對の事を公言せしなり……故に予は説教の前に於ても後また於ても長き祈禱をあそ可らざるを重ねて勸告せり……若し夫れ教會の禮拜に代用せんと企圖せし者なりせば實は左の欲点あり即ち我儕の禮拜は於ては殆んど公祈禱の四大部分惡より救ひ出さるゝと、哀求中保及び感謝を欲ぎ又主の日ハ於てすら主の晩餐を以て終るとなし……故に予英國及び愛國にゐるメソヂスト信徒に勸む誰にても教會に養育されたる者ハ斷へず少なくとも毎安息日よと教會の禮拜に出席すべし

是れウエスレーの口より出でたる奇異の語なりメソヂスト教徒は英國教會の禮拜に出席することを勧めらる、何が故と然るは、是れメソヂストの禮拜は欲点あるが故なり、併し何故ハ欲点あるか、是れ偶然と非ず故らに斯く企圖されし者よと元來メソヂストの禮拜は單に教會禮拜の補充と思考

されしなり、然るは之れ正當の事なりしか、我儕は之を疑はざるを得ず、英國教會の長き祈に從ふ補充禱の類ありと云ふの点ハ於てはウエスレーを以て短き祈の主張者と云ふを得べきも通常は夫のコレクツの如き短き祈を主張勸勵したる者には非ざりしなり故に凡ての公拜に於て短き祈を奨励する者としてウエスレーを引用する者は全く氏が意を誤解したる者なり、ウエスレーが當初のメソヂスト教徒公拜に於て行はれたる如き不完全の禮拜を善しとし之を勸勵したるは氏が過失なるへし、氏の之が理由を示すと雖ども其理由は不適當なり、現今變遷したる時代に在ては斯る多くの短き祈を用ゐるとハ只メソヂスト教徒中或不都合なる教育を受けたる者の稱讃するのみにして到底行はれざる事たるなり

ウエスレー自己の事に關する第二の問題も亦最も切要なる者なり、ウエスレーはメソヂストの獨裁者にして該教派の運動を左右するは獨り氏が手中に在りしが傳道者及び信徒の中に之を不服としメソヂストの立法及び政治に於て各自參與するを得んとを望めり故にウエスレーは止を得ず

ヅの年會に於て已が權を辨護せり即ち記して曰く

「其權とい何ぞや、即ち人を予の配下の會に入れ或は之より退け、會計吏を撰擇更換し、補助者を收入又は拒絶し、彼等に予を補佐するの時と所と方法とを示し、且つ予が適當と認むる時に於て彼等の會合を求むる等の權是あり、抑予が當初此權を受容したるは單に神の攝理に従ふと人々の益の爲にして今日予が此權を使用するも亦之と同様の理由に依る者よしして決して名利快樂の爲に非るなり

然るに若干の人々は予が斯く多くの權を有するとなつて大に不服を唱へたるが予が之に答ふる辭は左の如し、予の毫も自ら此權を求めざるゝとなく只知らず識らず予に萃り來りし者なり然れども一度予に來りたれば予は其預かりたる金を地も藏むるとなく全力を盡し予が最良と認むる所に從て之を使用せり然れども予は自ら之を嗜好したるに非ず予は常々今も尙重荷即ち神が予に負はせ給ふ重荷として之を擔へり、今諸子よして予が爲す如く万事を爲すの力あり且つ喜んで之を爲す者即ち

第三問題一
傳道者改革

信者の情態

予が此重荷を讓與し得べき一人若くは五人の者を予に示されなば予は深く其人々と諸子とに向て謝し喜んで之を讓與すべしと

第三問即ち「傳道者の充分ある改革」を記述するに先だちメソヂスト教徒に關してウエスレーが意見を知るは望ましきとなれば左に之を記載すべしウエスレー曰く

「メソヂストの傳道者及び信徒の狀況に就て予は他人よりも善く之を知る、世人云ふメソヂスト信徒は他者より勝る所なしと是れ虚説なり、然れども是れ我儕が自らに就て想像するよりも一層眞實に近き言と云ふ可し我儕の中に各個人の信徳甚だしく外面は流れ信仰薄弱にして神との交通篤からず、天よ生活し永生の路を行き凡て世の物に愛着せざると最も少なく、却て世を愛し快樂安逸榮譽利得を欲望すると甚だ多し、而して兄弟の愛少く互に他人を議し妄言毀謗讒詞を弄し徳行の缺けたる實も甚だし僕婢旅行者勞働者工匠煉瓦師にして誰か己が他人よせられんと欲する如く他人に爲す者あるか誰か全力を盡して其爲し得べき丈

の勞働をあず乎又誰か賣買殊に馬を賣るとも於て已れ他人にせられん
 と欲する如く之を他人に爲す者ある乎斯る事を爲さざる者之を目し
 て賤奴となすべし而してメンヂスト賤奴の凡て他の賤奴に勝りて悪き
 者なり又一家族として其信徳の飲けたるは實に耻すべき情態にして殆
 んど凡ての点に於て然るなり我儕若し現今の方向を更へ他の方向を取
 るよあらざればバメンヂスト信徒は一般に他に勝る處幾許もあはるべし
 蓋我儕假令天使の如く説教し得るも單に説教のみよては何の益をもな
 さざればなりと

是れ實は最初のメンヂスト教徒を稱讚したる艶麗なる繪畫にあらすと
 雖も然れども彼等を識り又其言へる如く彼等に就て毫も僻心を有せざる
 者の口より出でしものなり斯る事情よりウエスレーは今其傳道者を警戒
 するの必要を感じり氏の明かみ彼等又告て彼等は説教するの外別よ爲す
 べき事あり若し之をなさざればバメンヂスト信徒は他の者より只少しく勝
 るのみなりと云ひ且つ「我儕は家々を訪問して之を誨へざる可からず」と云

傳道者の責務

へり

ウエスレー曰く「家々を訪問する」とい實に大なる働として最も必要あ
 る者あり蓋多くの信者は久しく説教を聴きたるにも係はらず福音の教
 に就て無智なると未だ嘗て福音を耳にせざる者の如く然り予は可及的
 明白に語ることを勉めまも尙多年予が講説を聴きし者おして未だキリス
 トの神なるか將た人なるか又嬰兒の原罪を有する者あるか將た否らざ
 るかを辨知せざる者往々よして之れ有るを見たり且又改悔信仰及び聖
 徳等の性質を識る者よ至ては甚だ少なかるべし彼等の多くは其心は世
 間屬し而して全く自己の爲み生活しつゝ尙キリストに己等を義とし己
 等を救ふべしとの信任を有せり予の經驗に由て信者に是等の事を熟知
 せしむるには十年間の公會説教よりは寧ろ一時間の親密なる對話の方
 大に勝れることを發見せり……

然るに或の言をなして之をなすには多くの時間を要するを以て若し
 之を實行せば我儕の勉學をなすの時間あきに至らんと云ふ者あり予は

之に答て(一)智識を得るは善き事あり然れども人の靈魂を救ふに更に善き事なり(二)此事をなすに由て爾は神と永遠とに關する最も秀逸なる智識を得べし(三)爾若し朝の時間を適當に用ゐれば他の智識をも得るの充分なる時間を得べし只過多の睡眠及び無益の談話をなさず或は怠り或は時間を徒費する等の事なからんとを勉むべし(四)若し又勉學をなすか又ハ無智なる者を教ふるか孰れか其一をなし得るとせば寧ろ勉學を廢するをすべし予は一靈魂を滅すの罪人たらんよりは寧ろ凡て世の書籍を放棄するを甘んずるなり……

我儕熱心に此方法に従はゞ信者の一層善良ならざるハ我儕が一層智識なく且一層聖ならざるが爲あるとを知るを得ん」と

ウエスレーは斯の如き事即ち只に信者を訪ふのみならず彼等各個人に就て教誨する事殊に信者の兒童等を教誨する事を以てメンヂスト信徒中より不善を除去するに一大良薬となし而して此二者を欲くを以て不善の存する原因となせり信者は完全なる状態を距ると甚だ遠かりしが之れ傳

道者等か智識と聖徳とを缺けたるを以てあり、ウエスレー進んで左の問をなせり

「我儕は何故智識を有せざるか、是を怠惰なるが故なり、我儕は勤勉なれ決して分時も空費する勿れ決して光陰を無益の事に費すなれ又何處でも全く必要ある時間の外分時も多く費すと勿きとの我儕が第一則を忘却せり此事に於ては皆共お過ちありて之なき者の恐くは甚だ僅かならん、誰か一日中曩きよ人の業務の爲に費しゑると同じ時間を今神の事業の爲に費す者あるか、我儕は飽くまで談話す、而して讀書する時は何れも手に觸るゝ者を取て之を讀む、斯る悪弊ハ全然之を矯正せざる可らず、然らざれば全く我儕の事業を放棄すべきなり、然らば之を如何して可ならんか (一)毎日午前(二十四時間中)少なくとも五時間を最も有益なる書籍を讀むに用ゐ、而して之をなすには法則を立て絶へず之をなすべし…… (二)午后ハは順を追て家々に往き、而して内心に於ても外面に於ても共に善良なる基督信徒たらんとを欲して我儕に屬する者には老幼共に各

個人に就て之を教へ諸の肝要なる点を彼等に充分了解する様説示し而して之を彼等の記憶に刻み其心に銘せしむべし、……然れども予ハ之を亦すの天賜即ち才能を有せずと云ふ者あらん、假令其天才を有するも有せざるも之をなさざる可らず然らざればメソヂスト傳道者たるに適せざる者なり、自ら好んで之を爲し得るに至る迄力を盡して之をなし且つ之が爲に熱心に天の賜を祈れ……」

是れウエズレーが傳道者等の智識を増進するの方策にして彼等は毎日少なくとも五時間を最も有益なる書を読むとに費やし午後は家々に往て信者と其兒童とを教誨すべき者にてありしあり

ウエズレーが次よなさんと欲せし事は傳道者の聖徳を増進する事にして即ち左の問をなせり

「何故我儕は一層聖よして宣教者の全精神を呼吸し其性格を有せざるか
答—我儕は方法を用ひずして只目的をのみ瞻望する熱心家たるに由て

巡回傳道者
試問

なり……」
我儕の爰に初めて試用傳道者を全く年會に収入するの際問ふべき問題を知るとを得即ち

「爾キリストを信ぜるか、爾は完全なる方向に進みつゝあるか、爾は現生に於て完全なる愛に達することを期望するか又其事を追求し居るか、爾は神と共事業の爲に全く己を献ぐるとを決心したるか、爾はメソヂストの教理を了知するか、……又會則を知れるか、之を遵守るか、爾は^{カギヤバコ}濃酒等を喫飲せざるか、……爾は補助者の十二則特に第一、第十、及び第十二則を通讀熟考したるか、爾は己が良心の爲に之を守るか、爾は爾が全時を神の事業の爲に用ゆるとを決定したるか、……爾ハ熱心小兒童を教訓し且つ家々を訪問するか、爾は教訓と己が實例とを以て斷食を獎勵するか」

抑斯る問に今尙メソヂスト傳道者が按手禮を領する前に受くべきの問にして若し之を領せんと欲せば是等の問に確定の答をなさざるべからざる

るあり、若しメソヂスト傳道者にして誠實な是等の問に確定の答をなすと
を得ば勤勉、敬虔、成功の点に於ては恐くは我メソヂスト傳道者に勝り得る
者他は之れあらざるべし

此年會はウエスレーが開きたる年會中最も肝要なるものとして斯
く明白適切毫も忌憚假借する所なき處置ありしとも拘はらずウエスレー
が左の言を見れば歡喜と共に驚異の外なきなり其言に曰く「八月十二日(火
曜日)我儕は此日年會を始め金曜日の夜に至て全く終結せり、我儕は未だ
嘗て斯る愉快にして且つ有益なる年會を開きしとあし此年會は愛を以て
始まり愛を以て終り終始嚴肅に神の現在を感せり」と

強盜ウエスレーの家を亂入す

ウエスレーがリーツに於て年會を開きし日ロンドンのウインドミル、ヒ
ルなる氏が家より強盜亂入して麻布、衣服等を盗み去れり、八月二十日ウエ
スレーロンドンに着し同二十五日バスプリストル及びコルンウォール
向て出發し其地(コルンウォール)に留まると二週日其間所夥多の靜肅
なる聽衆に向て説教し九月二十三日プリストルへ歸れり氏はプリストル

「如何なる會計を主人になすべき乎」

及びバスと其周圍の地方に於て四週間を費し十月二十五日ロンドンへ來
り而して左の如く記せり「ロンドンとプリストルの間を往來し而して常に
斯る會衆に向て説教することは寔に樂しきことならん然れども若し然かせば
予の操會者の職を止めらるゝの日に於ては如何なる會計を主人にあすべ
き乎」

ウエスレーが偉大なる勞働は名利の爲めあらざ

能く散漫

人誰もウエスレーが殆んど比類なき勞働に感せざる者なかるべし、而る
に氏が斯る勞働は決して名譽の爲め非ず(何と云へば凡て氏が勞働するに常
に輕蔑と嘲弄の從ふありたればなり)又利得の爲めにも非ず(蓋氏は時々金
の空しき時又當り關門の税を拂ふ爲め或は旅館馬丁の賃錢を拂ふ爲めに
數ペンニー或は數シリングを受けたるの外信者等より何をも受けしとな
し實に氏の其才能と其財をも全く神の事業の爲に獻げしなり、氏の時に
金を有せしとありしも決して之を貯へ置りざりき、トーマス、オリヴァス
曰く「數百千の金は常にウエスレー氏の金囊を通過して一シリングを除さ
ず是れ氏は近き者の親しく見て証する處なり」と、此年即ち一千七百六十六

一例—ミス、
リユーエンと
ウエスレー

年よ於て右の事實を例証すべき著るしき事起れり、是より二年前にウエス
レイドルハムに在る時齡凡そ二十二年の一婦人ミス、リユーエンに會へり
嬢ハ六百パウンドの歳入を有せし人として數月前に神と和らぐと得而
してメツヂストに屬せしが漸々メツヂストに對して濃厚なる友愛の情起
り其父の如きは最も慇懃にウエスレーを待遇し而して氏を以て多くの醫
師より勝れる益を其女に與へし者となせり、彼父はウエスレーの有益なる勸
め及び信者等と交はるの益を得せしめんが爲め其女にロンドンに赴かん
を勧めたり、リユーエン嬢は心臓病の爲に大に身軀の健康を失し此年の
十月に至り數日の病苦の後遂に永き眠り就きしが其最後の辞中左の如き
語あり、オー今予は限りなくキリストと偕に在るべきを知る、然りオー主よ
予は限りなく爾と偕に在るべし、オー限りなく限りなく、然り予は
限りなく爾と偕に在るべし、ウエスレーが嬢を訪はんとて往きし時既に
遅かりしが氏は嬢が臨終の情況を記載し且つ附記して曰く、斯くマルガレ
ット、リユーエンは逝けり、彼女は實に英國に於ける富裕なる壯年婦人の模

舊約聖書小註
を詳く

範聖書に符へる眞個の基督信者よてありしと、一千七百六十五年の終りサ
ウスワルクよ於けるウエスレーは落馬に就ては既に記述せしが其事の後
數ヶ月にしてリユーエン嬢は氏ハ一輛の馬車(兩頭の馬に附して)を贈り後
又遺命して氏に一千パウンドの財を遺せり、斯く氏は該婦人の遺言によ
り一千パウンドを所有するに至りしが是れ蓋し氏が是迄自ら所有したる
最大の金額なるべし、其金は直に飛散し去て殘る處なかりき、氏曰く予は貧
者の爲に立てらるる神の操會者なりと速かき之を貧者に分與せり

當時ウエスレーの會は其數甚だ多くして毎年一回各會を巡視し各種の
事件を整理するの實は容易の業にあらざりき、加之氏は舊約聖書の小註を
も上梓せんと努力せしが單に此事のみにても尋常人の全時を用ひ全力を
致すに充分なる業なりしなり、其他ウエスレーは夫の基督信徒の完全に關
する教理は一層勢力を與へ且つ之を辨護するの必要を有せり、此教理ハ世
人未だ充分に之を了解せず爲に大に批難攻撃を受けたり、是れ氏ハ一千七
百二十五年より一千七百六十五年迄ジョン、ウエスレーが自ら信じ且つ教

一小冊子の出

ウエスレー兄弟及びホヰットフヒールド

ジョン、ウエスレー之傳

四百四

へたる基督信徒の完全なる關する明白なる理由と題する百六十二頁の小冊子の出版ありし所以あり

一千七百六十七年 六十四歳

チャールズ、ウエスレーは荷ロンドンとプリストルに於て説教し且つ夫の秀逸なる三位一体の聖歌及び家族用の聖歌を著述出版し居れり、ウエスレーは暫時ユルチエストル、ノルウヰッチ及びヤルマウスに赴きたるのミにて此年の始め二ヶ月間は概ねロンドンに留り而してアシ、ウエンズデイ(舊の初日)即ち三月四日に於て一友の宅にてホヰットフヒールドと食を共にせり當時ウエスレー兄弟及びホヰットフヒールドの三人の三根の繩にして容易く切斷す可らず其意見の異なりしも其心は一なりき時又或時はウエスレーと其兄弟の互に強く反對の意見を執り爲に一致の働をさすを得ざるとありしも愛は常々彼等の心を支配せしのみならず彼等の言辭行爲をも支配したり

愛國に旅す

ウエスレーは常々愛爾蘭の諸會を訪ふとに心を用ひしが實に愛爾蘭の氏が會を要し氏が會の氏を要せり、英國より愛爾蘭に旅するは今日に在ては些細の事あるもウエスレーの時に在ては大に然らざりき、今氏はプリストルより出帆するの心算なりしも着後便宜の船なきを見急に轉じてリヰルプールに向へり然るも其處よてもプリストルに於けると同様の失望に遭遇し再び轉じて蘇格蘭のポルトパトリックに向ひ三月二十九日其地に着し爰に漸く望を果たせり素より氏の其間説教せざりしも非ずと雖ども然れども其ロンドンを去りしよりポルトパトリックを出帆する迄は三週間の時日を消費せり、半年前ホウエドチスベリに於て休養の爲め氏が遣し置きたる疲馬あり然るに當地の人々冬の間之を使用し爲る皮膚筋骨等諸所より傷害を被ふれるを見たり、斯の如きホウエドチスベリメンデスト信徒の大に恥づべき事たるなり、ケンダルよりポルトパトリックに到る迄氏の強風雨雪に逢ひ殊に道路最も困難を極めソールウエイ江口の如き水馬腹に及べり若しキリストの愛に勵まざるゝとあらずんば何物か能

一千七百六十七年

四百五

く人をして斯る困難危険な堪へしむるを得んや、ウエスレーは三月三十日より七月二十九日迄四ヶ月間愛爾蘭に滞留せしが左に其滞在中の數件を記述すべし

愛爾各地巡回

氏は三月三十一日ベルファスト會の集會をなせり此處のメソヂスト説教所は屠牛所にてありき此地の巡回の當今ボルタマウン及びベルファストの兩巡回中に包有せる一州より成りたるが之より一年を経て此巡回の四季會に於て信者は會費を支辨せんが爲に毎期各一ペニーを出すべしとの議決をなせり、ニユーリーに於てハウエスレーが市場にて説教を始めたる時は聴衆僅かに四人なりしが氏が左に言により後漸く増加したるを見る曰く予が説教を終る前には許多の人々來集しより併し其中には一人も上等社會の人を見受けざりき斯く聴衆の後れて來りたるハ説教よりも一層肝要なる事の爲に支へられたるに由る其肝要なる事どの何ぞや集會に出るの服装是なりと四月十日は記して予はボルタマウンに於て説教せり此所未だ嘗て何等の宗教の煩ひをも受けしとなき所にして予が市

聴衆の説教に
後れし理由

市長説教を禁
ず

街に立ちし時人々四方より來集し而して予が祈りたる時は貧富の別なく皆予が周圍に在て石の上に跪けりと云ひ同十五日は於てハ左の如く云へり四月十五日予はアルマに赴きしが予が説教を始むる半時間前に一吏來て市長は予に命じて足下は此邑に於て説教す可らずとの令を傳へりと云へり然れども予は之説教を試みんと欲して六時に市場に出で而して説教を始めたる際市長來りて何事をか高聲お語り居りしが一人の紳士予に告て足下若し此所にて説教するとを許されずばマクゴフ氏の樹蔭に於て自由に之をなすを得べしと云へり此マクゴフ氏は當市中屈指の紳商なるが自ら來て我儕に道を示せり予ハ市場に於けるより三倍の人々此處に集會したりと思ふ斯く神の不可測なる攝理の善惡より善事を來らせり
此後幾許もなくして愛爾蘭の大監督定住の郡にメソヂスト會起り縦十
四英尺横十二英尺の會場を建てたり此會場は茅葺にして天井なく夫のアルマ寺院と大に其趣を異にせり、スワドリングバールに於てハ聴衆甚だ質朴にして且つ活氣ある人々なりき、ウエスレー説教を始むるや否や一人の

妨害

ジョン、ウエスレー之傳

四百八

羅馬教徒角を吹き始めし一人あり歩み寄て其角を奪ひ而きて無体に其妨害者を打ち伏せたり又キルフィンナンに於ける殆んど之と同様の椿事を記さんにウエスレーが其處にて説教を始めし時紳士体の一壯年力を盡して妨害をなせしを以てウエスレーの同行マンソル氏は穩便に彼を制止せんとせしも彼の之を應ふるに悪口と打撃とを以てしたり然るに一人の邑人出でて其壯士を迎へて之を打倒せりアスロインにてはウエスレーの新講義所を開きしが此所は市長シンプソン氏が自費を以て己の園庭内に建てたる者にして其一端を室を設けて傳道者の用に供せりウエスレー曰く予に此に四日の間休息し只朝夕のみ説教せりと○愛爾蘭の諸會全体に就てはウエスレー當時の狀況に満足する能はざりき氏曰くオーストル地方に於ては大い神の事業増進しコンノートに於ても又レインストル的一部分に於ても共々多少の進歩を見る然れども夫の乳と蜜との流るゝ地マンストルに於ては此一二年の間に事業大に退歩せりと

氏ハ七月二十九日ドラグハデーより乗船して蘇格蘭に航りグラスゴー

愛爾蘭會の狀況

蘇國に就て

ロンドン年會

新派當時の大勢

アズベリー試
用傳道者とな
る

「我儕をして
皆一事業の人
たらしめよ」

エデンボロー及びダンバールを経て八月六日ニューキヤソルに着し同十二日年會を開かんが爲にニューキヤソルより馬車に乗る二日にしてロンドンに着せり氏記して曰く八月十六日(火曜日)此日年會を開き補助者及び定數の傳道者を會せり木曜日金曜日に及んでホットフヒール、ハウオル、ハリスの諸氏及び許多の吏員、定住傳道者等來會す、愛と和合は終始年會を一貫せり然れども我儕の尙一層の愛と聖とを要す故に斷へず「主よ我儕に信を益させよ」と號呼せざる可らずと、メンヂスト教派の創立以來此年迄凡て二十八年を經過せし其結果として當時四十一の巡回、百〇四人の巡回傳道者、二万五千九百十一人の會友を有せり、夫の北米合衆國メソヂスト監督として其名を知られたるフランシス、アズベリーが始めて試用傳道者として收入されしは實に此年會ありき、ウエスレーは此年會録事を閉するに凡てメンヂスト傳道者たる者の終生心中に銘刻すべき左の一旬を以てせり曰く「我儕をして皆一事業の人たらしめよ」只一事のみ執掌する者の意我儕の單に己が靈魂と我儕を聽く者の靈魂とを救はんが爲に世

一千七百六十七年

四百九

小旅行

に在る者なり」と

ウエスレーは年會を終へて八月二十四日英國の西部に向て出發し暫時
 ウェールズに旅し而してシーメルセット郡の諸會の過半を巡訪せり九月
 二十六日舊友ブラックウェル夫人の死を聞か急にロンドンに歸
 りしが病狀稍々舊に復したるを見二日の后復プリストルに向て出發せり氏
 は再び其途を轉じてサウスアンプトン及びボルツマウスよりロンドンに
 歸り十月二十日コルチエストルに向て出發し其處にて溫和にして濃愛なる
 人々の中に楽しく三日を送れり其後ロンドンに歸り十月二十六日氏所
 謂ノルスアンプトンシール及びベッドフォールドシールの小旅行を始め五
 日よして還きり十一月一日ケント及びブンスセックスの諸會を訪はんが爲
 に出發し週末に至てロンドンに歸り同三十日又ノルウヰッチに向て出發
 し十二月十二日ロンドンに歸り后暫時シールテスに赴きたるのみにて殘
 餘の時日の之をロンドンに於て費せり

一千七百六十八年 六十五歳

此年に於ける
チャールズ及
びホヰットフ
ヒールド

此年チャールズ、ウエスレーは其家族をプリストルよりロンドンに移し
 爾後ロンドンを以て其居處と定めたり、ホヰットフヒールドは此年の前半
 を首府ロンドンに費し七月に至り蘇格蘭に向て出發せしが凡そ一ヶ月に
 して、八月九日お就眠せし其妻を葬らんが爲にロンドンに歸れり氏は其身
 体益々衰へしも尙續ひて各所を巡回し力の限り傳道に奔走せり

ウエスレーが當年初度の旅行は二月十八日ロンドンよりチャサムに赴
 きたる旅行なり氏記して曰く二月十八日(土曜日)予は頻り追まられて
 劇しき東風を冒してチャサムに旅し午后六時の頃人々の會堂と稱ふる兵
 舎(此會場)一大室にして軍人の牧師其中にて祈禱を誦し又時々説教をな
 せりお於て説教せしが暫時にして群衆の爲に室内は恰も暖爐の如く熱
 せり聽衆中數百の兵卒ありしが彼等はホストン氏云へる如く總て耳お
 して殆んど息をもせずして謹聽せり朝五時より六時の間に於てそら尙ほ
 室内は人を以て暖かなる程なりしが此時にも聽衆中二百人餘は兵卒あり
 しを知る是等兵卒の多くは既に善き戰を戦ひ居きりとウエスレーがチャ

チャサムに於
けるウエスレ

一千七百六十八年

サムに赴きたるは是を以て始めとす然れども是れ其終は非りしなり氏
と終始兵卒を愛し常に彼等と傳道するを喜び

北部巡回

三月六日氏は五ヶ月に亘る北部旅行を始めし今其間に起りたる數事
件を記載せん。グローセストルに於ては喧噪害悪なる頑民ありしも善
良なる市長の鎮壓する所となり、ケルテンハムに於ては教長及びアナパ
テスト教師の反對ありしにも係はらず一般に好景況を見出し、而してウ
ルセストルに於ける一の困難は郊外に集まるは餘り寒く去りてウエス
レーが聴衆を容るゝに足る大ある會場ありしとありしが遂に一友の穀
舎を得て會場に充てたり(其家は多くの會堂に勝りて濶大なり)。イヴ
ヤムに於ては英國教會の會堂に於て説教し、ペウオルスに於ても同様
すべきとを副教師より托せられしも期に至り教會の長官より妨止せられ
遂に郊外に於て教を説けり、夫の多年の間騒がしむりしボルミン
グハムも剛膽なる市長の鎮壓に由り當時全く靜謐に歸せり、ウエス
レーは此處にてジョー・ブリッジンスと遇ひしが氏は當時百七歳の老翁なりしも尙は獨

百七歳の老翁

歩して説教に出るを得且つ未だ五官の感覺理會力等の衰老するを見ず、三
月二十日(日曜日)はウエズレーウエスト、プロムウヰッチに於て説教せしが
此處に凡そ二十人の會友ある一小會ありて夫のフランシス、アズベリー
(彼は此近傍の教区内に生る之を主管せり、ウォルツァンハンプトンに於て
は五年前に暴民等全くメソヂスト會場を破壊し而して之に關りたる四
人の暴徒獄に投せられしとありしが今はウエズレーが云へる如く全く靜
かよして只家に入るを得ざりし者の聲を暫時少しく耳おしたるのみ、而
して説教後數百の人々予の宿所迄予に追隨し來りしも是れ只予を見んと
するの外他あらざりしなり、氏は三月二十五日ボルスレムに於て新講義所
を開き、コンダルトンに於ては雅致にして熱心なる聴衆を得たり此地の會
友は其善良なる行爲により全邑人民の稱讚と好意を得しも教會の教師よ
りは嫌惡を蒙れり即ち其教師の向後メソヂスト説教者の説教を聴かざる
とを誓約する者も非ざれば聖餐を施すことを拒めり、ウエズレーは三月二十
七日の日曜日マクレス、フヒールドに於て費し其處にて數千の人民に向

て説教せり數年前ヨヨビールン及びエリザベスクリコロ四十人を容るゝ一の會場を開き而して其會場より放逐さるゝの虞なからしめんが爲に四十年間の保証契約をなせり彼等が始めて此家に到りし時クリコロ夫人ビールンに向て「ア・ヨ・ヨ、我儂は決して此家を盈たそを得ざるべし何となまば此家は四十人を容るゝあり」と云ひしかば彼答て「心を強くされよ、予之を保証すべし」と云ひしが果して其言の如く一ヶ月を出でずして會場狹隘を感ずるに至り遂に天井に穴をわけ以て説教者をして同時に上下の室に在る聽衆に向て説教せしむるに至れり

四月六日ウエスレーリヴルプールより來り而して左の如く云へり「リヴルプールよては夥多の聽衆聚まりし彼等ハ朝夕の集會共一般に善良ある舉動を表はせり此地の會は是迄嘗て見ざりし多數の會友を有し且つ甚だ活潑なりき」四月十日の日曜日には氏ハ説教の後會衆ハ一パウンド四シリング九ペンスの集金をなし又神の事業の爲に會友及び一般の會衆より義捐金を募り此年九月一日より翌年一月十六日迄は十パウンド十七シリン

リヴルプール會

グ五ペンスを得たり斯の如き者はれ百年前のリヴルプールメソヂストの狀況よてありき四月十九日グラスゴーに着し而して左の如く云へり「我儂は蘇格蘭に於て多く斯る會を有せざるあり會友の多分は只お全く神と和ぎを得ざるのミからず續ひて神の光の中に行ゆり……蘇國に留まると一ヶ月おして五月十八日ホルウィックに達し夫より進んでニューキヤスルに到り其近傍に於て十日を費せり斯て五月三十一日ウィールデール、アイースデール及びスウェールデールに向て出發し是等の處にて次の四日間を費やし六月十三日お至りニューキヤスルを去て南方に向ひ六週日の間ヨルクシャー及びリンコンシャーの諸會を巡訪せり氏は其南方旅行中マデレーに於て復び其友フレツチエルを訪へり、フレツチエルの己の厨房をメソヂスト講義所となし以てウエスレーの傳道者及び己が補助者の説教所を供し又自らウエスレーが教理の辨護論即ち是迄出版さざしものゝ中にて最も強健なる辨護論を筆せり、ウエスレーはマデレーよりシユルースベリーに赴きしが此處ハ一千七百四十四年にロンドンに於てメソ

ウエスレー、
フレツチエルを
マデレーに訪
ふ

貧しき一婦人
の働き

ヂストの説教に由て改悔し當時他人の靴足袋を繕るひ以て僅かに生計を營み居たる貧しき一婦人の住せる處にして該婦人は斯る働の爲に往く處の家々に於て己が宗教上の經驗を語り説教を読み祈禱を祈し而して當時己は十六人乃至十八人の一小會を組織し居たりウエスレーシユルースベリーを去て直ニウエールスホ入り而してペンブロークに到りセントダニエルスに於て祈禱と説教とをなし且つ嚴肅なる會衆に聖餐を施し以て此地のメソヂスト信者間に在りたる或誤解を除去せんを勉め而して互に充分なる好意好情を以て其處を去り、當地のメソヂスト教派は七年前夫のトーマス、テロールが山川を跋涉し沼澤を横ざり百難を排し熱心と克己の精神とに由て罪人を救はんを盡力したる時より起りしものあり

ウエスレー病妻をロンドンに見る

ウエスレーは五ヶ月餘の旅行の後八月十三日(土曜日)夜十一時過る頃ブリストルに來着せり、氏は二日の後に年會を開くべき筈ありしが着后直ニロンドンにありし妻の病甚だ危篤なりとの報を得直にロンドンに向て出發し、氏は傳道者等を會する途に四十八時間を有せし、其中二十四時間の安息日にてありき、而してロンドン迄の往復の里程は二百廿八英里にして其道路は甚だ安易ならず又旅行の便も現今に比すれば宵壤の差あり殊に氏は當時己に六十五歳餘ふして今殆んど六ヶ月間の旅行説教等をなしたるなれば此少數時間の休息をなすは敢て不當の事とあらざりしなるべしと雖ども妻の病苦を聞き其妻の平常氏に對して不親切なりしとも拘らず、斯く直に出發せり而して安息日の多分の旅行に費し月曜日午前一時にロンドンに着せり然るに危篤の時期既に経過したるを見着後一時間を出でずしてロンドンを發し急行して同日即ち月曜日の午后にブリストルに着せり、氏は其翌朝年會を開き金曜日に閉會せしが其會を閉づるに當り浩歎して「嗚呼我儕の如何にして多くの工人を得べき乎只稼主に呼び求むるの外なし」と云へり

此一年に於ける會友の増加は四百三十人なりしがウエスレーは之を以て満足せず遂に左の問題を提出せり

「所々に於て神の事業は全く靜止滯滞するの有様なり今之を復興し且

一千七百六十八年

四百十七

事業擴張の方策

ブリストル年會

の擴張するの法如何

答、一、既又出版さきたる書籍の此事業に益を與へると甚だ多し此後も若し適當よ之の頒布よ力を盡さば必ず好結果あるべし

二、一層勵んで屋外説教を勉むべし此なくして何處に於ても神の事業の増進を見ると甚だ難かるべし

三、絶へず午前五時の説教をなして之を廢す可らず何處に於ても廿人の聴衆あらば之をなすべし……

四、何處に於ても既に四人の男子若くは女子の信者あらば之を一のバンド(組)となすべし又バンドある處にて何處に之を會し然して會中の人皆腹藏多く語るとを勸むべし

五、メソヂストの全條則を嚴格に履行すべし……

六、我儕の唱歌を儀式的に流れざる様注意すべし否らざれば識らず知らず其弊に陥るとあるべし……

七、凡ての會に於て毎期の斷食を守らしむべし

八、我儕の中誰か一年中毎金曜日に斷食をなすか又誰か一度おて之をなす者あるか……我儕の年會の記録に記載しある方法に従て家々を訪問するか諸子が無益の談話に費す時間の半を此訪問に費せ然らば之をなすに充分なる時間を得べし而して殊に信者を鞏固よし其信徳を建つる爲よ之を爲せ諸子若し斯の如く勉めば神の事業は諸子の手に依て榮へん……各大市邑に於ては必ず一週中一時間を兒童の爲よ費すべし諸子之を好むも好まざるも必ず之を勉め又其訪ふたる家よ於て兒童を見れば必ず之と語り又彼等の爲に熱心祈るべし凡て父母たる者を其家に於て勵んで教誨し切よ勸勵をべし……

ウエスレーは既に殆んど六ヶ月間を旅行に費せし今復此プリストル年會を終るや否や直ふコロンウオールに向て出發し其處よ八月二十六日より九月十八日迄滞在せりコロンウオールに於ける氏の働きの實に驚くべきものにして齡既よ六十六歳なりしも八日の間毎日三四回の説教多くは屋外に於てをなし而して尙自ら予は終始少しも疲勞を感せざりしと

コロンウオールに於ける働き及び小旅行

云へり、九月二十四日プリストルプリストルも若し數日間を近傍の村邑巡回巡回に費し十月二十四日ロンドンロンドンに向て出發し而して十一月の初週をヘルトフォードヘルトフォード、ベツドフォールドベツドフォールド及びノルスアンプトンノルスアンプトンの巡回傳道巡回傳道、次週をオックスフォオックスフォ、ルドシル諸會ルドシル諸會の訪問訪問、第三週をロンドン諸組ロンドン諸組の集會集會に、第四週をケントの旅行旅行に、而して剩餘の時日を専ら村邑村邑に於て費せり

一千七百六十九年 六十六歳

ウエスレーウエスレーは此年の一月をロンドン諸組ロンドン諸組の集會集會及びシルチス、チャサムシルチス、チャサムの巡回巡回に、二月をノルフオルクノルフオルクの旅行旅行に費し而して三月六日愛爾蘭愛爾蘭に向て出發し同二十二日ダブリンダブリンに若し其處にてはセーマス、モルガンセーマス、モルガンとトーマス、オリヅルストーマス、オリヅルスとの間間に爭論爭論起り爲に其會其會は少少からざる損失損失を蒙れり、四月三日ダブリンダブリンを去て諸方の巡回巡回を始め而してアルマアルマに於ては始めて説教説教せり、コルクコルクの會會に過る七年の間會友次第會友次第に減少し當時は於ては四百人より百九十八人四百人より百九十八人に減少せり、又ホルタリーホルタリー、リントンリントンの會會は一時は百三十人の會友會友を有せし、今在る者は僅か、二十四人二十四人に過ぎざりき

愛國に航す

愛國に於て砂石棍棒の時代既に過去

ウエスレーウエスレーは愛國の各地巡回巡回に十四週を費せし、其間或處にては會の衰微衰微を見て多少失望失望せし、一般に氏の働き働き驚くべき好果好果を現はし而して何處何處に於ても殘暴殘暴ある迫害迫害に遇ふとなかりき、但時に輕躁輕躁ある男女男女の嘲笑嘲笑ありしも、砂石棍棒砂石棍棒の時代は既に經過經過したり、氏氏は七月十五日ダブリンダブリンに歸り此國の傳道者傳道者を會して年會年會を開き而して八月一日にリーツリーツに於て開くべき英國年會英國年會の爲に七月二十四日同國同國に向て出帆出帆せり、○七月二十九日七月二十九日（土曜日に）リーツリーツに若し翌日曜日翌日曜日に於て、ヘンリー、クルックヘンリー、クルック氏の爲に、ハンズレハンズレットの會堂會堂に於て午前午後兩度の説教説教をなせり、クルッククルック氏はウエスレーウエスレー兄弟の舊友舊友にして、チャールス、ウエスレーチャールス、ウエスレーは既に一千七百五十六年一千七百五十六年に右會堂會堂に於て説教説教せしとあり、此時チャールスチャールスの聖餐聖餐に與かる者數百人者數百人あるとを云ひしが、其中の多くのクルッククルック氏の忠實忠實ある働き働きに由て改悔改悔せし者あり、○リーツリーツの年會年會は八月一日八月一日に開きしが、ウエスレーウエスレーは此年會年會に就て「我儕の未だ嘗て斯る好年會好年會を有せしとなし」と云へり、全王國全王國中中に於てウエスレーウエスレーが巡回傳道者巡回傳道者の數は總て一百十一人一百十一人にして、宣教師宣教師を亞米利加亞米利加に派遣す

リーツ年會

一千七百七十九年

四百二十一

始て官教師を
米國に遷る

米國メソヂス
トの起原

四百二十二
ジョン・ウエスレー之傳
る爲に鳩集したる金額は七十パウンド、其内五十パウンドはニューヨルクの講義所に關する負債償却に配當されたり、メソヂスト教派の當時既ニ西印度、ニューファウンドランド、ブラジルタル、及び亞米利加等へ擴布せしむ亞米利加の外補助を要する所をかゝりき、

今より四年前に愛爾蘭よりニューヨルクに移住せし小數のメソヂスト信徒中ホフヒリツア、エンベリーある者あり又一千七百六十六年に同地に移住したるヘック氏の家族(メソヂスト)中にバルバラ、ヘック夫人ありしが夫人は先移住者の大ニ敬虔の徳を失却したるを見て甚く之を憂ひフヒリツア、エンベリーは彼等を教導せんことを請へり、エンベリー之を諾し彼等も亦氏と教を説くことを始めしがアルバニーの兵營長キャプテンウエツプも亦氏と合同して共に力を盡せり彼等講義所を建て會を組織し而して英國よりの補助を請へり、故に一千七百六十九年の年會に於て第十三間に左の間あるを見る。「我儕はニューヨルクに在て既に一の説教所を建設したる兄弟等より來て我儕を助けよとの切迫なる招喚を得たり今誰か喜んで此招きに

應ずべき乎」答、「リチャルド、ポールドマン及びジョセフ、ピルムール」問

ポールドマン
ピルムールの
二人米國に航
す

彼等が米國に
於ける働き

「我儕は兄弟たるの愛の表証として尙何を爲し得べし乎」答、「我儕の今宜しく我儕の中に於て義捐金を募るべし、此事直ニ施行され而して其鳩集金の中五十パウンドを以てニューヨルクある兄弟等の負債を償却すべしともし凡そ二十パウンドを以て二人の兄弟等と與へて其路用を助くるととなせり」○斯くてポールドマンとピルムールの二人は亞米利加に向て出帆せしが九週間航海の後ピルムールはフヒラデルフヒヤに於てポールドマンはニューヨルクに於て各其事業に着手せりフヒラデルフヒヤに於てはキャプテンウエツプと凡そ百人の會友を有するメソヂスト會とありしがピルムールは競馬場の宏大なる觀臺より是等の會友及び其他數千の聽衆に向て説教するを始め、ポールドマンはニューヨルクに於て講義所は凡そ一千七百の聽衆を容るゝに足るも尙會衆の三分の一以上を容るゝ能はずして他の三分の二の屋外より聽きしとを云へり、我儕の年會記録に依り二年の後に於て米國メソヂスト信徒の數の總て三百十六人なりしを知

る

ウエスレープリストルに向て出發し八月二十六日其地に着し夫よりコ
 ルンウオールも赴き僅か一週日の間に許多の會を歴訪せり氏プリスト
 ルに歸りキングスウード學校に狀況を査察し而して左の如く記せり「當今
 の憂患は兒童増加の事なり予が願望は三十人ありしも當時殆んど五十人
 ありて夫が爲に教師等の荷は一層重くあれり實は小數の生徒を整然たる
 規律を以て制御教導する如く多數の者を統御するは殆んど出來可らざる
 事なり然りと雖も此學校は此國に於て予が知る處の他の學校よりも多少眞の
 基督教主義の學校たるに近きを見るなり」氏は次月をプリストルの近傍に
 費せしが其間種々の困難に遭遇しブラッドフォルトに於ては喧噪なる乱
 民に圍繞されたり氏曰く紳士と稱せらるる一人衣袋に腐卵を充たせしが少
 壯なる一人一齊に之を打潰し爲に其紳士の香油程には馨ばしからざる嗅
 氣を以て全身を掩はれたり」と氏は十月十四日ロンドンに歸りしが二日の後
 又オックスフォールドシールに向て出發し而して此月の末週はメッセスト

一紳士

キングスウー
ド學校

ル及び他の諸邑に費せり氏の五日間の巡回中に大に隔離したる諸所に於
 て十七回に下らざる説教を爲せり十一月の始めにノルフォルクに赴き月
 末に至り舊友ペロチットをショールハムに訪ひ而して其會堂に於て二回
 の説教をなせり此所にも此副教師の厨房に於て毎金曜日の夜にメッセ
 トの説教あり又メッセスト會の設けありたり氏はケント及びソッセック
 スに暫時の旅行をなせし外此年の之をロンドンに費せり氏は其際在米の
 ポールドマン及びピルムールより書狀を得て之をロンドン會の前にお讀
 せり其書中切にウエスレーが米國に來らんとを望むの請求ありしが之れ
 氏に取りては最も出來難き事なりしあり然れども氏は之を輕卒に拒まず
 して能く熟考せり

一千七百七十年 六十七歳

ウエスレーはロンドンに於て契約會を以て此年を迎へしが之に會した
 るメッセスト信徒一千八百人實は壯大ある集會にてありき

氏の零碎の閑時を拾ふて讀書し而して著述及び著書に就て例の斬新に

ウエスレーの
評言

一千七百七十年

四百二十五

して趣味ある批評をなせり。一日ドクトルボルチットの「地球論」を通讀して左の如く記せり。氏は其所説に於ても書体に於ても共に第一流の著者なり。氏が文章明晰真率にして雄健雅致に富む。又其説の奇抜にして終始一貫毫も自ら矛盾する所なきといへば誰も之を否むと能はざるべし。又ルソーの教育論を讀みしが之に就ては左の如く云へり。然るに予は大に失望せり。氏は其言ふ所は皆默示なりと揚言せしが其默示の多くは明白なる虚偽なり。例へば「兒童は決して老人を愛せず」と云ふが如し。併し予は氏が誤まれる意見よりは一層其心ウツエ情を就て不服なり。氏の一個の怨恨者たるに過ぎず。又ゾオルラールは殆んど同類の大詐偽師なり。然れどもルソーは其愚癡と驕傲とを隠くすに少しく巧なるを以て猶世上に愛顧せらるゝなり。其著書の如きに至りては道理に基するも非らざる経験に依るも非ず。實に奇怪極まれりと云ふべし。其勸言の善き者は全く普通一般のものにして只新語法を以て粧粉したるのみ而して氏が獨得の新説は虚傲其物より一層軽く實質なきものあり。然れども聖書を信せざる程に賢明なるもの一筆に成れる

スウェーデン
ボルグ

もの中又は斯る事を發見すべし。予は予が平素預期せし所あり。○男爵エマニエル、スウェーデンボルグの大に文學上に功勞ある人にして其が爲にチャールス十二世の敬重する所となり而して又オプサル、ストックホルム、及びヒートルスポルグ等の中學の學士會員たる榮譽を得。一千七百四十三年ロンドンに來りてフェットル、レーンのモレヅイヤン會に出入せしが狂して種々の幻想の書を筆し之を出版せり而して其等の書中に「スウェーデンボルグ・ヂヤンス」(スウェーデンボルグの徒)の信仰簡條をも含有せり。ウエスレー記して曰く「予は男爵スウェーデンボルグの著書を讀み沈思すると久し予は氏の敬虔なる人にして剛健なる智力該博なる學識あり且つ深く己を信する人なることを信じ大に心を氏に傾けたり。然るも奈何せん氏が幻想に耽れも其性情を徴するも足り遂に古來書を筆したる狂人中の最も才智あり活潑にして且つ爽快なるもの一人なるを而して其思想たる實に荒唐無稽聖經と常識を離るる甚だ遠く殆んどトム、サム或ハジャック、ジ、ジャイアント、キラルの小説と同一筆法なり。是に於て予が景慕の念頗る消ゆ」とスウェーデン

ンボルグは此后二年ふして死しロンドンのツェルクローズ、スクエールなるスウェディン教會に於て葬式を行へり

ウエスレーは當時米國に在て熱心傳道を從事せる教友ホヰットフヒ
ールドに一書翰を送りしが之れ氏が此忠實なる同役者を送りたる最後の書翰とありき、既に述べし如くウエスレーは身親ら米の諸會を訪はんとを勧められしが已も亦大に彼地に往かんとを願へり、當時ピルムールはニューヨルクにポールドマンはフヒラデルフヒヤに在て共に力の限り傳道を奔走し爲ふ若干の黒人をも改悔せしむるに至り事業益々進歩せしが此の際是れ等の若き傳道者ポールドマンは年會に在ると七年、ピルムールは五年の大に勸諭と助力とを望めり、ウエスレーは今殆んど七十歳に達せしも若し渡米の途の氏が前より開くるとあらば恰も夫のシヨールハムの懇切なる款待を爲すペロテットの宅に往くが如く一躍して大西洋を越へしあるべしと雖ども障礙山の如く聳へ到底之を除くと能はざりしなり即ち氏若し往かば不在中英、國、蘇、國、ウエール、ス、及び愛國の諸會を總轄する

ウエスレーの米行の困難

北部巡回

者なきのみならず信者等ハ甚く之れに反對せり

ウエスレーは三月五日に於て向ふ五ヶ月に亘る北部旅行を始めニューベリーに來て左の如く記せり、予ハ此所にて説教すると切に求められたり、併し其場所なきを奈何せん英國教會の脱會者等は其會場に於て予が説教するとを許さず由て或人は會遊場を借らんとせしも此邑の市長ハ之れを斯る事に用ひて冒瀆するとを許さざりき遂に予ハ一の大にして且つ便宜なる工場を用ひしも素より夥多の聴衆を容るゝに足らざりしかり然れども凡そ聴くとを得し者ハ皆靜肅を傾聴せり、氏ハニューベリーよりプリストル、グローセストル、ホルミングハム、及びウエドテスベリーに進み夫より途をスタフォードシル及ビチエシールに取り三月の終りまで至てマンチエストルに著し而して其日誌中左の記載をなせり、他の旅行は於けるが如く此旅行に於ても予ハ世間一般に行れ居る誤謬を認識せり、凡そ三十年前予は何故も孰きの馬も背上に予が讀書する際墮倒せざるかを疑しが予ハ他の時とは他の用あるを以て歴史、詩、哲學等の書ハ通常馬背にて讀めり

馬の墮倒を防ぐ事成就て

是全く左の理由に由らざる可らざるを發見せり即讀書の際は手綱を馬の頸に放ち置くの一事是なり予の自ら之を驗またるに十萬英里以上の馬上旅行中(仮令如何になし居るとも顛倒すると免れざる二馬の外)未だ嘗て予が手綱を緩めし際に顛倒したる馬あるを記憶せず是に由て之を觀れば手綱を緊く保たば以て馬の顛倒を防ぐべしとの忘想の大なる誤謬なりと云はざる可らず予の反復之を驗めしたると國中多の人々を譲らざるなり若し馬の顛倒を防ぐの法ありとせば手綱を緩やかか保つとい即ち其法なるべし然れども馬の性質は由りては此法も亦効を奏すると能はざるべし

各地巡回

氏はマンチエストルよりリザルプーン、ホソイトヘーヴン、及びカライルに進み其間の各所にて説教せしがカライルに就てはカライルに於ては諸事尙幼稚にして其會の僅かに十五人の會友より成れりと云へり此邑のメソヂスト教派の収税官ロベルト、ベルの開創する所にして其禮拜所の貨車を容るゝ小舎ありき殆んど毎會暴民等集まり來りて瓦石を投じ信者を苦しめ或の之を侮辱せり、ウエスレーカライルを去り四月廿日エデンホロー

インヴオルネ
スメソヂスト
の起原

に着し左の如く云へり予の衆人の除名せんとしよる人々を挽回して之を改造鞏固ならしめんとを勉めたり……聽衆は殆んど以前と異なるをなかりしも會友の數は予が前に來訪せし時は百六十餘人なりしが今は凡そ五十の小數に減せり……氏は夫よりペルス、メンケルド及びインヴオルネスに赴きしがインヴオルネスに於てはベンジャミン、チャペル及びウィリヤム、チャペルの二人ロンドンに歸らんと欲して三ヶ月間船便を待ち合たる其間毎夜人を集めて共に唱歌祈禱をなせり斯の如くしてインヴオルネスにメソヂスト教派を起したるベンジャミン、チャペルは車輪製造者として後年又至りプリンス、エドワルド島に於て最初メソヂスト信徒たるの榮譽を得たり、ウエスレーのインヴオルネス及びチールンに於けるが如くアベルデインに於ても會堂にて説教せり、アルブロースは創立以來僅か九ヶ月に過ぎずと雖どもアベルデインの會を除き蘇國中最大の會にてありき、ダンバールに於ては國中最も爽快なる新講義所と於て説教し而して五月二十一日タイン河畔のニューキヤスナルに着せり

博士ランゲル

我儕は今暫らくウエスレーが旅行記事を止めて爰に一の注意すべき書翰を挿入すべし、過る二年の中にウエスレー、ブリュッセルに於てスウヰデンの高貴なる法教師博士ランゲル氏に邂逅せしが氏は輒近ペンシャルヴエニヤ、於て數年を送りし人にて夫のポールドマン及びピルムールが米國に渡航する凡そ十二ヶ月前にウエスレーに傳道者を米國に送らんとを切よく求めしとあり且又メソヂスト教派に對する己が友愛を表せんが爲にブリュッセルの講義所於てメソヂストの會衆に向て説教せしとありしがウエスレーは其説教に就て左の如く云へり「氏の説く所、教理の正確なるを体裁の單純なるに又其活氣あると由て聽衆一般に満足を興へり」氏は當時スウヰデンに在りしがウエスレーに左の書翰を送れり

氏ウエスレーに寄せたる書翰

「キリスト、イエスに在て最も親愛ある兄弟よ小生の嘗て貴會に於て得たる慰安も就て常にお最も温かある感謝の念を有せんことを希望す、肉躰の離れ居るも小生の心は屢々足下等と共に在ることお御座候、小生の英國を去て先づゴッセンボルクに着し而して誠に敬愛すべき監督ドクトル

ランボルク氏の宅に宿り申候、博士は小生と共に政府にて法教師を務めたる人にて又足下に對し大に好意を持ち居られ候、同氏の英國へ赴きし際足下の説教を聴かれしとある由、小生の足下等の著書を氏に贈りしに氏の之を讀んで大に喜ばれ候而して氏は足下に氏のお好意をも併せて通すべき様小生に請托被致候

小生のストックホルムに在ると今既に一年餘にして王の法教師を勤め傍ら此地の諸會堂にて説教致し居り候、小生が口より申すは少しく憚りあると候へども、其説教は實に常ならぬ成功の從ふありて小生が説教する時は毎に聽衆會堂お溢れ申候、又王は最期の病床も小生を召して其密議者とし小生の語りを救の道を喜んで受容し而して主に在て安く世を逝り給ひ候が此事は王の一家も大なる益と慰籍とを興へ申候、皇后の英國の人にて大に敬虔なる方に御坐候小生は之が宗教上に大なる好結果を來せしに至らんとを切に希望致候

去る大會に於て若干の教師(其中に四人の監督も之れあり候)は實行

的の宗教を擴布する會の組織に關する小生の企圖に同意被致候、小生は其計畫の適宜に確定するや否や世界の各部と連合する積りに御坐候へば其節は足下の御連合をも得るの榮を得んとを希望致候

天の攝理と小生を大に樞要なる位地に置のんとするの有様よて小生は將に王の施主アパトナル王の施濟を管ざる官と指定されんとするの場台よて有之候が是は一般宗教も取ても甚だ肝要ある職務又御坐候終りおのぞみ足下に希望致候事は足下が御祈の中に小生を記憶されんことと華翰を惠まれんとし御坐候、足下の最も親愛なる兄弟

在ストツクホルム

一千七百七十年五月五日

シー、エム、ランゲル

ウエスレーは六月十一日ニューキヤソルを去りロンドンに向ひしが其旅行中多くは一日三回の説教をなせり、ラフボローの市場に於ては數千の聽衆に向て説教せしが場中の靜肅なりしを恰も深夜の如くなりき氏が此地にて説教せしは之を始となすも之より四年前より氏の傳道者此地に來

りて傳道せしとあり而して其傳道に由て改悔したる者の中にトマス、クックなる者ありしが此人の謙遜認罪克己等よ至ては最初のメツヂスト教徒中にも殆んど並びなき程ふて三ヶ月の間單に大麥のパンと水のみにて生活し加之屢々數日間全く食を斷ち又終夜祈禱に費すとありたり、且つ最も粗質の衣服を着して變換するとなく或人外套を着んとを勧めしに答て「足下若し一衣に飲くる者一人もなきとを予よ証明するを得ば予或は二衣を着るとあるべし」と云ひしとぞ此人の十年の間、其共に語りし凡ての人々の爲に祈り、又終生節を變ずるとなく謙遜と聖と愛と敬虔とを以て世を逝りしが臨終に當り或人の問よ對て其平素の特質なる謙卑を以て「オー否、予が爲にの葬式の説教を要せず」と答へたりと云ふ

ウエスレーの五ヶ月間巡回の後即ち八月二日(木曜日)ロンドンに歸り同七日よ年會を開けり當時メツヂスト巡回の數は五十にして其中の一は米國なりき、又百二十の巡回傳道者二万九千四百〇六人の會友ありて講義所建築費の負債償却の爲よ此一年間の義捐金額の殆んど二千パウンドなり

き然れども講義所新築の爲は尙ほ凡そ同額の負債を餘せり斯くウエスレーの諸講義所は氏の爲に最大の重荷とされり依て來る一年間に於ては全金額を集めたる後にあらざれば一切新講義所を建て又は舊者の改作變更等をなさざるべきとに決せりウエスレー或傳道者も今尙商業を營むを知り此年會に於て向後反物、鐵器、丸藥、及び止痛藥等の商業を止めざる者ハ其職を免ずるとに決せり但しトーマス、ハンビー、ジョン、オリヴァ、及びセームス、オツデーの如く船舶に關係ある者は此限をわらずウエスレーは年會を終りコルンウォールに向て出發し其地に三週間留まりてプリストルムを歸り其所にて會の願により隔日曜日主の晚餐を行ふべきとを約せり此約束によれを一人の接手禮を受けたる教師プリストル又ハ其近傍に住するの必要ありしあり此年の剩餘ハ例のオックスフォールド、シール、マッドフォールド、シール、ノルスマン、プトン、シール、ヘルトフォールド、シール、ノルfolk、及びケントの巡回に費せり

ホヰットフヒールドの死

ホヰットフヒールドは九月二十九日(土曜日)新英國のポストンに赴く途

中人々の請によりエキセトルに於て殆んど二時間の郊外説教をなせしが翌朝六時より既に世を去り人となれり氏が最後の説教を始めんとするに當り一友來りて君よ君は講壇より上るより寧ろ臥牀より上る可き者なりと云ひしが氏は答て實に然りと云ひ身を回へして合掌し天を仰ひて「主イエスよ、我ハ爾の業務に在て疲れたり然れども爾の業務に就て疲れたるに非ず(謂意ろは我ハ爾の業務に執掌して遂に身体疲弱せり然れども之を爲すに倦み疲れたるに非ず)と云へり氏は其死せし所(ニューベリポルト)に於て甚だ鄭重に葬られしが此日邑中哀悼の鐘聲遠近に響き港中の船艦亦砲を放ち旗を下げて以て追悼の意を表し會堂は喪布を垂れ、シヨールシアの店頭には黒布を垂るに至り、知事及び領事等も喪服を着けて公館に會し列をなして葬儀の説教に赴けり

ウエスレーの遺體説教

元來ホヰットフヒールドは自ら「トツテンハム、コールド、チャペル」に葬られんとを望み且其會衆にウエスレー兄弟も氏の傍らに葬られんとを望む由を告げしとあり、ジヨス氏は十一月十一日「トツテンハム、コールド、チャペ

一千六百七十年

四百三十七

ルに於て公衆に向ひ發時、ホ非ットフヒールドとウエスレーの二人互も孰れもても生存者先眠者の葬式の説教をなすべきことを約し居たるを以て次の安息日にはホ非ットフヒールドの死に就きウエスレー此講義所に於て説教すべきことを廣告せしむば其日は實も無敵の大衆來會せしがウエスレーは夫の時間は誠に嚴肅として其靜あると深夜の寂然たるが如くなりきと云へり、同日氏はムールフヒールツのホ非ットフヒールドが會場に於て再び説教せしが此時の五時半に始むるの預定なりしも三時又は既に聴衆會場に充溢したればウエスレーは四時ふ始めたり、氏の右兩所共願くは義人の如く我死なん願くは我終り之が終りにひとしかれとの題を以て説教せり、氏はホ非ットフヒールドの品性を組成する者は無雙の熱心、倦まざる活動、憂苦者に對して柔しき心情、貧困者も對しては仁慈、最も寛大なる友愛、優美にして非難すべき所なき謙遜、談話に於て淡泊無飾あると、畏縮せざる勇氣、及び主の爲も其爲さんと定めたる事に於て確然不撓なると等なるを云へり

ホ非ットフヒールドの品性

斯く古今基督教説教者中屈指の一人傑遂に逝けり、氏の屢々大に苦みしも傳道に従事すると茲に三十四年其間に一万八千有餘回の説教をなせしが其中野外に於てなしたるものも多く、又屢々夥多の聴衆も向て、又殘忍ある迫害の中も在てあしたるものも少なからざるなり

此一千七百七十年に關して尙一の記載すべき事、當時愚民の乱暴に大に滅じたりと雖どもウエスレーは尙筆頭火箭の的たりし事はなり

一千七百七十一年 六十八歳

一千七百七十一年は實に困難の絶へざる年ありき、ウエスレーの始の二ヶ月を常例の如くロンドンに於て費せしむ其間に氏の妻の例の狂妄ある怨恨不平を鳴らし毫も其理由と告げず無禮にもロンドンのウエスレーが家を去りニューキヤソルのピルグリム街ある己が家も赴けり

三月三日ウエスレーの愛爾蘭に發向し同二十四日上陸し七月二十二日再び英國も向て出帆せり、ダブリンに於ては數年の間會中に爭論絶へずして爲に少あからざる損失を來たせり、ウエスレーは此三ヶ月餘の間常も此

愛國に航す

一千七百七十年

四百三十九

國の各地方を巡回し許多の處に於て神の事業の昌へ行く光景を見て大に喜びしが夫のダブリン、アスローン、チユレモール、ウォートルフ、オールド、コルク、及びオーガルに於ては其狀況大に之に反する者あるを發見せり、氏は此長き旅行中其日誌に左に記載をなせり、一千七百七十一年六月二十八日―此日を以て予の六十九の齡に入りたるの予の音聲体力の今尙二十九歳の時と同様にして自ら驚異に堪へざる程なり、併し是亦神の爲し給ふ處の外ならざるなり

ウエスレーの誕生日

プリストル年會

アズベリーを米國に遣はす

ウエスレーはプリストルに於て開くべき年會の期日に迫て愛爾蘭を去れり、此年會に於て數人の試用巡回傳道者に收入させし者ありしがジョセフ、ベンソンの其一人なりき、又フランシス、アズベリー、リチャード、ライトの二人を米國に遣はして彼國の事業に力を添へしめたり、講義所の負債償却の爲は鳩集したる義捐金は殆んど一千七百パウンドなりしを尙此負債償却を急に終らんと爲す三國中の各メソヂスト信徒の來る一年間平均毎週一ペニーを出すべき計策をおせり、ウエスレーは此事若し實行されれば

常に我儕の負債の全額を償却するに足るのみならず凡ての臨時費用も充つ得べしと云へり、年會の終るや否やウエスレーウエールヌと向て出發し殆んど三週間其處にて働たり八月三十一日プリストルに歸り次の一ヶ月間の其地方を留まりて諸會を訪へり、一年前に氏のキングスウード學校に於ける大リヴァイザルを見て大に喜びしが今は左の如く云へり、其リヴァイザルの既去れり、今消失し去て更に痕跡を止めず、然らば如何、我儕再び之を始めざる可らず若し我儕喪心せるとなくば時に及びて刈り取るを得べし

小旅行

ウエスレーはロンドンに在らざると七ヶ月にして十月五日(土曜日)其家に歸りし、次の月曜日又は又例のベッドフォールド及びノルスマンブトン諸郡の巡回の途に上り之に一週日を費して後又一週日をオックスフォード、ドニール諸會の巡訪に費せり、多年の間氏の毎年最終の二三ヶ月間のロンドンを中心として一週間づきの旅行をなすを例とせしが此年に於ても同様に其第一の旅行はベッドフォールド、ドニール及びノルスマンブトン

ル、第二はオックスフォード、第三はチャサム及びシルマス、第四はステイプルホルスト、ライ、ウインチェルシー及び他の數ヶ所、第五はノルフオルク、よして獨り此ノルフオルク旅行は時日稍長かりき

一千七百七十二年 六十九歳

一千七百七十二年に於けるウエスレーが第一の旅行の一月十六日ロンドンを發し、ルートンに赴きたる旅行にして氏は其處の會堂に於て説教せり、氏に此許を與へたる友愛ある教師のゴブレストン氏なりしが氏が一子の後にメソヂストの定住傳道者となり烈しき迫害の爲にルートンより逐はれ而してセント、アルバンズに於て暫時傳道したる後メソヂスト教派を始めてレイトン、バザールドに起し一千八百三十五年齡七十にして其處に死せり、氏の五十年餘の間實に熱心なるメソヂスト役者にてありき

ウエスレー少しく健康を失ふ

ウエスレーは今七十に垂んとするの齡に達せり、氏の生涯の實に比類なき活動の生涯よして今尙勇健なりと雖ども然れども既も多少氣力減耗して自から望みたる如く鑛鑿すること能はざりき而してロンドンの朋友は既に之を認知せり故にウエスレーが日誌中に左の記事あるを見る、一千七百七十二年二月廿一日「予の數人の朋友に逢ひしが彼等は予をして乗馬を廢せしめんが爲に義捐金を募り居れり、予は數月前より身体を傷害してより乗馬も多少意の如くならざるとあり、彼等今の企圖を續けば善し若し然らずとも予の予が必要に従て体力を得べし」

一婦人ポプラー傳道の命脈を奪はる

ウエスレーはロンドンを去る前にポプラーの新講義所を開きしが此地のメソヂスト教派の多年死生の間に在て僅か其命脈を保ち人屢々ウエスレーに當地の傳道を放棄せんことを勸告せしも氏の常に之に答ふるに「常に長椅の一隅に坐を占むる夫の婦人(クリツメンデル夫人)は尙出席するや」との問を以てし而して「然り、夫の婦人は決して怠りことなし」との答を得て「然らば其人の爲に尙繼續すべし」と云ひ以て之を繼續せり、斯く此地メソヂスト傳道の命脈となりたる此敬重すべき婦人はニューキヤソルよ近きスワルウエルの入ふして七十餘年の間忠實なるメソヂスト信者たりき

一千七百七十二年

三月一日ウエスレーの例の長さ北部旅行の途に上り而して其ロンドンに還りたるは七ヶ月の後にてありき、氏は此時始めてリーキの邑に於て説教せしむ此邑の十八年前トーマス、ハンビーの生命を危ふして傳道し遂に一會を組織したる處よして其頃暴民等は彼を殺せ彼を殺せと叫んで瓦石を乱投せしも當時僅かに二十一歳の此壯年傳道者は幸にして其手を免かるゝとを得而して暴徒等狀師之の首領たりきは僅るに彼の肖像を焚て止めり、ウエスレー記して曰く「一千七百七十二年三月二十七日予がリーキに於て食事をなせる時邑の紳士等人を予が許さ遣はして予に説教せん」とを請へり予は是れ神の攝理の然らしむる處ありと信せしを以て敢て辞するとをせず之を承諾せしむ幾許もなくして夥多の聴衆來會し深く予が説教に耳を傾けたり四月五日氏ハポルトン及びマンチエストルに着せしがポルトンに就ては左の如く記せり神は實に此所に於て驚くべき事を爲し給へり數年前又於てはジョン、ベンテット此會を百四十人より十二人の會友となせしが今は其數百七十人に上り五月九日エデンポローに着し

ウエスレーの勞働

己が身軀の健康に就き肝要なる醫術上の検査をなせり既に述べし如く氏がロンドンを出發する前朋友等は氏が年老ひ且つ多少衰弱の兆あるを見て其遠く且つ困難なる旅行ハ馬車と備へんが爲小金を募集せしが氏は其後十週以内に或は驛車又乗り或ハ馬に乗りてロンドンよりブリストルに赴き夫よりボルミングハム、ノツテイニングハム、マクレスフィールド、チエストル、リヴァプール、マンチエストル、ホワイトヘーヴン、カライル、グラスゴー、アベルデイン及びエデンポローを巡回し其間是等の各所又於てのみならず其他夥多の小邑村落に於て説教し一日四回の説教をなせしとも往々之れありたり加之屢々寒天風雪に遇ひ或ハ深き雪の半ば不到る雪中を徒歩するとあり或ハ道路非常ニ悪くして實際泥中に沈むとあり或ハ又凜烈なる寒風を冒し郊外に立て説教せしとも少あかざりき然るに我儕ハ氏が日誌中に於て毫も其健康を失ひたるの記事あるを見ず而して氏は未だ嘗て當時の如く其執りたる大事業の爲ニ専心努力せしとあらざるあり、ベルスより其兄弟に送りたる書中に左の如く云へり

「之が爲に使用せざる日は空費したるもの」

「……足下と予との靈魂を死より救はんが爲め又小心翼翼として其等の靈魂を看護せんが爲めに召かる、若し我儕の職務にして單に一週數回の説教をゐることなりとせば予が爲めには其職務は只遊戯たるに過ず足下も亦然るべしと存候、然れども是れ實に我儕が職務の一小部分たるに過ぎずして神の足下も予にも、爾は我子の之が爲に死したる靈魂を救はんが爲に其全力を致せ」と曰ひ給ふにて我儕は常々此聲を己が耳朶に響かしむべきもの、御坐候若し然かせば我儕喜びを以て主の臺前に立つことを得ん、嗚呼予予の怠慢と無氣力とを耻づ、足下の業務は予と同じく靈魂を救ふこととて我儕の之を以て我儕の唯一の業務となして教師の聖職に就きたる譯、御坐候、故に此事の爲に(少なくとも)主もに此事の爲に使用せざる日は之を空費し之を失ひたるものと存候、……」

醫師の検査を受く

ウエスレーは多忙にして其身の不健康疾病等お就て思慮するの暇なく従て健康上毫も煩慮する所おかりしと雖ども朋友等の大に然らざりしなり、今エデンボローに於て氏を醫術上の検査に付せし、も恐らくは氏自らの

配慮に出でし、非ずして朋友の請ふ出でし者なるべし、ウエスレー記して曰く、五月十八日、ドクトル、ハミルトン、他の二醫、ドクトル、モンロー及びドクトル、グレゴリーと共々來りて予を診査し而して予が疾病の何なるを示し且つ告て之れを癒すの法只一あるのみと云へり、自然の治療法は或は然らん、然れども予は神の靈魂に於ても肉躰に於ても種々之を癒すの法を有し給ふと信ず、とウエスレーの疾の腎囊の水腫なりしが數月の後お至り氏の左の如く記せり、予は殆んど廢卒なり、予は乗馬を禁せられ只主も馬車にて旅行せざる可らざるお至れり、是より由て觀るもウエスレーの健康は異常ありしと疑ふ可らず、氏は十日間エデンボローに留まりしが其間六回に下らざる説教をなし而して夫の醫師の診察を受けたるの日にレイスの新講義所を開けり、其後二日にしてニューキヤソル、又向て出發し途中マンバール、アルンツ、ツク及びモルベスに於て説教せり、五月二十五日、ニューキヤソル、又着し此週の剩餘を此所と其近傍の村邑に費やし日曜日にては夥多の靜肅なる聽衆に向て三回の屋外説教をなせり、六月の始め四日

間は氏が自稱する「谿間の小巡回」を費し其間只に數十英里を旅し諸會を視察したるのみならず八回に下らざるの説教をなせり、六月五日ニニューキヤスソルに歸り而して其地方に於て次の十日間を費せり當時ニューキヤスソル會は二年前に比すれば會友の數稍々減少し居りしがウエスレーの之に就て左の如く云へり「是れ蓋家々を訪問せざるも職由する者あり、此事なくしての會友の増加又其恵に生長せるを見るに難き、六月十九日ニニューキヤスソルを去り次週をドルハム、ストックトン、ヤルム、ソルスク、オスマザレイ、ホットン、ラッドビー、ストークスレイ、キヤストレット、ホットン、ロビン、フーズベイ及びスカルポローの説教に費せしが氏が如く身に疾病あり且つ齡既に七十の老翁に在ては質も容易あらざる勞働と云ふ可し

十八ヶ月前に夫の粗暴あるウエスレー夫人は卒然ウエスレーを離れてニューキヤスソルの己が家へ歸りしが今ウエスレーが疾の故より氏と共に歸途に就けり然れども之れ果してウエスレーの慰めとありしや知るべからず但し夫人がウエスレーと共に馬車の中ホルクシー、夏時の絶

ウエスレー夫人ウエスレーと偕に歸る

「人爾の右の頬を批たば亦他の頬をも轉らして之に向かふ」

年會(リーン)中のウエスレー

景中を旅するを得ざるは其身不相應の逸樂なりしなりウエスレーはスカルポローよりブリッドリングトン及び其他の諸所を経て八月二日リーツに着せしが是を年會を其地に開かんが爲にてありき、氏ハリーツに達する迄到る處に説教せり而して當時殘酷なる迫害大に其跡を收めたりと雖尙未だ全くウエスレーの身より離れしハ非ず即ちハリファクスに於てハ七月八日一人の惡漢酷だしくウエスレーの面を打ちしが此時此敬愛すべき聖徒は雙眼を涙を浮べ、人爾の右の頬を批たば亦他の頬をも轉らして之に向けよとの聖訓を守りたれば其大勇豪氣の柔和と辟易して夫の殘忍なる怯夫は潜かに身を隠せり、斯の如く種々の快からざる事ありしとも係はらず氏が日誌中には毫も迫害困難、疲弱、疾病等の記載あるとなしウエスレー記して曰く「八月四日(火曜日)本年の年會を開けり、通常予ハ年會開期中朝より夜に至る迄語るとをなせしを以て年會中朝の説教ハ他の兄弟等に委託するを常とせしも這回ハ種々の事情ありて予ハ神の助けに依り朝夕共自ら説教せんと決心し此の如くなせしが予は於てハ予が通常の勞働即ち朝よ

一千七百七十二年

四百四十九

プリストル全
會友を一々其
家を訪ふ
「野外説教は
予が爲すは十
字架なり」

り夜に至る迄静かき予が書齋に座すると其疲勞毫も異なるとなかりきと
年會の終るや否や氏は再び福音傳播の旅程より上りしが不幸にしてホル
スレムに到る途中にて氏が馬車破壊せり氏の身も疾ありしも人々を失望
せしめんよりの寧ろ疾を冒して馬を用ひんと決心し而して馬上二十二英
里を旅し正に説教の時刻に到着するを得たり夫より進んでプリストルに
到り其地方より七週日留りしが其間氏はプリストルの全會友を一々其家
に訪問せり氏は屢々屋外の説教をなし而して自ら左の著るしき言をな
せり今日述野外説教は予が爲すは十字架なり然れども予の予が使命を識
る福音を凡ての人に傳ふるには他は道なきなり十月五日プリストルを去
り途中シヤフテスベリー、サリスベリー、ウインチェストル及びボルトンマウ
スに於て説教し十月十日ロンドンに着せり氏は己が家若し實に家を有し
たりとせばを離れ居たると茲より七ヶ月の久しきに及びしもロンドンに留
ると僅に一日おして再びベッドフォード及びノルサンプトン諸郡の巡
回に出發し之を終てロンドンに歸り一日の後又オックスフォードシャー

「聖、クリスチ
ヤン、コンミ
ユニテイ」
の起原

の巡回を始め而して又ロンドンより歸りて一日を送り十月二十六日ノル
フォーク二週日の巡回に出發せり此巡回を終りて後は一回ケントに旅し其
後ヘルトフォードシャーに赴きたる外年末に至る迄常々首府ロンドンに
留まれり氏はロンドンの病めるメソヂスト信徒を訪ひ其數の僅少なるを
驚けり十二月三十一日より左の如く記せり我儕大に貧者の需用に供給す
るに窮し凡て我儕が要する所を嚴肅なる祈を以て神の前は陳述せり即ち
我儕神は其眞理を地は墮ちしめんよりの天に窓を開き給ふべきを信じて
之を爲せしめり夫の敬虔なるメソヂスト信徒がロンドンの工場中を住す
る職工等を訪ひ祈禱、讀書、勸話等を以て之を獨一の大訓慰師に導くを以て
其義務共樂となすの目的を以て一の團體を組織したるは恰も此頃にして
其組織は間斷なく續ひて今日に至れり此團體の凡そ二十年前より純粹の
メソヂスト會たらざるに至りしと雖ども會中首要なる位地を居る人々は
メソヂストの名を負へる人々あり現今、聖、クリスチヤン、コンミユニテイ』
と稱する此會の第九十五年報により我儕の此會は一千七百七十二年ヨ

ン、ウエズレーの監理の下に設立され、而して毫も報酬を受けず凡て義務にて労働する其役者等は定期シヨール、ドイツ、セント、ルークス、クロルケン、ウエル、東部のセント、ジョール、ヌス及びベルナル、グリーン、の工場を訪ひ、十八の會場及び街頭に於て毎週宗教上の集會ををし、其他婦人の蟄居せるケンブリッヂ、ヒースに於て一週三回の集會をなし、毎日曜日の夜にハスピタル、フヒール、ツの賤陋ある家宅二三十を訪ひ、而して一年中又は屋外に於て凡る四百六十三の集會を開き殆んど一千四百の説教をなし宗教上の雜書を配布すると殆んど二十五万部に及び、而して毎週各自其職掌を有する訪問者及び勸導者の數は一百二十四人に下らざる事等を知得ずロンドン、の貧者流涕者を訪はんと爲に一千七百七十二年於てウエズレーが計畫せし敬虔なるメソヂヤスト信徒の一小團休成長して遂に斯る會となれり、其事業は汎く世人に知らるゝにあらす其役者の如きは殆んど人の識認せざる所なりと雖ども茲にロンドン、大都の中心に於て一百二十四人の内部傳道者一錢の報酬をも受くるとなく自ら奮て下等人民中の最下等なる者を

「我儕は全世界の人を負ふ所あり」

キリストに導らんと努力し一年僅かふ二百パウンドの小費額を以て其廣大なる機關たる雜書の配布、天幕説教、及び貸本等の事業をなせり、願くは此隠れたる無名の會に成功あれ、仰ぎ願くは天の神に此事業を益盛大ならしめ給はんとを○一千七百七十二年十二月十一日ウエズレーがシヨセフ、ベソンに送りたる書中に曰く「自ら一所に閉居するハメソヂヤスト傳道者たる者の大に耻づ可き事あり、我儕は全世界の人に負ふ所ある者として如何ともして若干の人を救ふを得んが爲と凡ての人を警戒し凡ての人を勸導せんが爲に召されたる者なり、予は祈禱會を愛し之が都邑の各部に起らんとを望む」と

是れ夫の難病の爲と痛く悩みたる老翁の一千七百七十二年に於ける事業の大略なり

一千七百七十三年 七十歳

一千七百七十三年ハ英國歴史に於て常々記憶さるべきの年なるべし、夫の亞米利加殖民地に於て業既に胚胎したる謀反の公然破裂したるは實に

一千七百七十三年

四百五十三

英國史中記憶すべき年ハ米國獨立戦争

此[年]にして英國の國旗侮辱を蒙り、其軍艦は焚燒され、ロールド、ノルスが無税にて英國より輸出することを許したる茶の貨物は暴徒及び欺騙に巧みなるインデヤン人の奪ふ所となりて非常なる歎聲の中、又洋中に投せられたり、而して英國議院に於ては議論沸騰して更、終局なく、米國の海岸及び原野に於ては激烈なる戦争已、其端緒を開き、ジョージ、ワシントン大元帥の撰ばせて夫の「同盟十三州の議院」組織せらる、而して多年の間殆んど英國議院の議場を専有したる者の實に此米國戦争の一事にてありしなり

ウエスレーは今尙疾の爲に大に困難を感せり故、此年の始に於て閑時には己が書翰及び他の書類を檢査して後代に遺存すべき者と否らざる者とを甄別すると、消費せり氏記して曰く、予は予が諸書翰を校閲し終れり、予の爰、只一の記をべき事あり、他にわらず、今に至る迄四十年餘の間に予と最も親密なまて互に能く一致せし朋友として後予と分離したるものは悉皆彼方より分離したる者即ち彼自ら予より離るる者にして予が彼より離れ去りたるにあざるなり、斯く彼等が全く予より分離するに至りたる

書翰類を校査す

米國よりの通信

段階順序は彼我往復の書信中、明瞭にして毫も抗言すべからざるなり、と神の手中に在りてウエスレーが成効せし大事業の只、三王國に遍布せしのみならず、大西洋の彼岸に於ても亦迅速なる進歩をなし居れり、氏は既に四人の傳道者を彼地に送りしが、其身の年老ひ且つ大に健康を失ひ居るにも係はらず、尙自ら此遙遠の地を訪はんと、の思念を抱けり、在米の人々は屢々書翰をウエスレーに送りし、其中ヴォルジョニヤのジャラット氏に告げて、米國殖民地は九十五の教區ありて、其中九十四は教師を有するも、其九十四人中九十三人の活ける宗教の勢力又精神を有せざるが如しと云へり、氏はウエスレーが其傳道者を米國に送りたるを謝し、其中ピルムール及びウヰリアムスの二人はヴォルジョニヤに在りて働けることを云ひ、且つ進んで「斯る廣大なる國に於て二三人の傳道者將た何をなし得べき、足下は尙一層我儕が爲に何をか爲し能はざる乎、今教師を缺く教區の爲に足下英國教會の一教師を送るとを得ざる乎、予は足下が當地に於ける實況を觀察せんことを望む、蓋此事(實況視察)は此地の事に關し、足下を奮起せしむるに千の勝

論に勝れりと信するなり」と云へり、之のみならず此年フランス、ギルベルトはアンテギニアより書を寄せて、殆んど全島皆主を求むるの心を奮起せしが如し」と云へり、此所よての彼の兄弟の家にて絶へず説教をなし而してセント・ジョンズに於ての六十の會友ある一の會を組織せり、ギルベルトは尙其書中に「殆んど全島既に熟したるが如くなれば其收獲の爲に三人の傳道者も尙多しとせず、然れども予の未だ足下に之を送らんとを請求するを得ず、是れ人民の資力未だ其費用を負担するに堪へざるを見ればなり、予想ふ、此地住民の三分の二の火事、大風、及び酷烈なる旱魃の爲に亡滅せり」と云へり

愛國工航す

不幸中の幸

ウエスレーの三月七日(日曜日)の夜、ロンドンを發して愛爾蘭に向ひ而して此時始て已が馬車を携へ往きしが不幸にして之を用ゆるの便宜を奪はきたり、之を就き氏は左の如く記せり、三月三十日—予の稅官吏が予が馬車を上陸せしむるを許さざるを見て少しく驚けり、彼等ハ之を拒むに郵便船の船長の貨物を載せ來るの權利なきを以てせり、實に不都合なる理由と

道書

云ふ可し、然きども予の後又至りて此事ハ却て彼等又向て謝すべき事なりしを發見せり、蓋若し其馬車を上陸せしめ之を用ひたらんには全く破損して復用ゆべからざるに至りたるべきを以てなり、氏は止を得ず他の馬車を雇ひしが其馬車は一度はバリバックの渡に於て水中又轉落し一度ハ十二英里に足らざる路程を往くに五時間を費すの難路ハ逢ひ又一度は後部の車軸を毀損して復用ゆべからざるに至り、其他残忍なる暴徒等の爲に殆んど粉砕せられんとしたると少なかりき、ウエスレーは到る所ハ於て夥多の聽衆を得、屢々全軍隊の氏に説教を聽きしともありたり、而してウォートルフ、オールド及びモンニスキレンに於けるの外何處に於ても大なる妨害を受くることなかりき、ウォートルフ、オールドに於てハ羅馬教徒等愚民を煽動して痛く打撃を加へしめ、モンニスキレンに於てハ暴民等屢馬車を襲ひ石を以て共數ヶ所を破毀し窓を破り且つ泥土を以て殆んど之を掩ふに至れり、ウエスレー愛爾蘭を巡回すると三ヶ月に互り其間ダブリン、ガルウェイ及びベルファスト、コルク間の數十の都邑村落に傳道し、後ロンドンに於て

年會を開かんが爲め七月五日此國を去れり

氏の七月十七日ロンドンに着し全二十一日其日誌中に左の記載をなせり我儕ロンドンに於て四季會を開きしが予は教會の収入金額未だ其支出額を達せざるを見て驚けり我儕は今殆んど二百パウンドの負債を有せり而して予が自己の會計上より一層甚だしき困難を來たし居れり予の著述に於て多くの記者に劣らざる働をなせしが其働は由て七十年間に予が得たるもの五六百パウンドの負債なり○氏の八月三日年會をロンドンより開き而して左の如く記せり八月三日—我儕此日年會を開き予は毎日朝夕二回の説教をなせしが予が身体に別異狀なく恰も一日一回の説教を爲たる時の如く强健活潑なりき夫の年老ひ善長にして心志單純なるサムエル・バルツレイの其書翰中に左の如く云へり彼は年會々員たるに既に五年にして其書翰は今尙我儕が手中に存す予は未だ今回の年會より樂しき年會に臨みしとあし愛の終始此年會を一貫せり予が敬愛するウエズレー氏の最も強く勉められ予の十二回氏の説教を聴くの幸を得たり氏は過る二

ロンドン年會

十年の間一年會も於て斯く多くの説教をなしたるもなく又斯く他の助力を得しとなしと云へり

一日百十四英里の旅をなす

年會後第一日曜日の夜ウエズレーは馬車に乗り例のコールンツォール巡回を始め三週間の后プリストルに來り其地方の諸會中一ヶ月を費し十月六日午前二時己が馬車に乗りロンドンに向て出發し同夜到着せり斯く氏の冬期の一日に百十四英里の旅をなせり此月の剩餘の日曜日を除くの外氏が所謂「小旅行」即ちヘッドフォールド、ノルスアンプトン、オックスフォード、バッキンガム及びケント五郡の旅行に費し而して十一月の始め十日間ノルフォルクに於て費し夫よりロンドンの諸組を會し其后ソセツクスに往き又ケントに赴けり氏共日誌中此年最後の記事をあして曰く「ロンドン—十二月二十五日より數日間我儕は其設立されたる目的に従て種々の嚴肅なる祝祭日を守るの好機を得たり我儕の斷食と嚴肅なる守夜會を以て此年を終れり」と

一千七百七十四年 七十一歳

一千七百七十四年

年會を開かんが爲ふ七月五日此國を去れり

氏の七月十七日ロンドンに着し全二十一日其日誌中に左の記載をなせり我儕ロンドンに於て四季會を開きしが予は教會の収入金額未だ其支出額を達せざるを見て驚けり我儕は今殆んど二百パウンドの負債を有せり而して予が自己の會計上より一層甚だしき困難を來たし居れり予の著述に於て多くの記者に劣らざる働をなせしが其働は由て七十年間に予が得たるもの五六百パウンドの負債なり○氏ハ八月三日年會をロンドンに開き而して左の如く記せり八月三日—我儕此日年會を開き予は毎日朝夕二回の説教をなせしが予が身体ハ別々異狀なく恰も一日一回の説教を爲たる時の如く強健活潑なりき夫の年老ひ善良にして心志單純あるサムエル・バルツレイハ其書翰中に左の如く云へり彼は年會々員たると既に五年にして其書翰は今尙我儕が手中に存す予は未だ今回の年會より樂しき年會に臨みしとあし愛ハ終始此年會を一貫せり予が敬愛するウエズレー氏の最も強く勉められ予ハ十二回氏の説教を聴くの幸を得たり氏は過る二

ロンドン年會

十年の間一年會も於て斯く多くの説教をなしたるとなく又斯く他の助力を得しとなしと云へり

年會後第一日曜日の夜ウエズレーは馬車に乗り例のユルンウオール巡回を始め三週間の后ブリストルに來り其地方の諸會中ハ一ヶ月を費し十月六日午前二時己が馬車に乗りロンドンに向て出發し同夜到着せり斯く氏の冬期の一日に百十四英里の旅をなせり此月の剩餘ハ日曜日を除くの外氏が所謂「小旅行」即ちベッドフォールド、ノルスマンプトン、オックスフォード、ハツキングハム及びケント五郡の旅に費し而して十一月の始め十日間ハノルフオルクに於て費し夫よりロンドンの諸組を會し其后ソッセツクスに往き又ケントに赴けり氏其日誌中ハ此年最後の記事をあして曰く「ロンドン—十二月二十五日より數日間我儕は其設立されたる目的に従て種々の嚴肅なる祝祭日を守るの好機を得たり我儕ハ斷食と嚴肅なる守夜會を以て此年を終れりと」

一日百十四英里の旅行をなす

一千七百七十四年 七十一歳

一千七百七十四年

朋友の憂慮

既に記載せし如く當時ウエスレーの大に健康を失ひしも其執る所の役務に至りては毫も輕減する所なく從て氏の朋友等は大に之を憂慮せり、ジョン・ポーションの一千七百七十三年十月十四日ブリストルより發したる私信中よ左の如く云へり「ウエスレー氏暫く此地に滞在せしが氏は當時甚だ速に衰へつゝあるが如し予は氏が我儕の中にあるに甚だ長からざるべきを恐る、實に當時に在ての斯る憂慮をなすべき充分の理由ありしなり、過る三年の間ウエスレーの痛苦は實に甚だしからざるを得ざりしが其之に就て怨言かず又其勞働を減ずるとなく全く常例の如く勤勞したるは眞に驚嘆の外なきなり、氏が疾の難症なりしとの疑ふべからざるとなるが我儕は氏が其治療後僅に一週日にまて馬上從來の如く活潑に運動したるを見て大に驚かざるを得ず、氏記して曰く「一月十一日(火曜日)予は邑の東方より始め順次會友各自の家を訪へり、予の牧師の職務中是より肝要なる者あるを知らず、然れども血肉の爲には實に大なる重荷又難業たるあり故に我傳道者の中にすら予の勸めに從て之を行ふ者は甚だ僅かなり」

牧師の最大要
務一家々の助
問

ウエスレーが
其事業に於て
榮へたる筈に
怪むべきにあ
らず

救主の國を擴めんとウエスレーが熱心は殆んど氏をして其必要の休息をもなさざらしめたり、氏の長き生涯は終始偉大なる活動を以て一貫し其働くや恰も自ら働かざれば何事も出来ずと思考せし者の如し、然るに又氏が如く實際に神の恩恵なくしては其働きの全く徒勞を屬するを確認したる者はあらざるべし、故に氏の只に自ら絶へず大能の主の氏を助け、いと偕ま在て働き給はんとを祈り、のみならず斷食日を定め、數千の信者をして之を守らしめ、より夫等斷食日の多くは氏の日記に記載しあるも其記載しなき者亦許多あり、我儕はウエスレーが此頃復一の斷食日を指定せしを知る即ち此年一月二十五日サムエル・バルツレイは左の如く云へり「予は昨日ウエスレー氏より書翰を得しが其中、予の福音傳播の爲め本月二十八日を以て斷食祈禱の日として之を守るべきことを告げたり、ウエスレーが其事業に於て榮へたる筈に怪しむべきをあらざるなり」

北部巡回

ウエスレーは此年の始め二ヶ月間は概ねロンドンに留まり三月六日より北部旅行を始め例の如く延びて八月年會開會の時に及べり、此旅行の變

百四十英里を
四十八時間に
往復す

メリーメツヂ
スト

轉常なくして我儕終始其足跡に従ふを得ず只其間お起りたる主要なる事
件を摘載して止むべし、氏の コングレトン お達せし時再び プリストル に還
らざるを得ざる書翰を得たり是に關して氏は其日誌中に左の如く記せり
三月三十日(水曜日)予は進んで コングレトン にお到り其處にて一書を得た
り、書中予が プリストル へ還るの必要を云へり、故に凡る一時に馬車(二輪車)
に乗て出發し次日の凡そ一時半に プリストル に着ま凡そ二時間として要
務を終り金曜日の午後再び コングレトン に着せり、此間凡そ百四十英里な
るも神は讀むべきかな予が身体の疲労は先に此所を去りし時と異なると
なかりき、是實お驚くべき言と云ふべし七十餘歳の老翁不健康なる身を以
て鉄道に依らず精良なる馬車(四輪車)に依らず冬月短日の候私有の馬車よ
乘て粗惡の道路百四十英里を凡そ四十八時間に往復し而して徐かに座
して更に高言なく却て深き感謝の念を以て、右に如く其事業を書記したる
が如き我儕如何なる傳記中よ之と並ぶ者を發見し得べき乎、ペリー に於て
は メソヂスト 教派久しく暴風怒濤の中お揺蕩せられ或時は信者等最も嫌

「若し傳道者
にして半死半
生の情態にて
あらば其信者
は如何すべき
や」

ジョセフ、ペ
ンソンウエス
レーを評す

惡すべき汚泥と以て身を掩ふれ或時ハ獵夫獵角を吹て彼等が禮拜を妨
げ而して彼等が講義所を建てんどの計畫は再三教會の教師に由て無にせ
られたり、然れども遂に ピッツ、オヴ、ジ、ムール に一地所を購ひ得て彼等自ら
粘土を堀て煉瓦を製し或は晝間労働するあり或は夜間之れを守るあり以
て遂に此春工事を竣り四月十五日よは ウエスレー 其講義所に於て説教せ
り、ウエスレー は グラスゴー、メンヂスト の情態に満足する能はずして自ら
左の言をなせり、此會の進歩せざるハ抑何故なるか、今此間よ答ふるは最も
易き事なり、一人の傳道者續ひて二三月此處よ留まり毎週日曜日の朝と
三四の夜に於て説教をなす、夫れ斯る労働を以て如何にして メンヂスト 傳
道者たるもの其肉体上の健康及び心靈上の生命活力を保續し得べきや若
し傳道者よして半死半生の情態にてあらば其信者は如何すべきや」

當時蘇格蘭に在留したる ジョセフ、ペンソン の ウエスレー に就て左の如
く云へり予は一週日の間絶へず氏と共に在り以て精密に氏が精神と行爲
とを觀察するの機會を得たり、予は確言す予は未だ嘗て今時の如く氏が絶

倫の人たるを確認せしとなし、予は第一に氏が天才と修得の才能とに於て、
 第二に氏が夫等の才能を最良の道に従て適用する無比の勤勉に於て、
 並び得る者あるを知らざり、氏が生々たる想念、執着ある記憶、明瞭なる智力、快
 捷なる能辯、高尚なる勇氣、疲倦なき勤勉等、實に予をして驚歎お堪へざら
 しめたり、予は氏が十分の時刻をも之を有益に用ひんとするの精勤、小事に
 於けるも尙驚く可きの精確、凡て其手に來る者を處理するに皆順序法則を
 以てすること、事務を處理せるの迅速なると、及び其心靈の靜寧にして爽快
 平和なると等を深く感歎し、徒らに氏は傲はんとを望めり、此他尙愛も遺漏
 すべからざる二三の事あり、即ち如何なる反對も之を動すと能はざる氏が
 決心、如何なる長き試も之を疲らすと能はざる氏が神の榮光を顯はし、人類を益せんと
 患難の水も之を消すと能はざる氏が神の榮光を顯はし、人類を益せんと
 中の熱火等おして是等は氏を知る凡ての人に甚だ顯著なるものなり、
 嗚呼、爾は敵の侮辱、不信實ある友の反逆中お立て永く爾の日の重荷を負ひ
 其炎熱を忍べり、然れども爾は遂に其勞働より休み而して爾の事業は爾に

隨伴すべし

六月十日ウエスレー、ニューキャスソルに着し、次日ウォルシングハム及
 び諸谿間の村邑に向て出發せしが、其ニューキャスソルに還りし、后氏の其
 妻の娘及び二人の孫女と共に不思議に一死を免かれたるの變事に遭遇せ
 り、氏は此事の善惡の天使共に關係せりと信せり、今此事を記述する所の
 ウエスレー自らの言を以てするを最良とせ、故に我儕は爰に只ホールスレ
 イはニューキャスソルの西方數英里の處にある一邑にして、スミス夫人の
 ウエスレー夫人の娘なることを記して止むべし、ウエスレー記して曰く

「六月二十日(月曜日)―九時頃予はホップル氏及びスミス氏と共にホ
 ルスレイに向て出發し、スミス夫人と其二小女との予が馬車に載せたり、
 其邑より凡そ二英里ある小山の頂お於て、毫も顯はなる理由なくして、兩
 馬共に突然飛走し、始め矢の如くに小山を馳せ下れり、其飛走し始むるや
 否や御者は倒まに馬車より放下され、馬は充分なる速力を以て奔馳し、或
 時、堀の右側を行き、或時は其左側を過ぎたるが、一荷車の向ひ來るも途

ウエスレー等
不思議に一死
を免かる

ひ恰も御者の車上に在て之を避けたるが如く彼等自ら巧み之を避け而して小山の麓に架したる狹隘なる一小橋の中央を飛行し同じ速力を以て又次の小山を馳せ上れり、多くの人々之に出逢ひしも皆路外に避けて茫然たり、其小山の頂に近く一の開きたる門あり農夫の庭に入るの門なりしが馬は急に轉じて其門に入り毫も両側に觸るゝとなくして之を過ぎたり、予は他の一方の門閉ぢありしを以て其處まで止まるからんと思ひしに彼等の恰も蛛網の如くに其門を突き放ち鞍田を横ぎつて飛走せり、時に小女等祖父よ兒等を救へよと叫び出せしが予は、恐るゝ勿れ汝等何の害をも受けざるべしと答へ心中少しも恐懼煩慮するとなき恰も平常我書齋に座する時の如く然りき、馬の愈々奔馳して遂に斷崖絶壁の縁端に近づきしが恰も好し今迄我儕も追ひ及ぶと能はざりしスミス氏馳せ來て突然絶壁の縁端と馬との間に跳り入りさき馬の直に止まれり、此時馬若し尙數歩を重ねたりせば我儕はスミス氏と共に斷崖の脚下に轉落せしなるべしと

誕生日

ニューキヤソルのウエスレーが最も好愛せし都邑の一にして其妻の氏を逆待せしスミス氏夫妻は懇切に氏を待遇せり故に氏は常に別れを惜みて此所を去り往きしむ左の一言は多少之を証するものなり、六月二十七日予は此愛する所と人々とを離れて去り往けり、次日は氏の誕生日なりしが自ら左の如く記せり、是れ予が七十二歳に入るの初日なるが予は熟らく左の事を考へたり、予が當時の健康は三十年前の健康と異なるとおく、視力及び神経の強健あることは却て其頃より勝り、而して只に通常老年者の有する患痛の一も身に附従するなきのみならず却て壯年時時に有せし種々の患痛は今予が身を離れ去れり、是抑何如なる故あるか、其一大原因は、如何なる事にて其好む處に從て之を爲し給ふ神は善意に由る者にして其斯る結果を來たしたる主要なる方法は、(一)凡そ五十年の間常に朝四時に寢床を離れたると、(二)通常朝五時に説教したると、是れ世に於て最も人の健康を助くる動作の一たるなり、(三)予が一年の旅行里程海陸共に四千五百英里に下らざりしと是なり、是等の事を讀んで人或は之を笑はん、然れ

とも少しく考察する者は右三事の實に健康を害し又は生命を短縮せざるのみならず却て前者を保維し後者を長くする最良法の一なるを疑はざるべし

「之を取れ」

ウエズレーの屢々他人の氏が肖像を描し取るとを許せしも自ら好んで之をあせしにあらす、或時ブラックフライアルスの近傍に於て一友と共に食する際一人の有名なる美術師氏より十ギニヤ(我一ギニヤは大約五圓に當る)を與へて氏が顔貞を描すを許さんとを請ひしにウエズレーは之を答て「否、予其金を取れ而して再び予に勸むる勿れ」と云へり、然れども其美術師は「予が足下を煩はそは三分時お過ぎざるべし」と云て強ひて之を願ひしにウエズレー遂は之を許し而して其金を受けたり、然るに氏戶外より出るや否や許多の人々一人の糶賣人(キョウバイン)を擁して甚だ喧噪なるを見而して其糶賣人は只一人の憐れなる負債者の家財のみならず彼が殆んど死に瀕して伏し居たる臥牀をも賣らんと爲し居るを聞知して直に群衆中に突入し糶賣人の腕を捉へて「負債は幾許あるや」と問ひ「十ギニヤ」との答を得て「之を取れ、而して其家財を其

プリストル年會

憐れある持主お返へせ」と云て先に得たる十ギニヤを與へ而して共に在りしジョン・ブロードベントを顧みて徐ろに「ブロードベント君、予は今神が何故夫の十ギニヤを予にお遣はし給ひしかを識る」と云へり

此年の年會は八月九日プリストルに於て開かれしにウエズレーは記して「愛を以て始まり愛を以て終りたる此年會中殊に火、水、木の三曜日又於ては予殆んど寸暇を得ざりき、十二日(金曜日)は福音事業成功の爲め斷食祈禱の日として之を守れり」と云へり、此年會に出席したるトーマス・テールロ曰く「八月九日—此日の概ね乾燥なる俗務の爲に費せり、八月十日—午前には我儕の才識信徳の精密なる査察あり午後は専ら新入會者を収入するに費し夜に至てウエズレー氏の説教ありたり、八月十一日—我儕の種々の緊要なる問題殊は我儕の如何にして輕躁、怠惰、及び不良の談話を防ぐべきかとの問題を考究して甚だ有益に此日を送り而して夜に於てはウエズレー氏兄弟の愛に就て有益ある説話をあせり」と

年會の終るや否やウエズレーは再び傳道旅行の途に就き次の十二日間

代議士撰擧者
の心得

をウエールズに費し而して八月廿八日日曜日の務の爲にプリストルに歸り次日復コルンウォールに向て出發せり九月九日プリストルに還り一ヶ月の間其地方を留まりしが當時の恰も國會議員撰擧の際なりしを以て氏はプリストルの會友を會し撰擧權を有する者より左の勸めをなせり (一) 毫も謝金又何の報酬をも受けずして自ら最も適當と認むる人を撰擧すると (二) 己が反對する候補者に就て毫も不良の言を吐かざると (三) 斯る候補者に投票したる者に對て惡感情の起らざる様注意すべきと ○氏の十月十五日ロンドンに來り此年爾餘の時日を例の冬季小旅行に費せり氏のイライ及びセント・アイヴスを巡訪せしが其際氏が經驗に於てすら尙ほ尋常をらざる困難に遭遇せり氏がイライに近づきたる頃ダンソル氏の馬車より來るも遇ひ此時ウエズレーは既に一英里半の間泥水中に没したる道路を通り來れり徒歩してイライに往く者は如何あすべきやと問ひしにダンソル氏は之を答へて彼等は素より徒渉せざる可からずと云へりウエズレー漸く進むに従て其道路は愈々困難を極め而してイライとセント・アイヴスとの

道中の困難

間は大雪の爲に道路特々險難なりしがウエズレーが雇ひたる馬車を御し居たるタップス氏の險を冒して進行し泥水其膝に達するも坦然として我儕沼澤の間を住する者の小泥を厭はせと云へりウエズレー泥中を往くと四英里復馬車を以て往く可らざるに至れり是に於て氏馬を用ひて進みたるも幾許もなくして又進む可らざるに至り此時其地方の一面の水原なきに遂に小舟を以て進めり氏曰く予は此時渡船に大凡二倍する小舟を得て之に乗り小僅其一端を乗りて楫を取り安然に予をエリスに漕ぎ往けり此處に某鐵馬車を備へて予を迎へ而して難なくセント・アイヴスに着するを得たりとウエズレーは左の言を著して此年の業務を終れり十二祝祭日の間毎日我儕の初代教會の一小表號なる主の晩餐を守れり是れウエズレーの幾分の尙高派教會の臭味の附着する者と云ふべき歟現今のメソヂスト教徒は如何彼等の此点に於ても其開創者に倣ふ可き歟

一千七百七十五年 七十一歳

例の如くウエズレーは此年の初め二ヶ月間のロンドンに留まりて時々

一千七百七十五年

四百七十一

國難中のウエスレー

ノルスマンプトンシール及び其他の各所に傳道の爲め小旅行をなせり
 英國民の當時激動の最高点に達し兩議院は四月九日を以て國王ジョージ三世に上書して在米國なる英國殖民の反乱を陳べ且つ彼等をして英國の至尊ある法權を從ひしめん爲め最も強硬なる手段を用ひんことを請ひしが王は直に之を認許せり而して議院は大に海陸軍を増すの要求を受けたり、夫れウエスレーは斯る大事件の時に當て黙するの人にあらず即ち記して曰く「一月二十九日（日曜日）予の多くの人々國難の爲に心中大に危懼を懷くを見強く信仰薄き者よ汝等何んぞ懼るゝや」との主の語を説示せり」と、三週の後氏は「フアウンドリ」に於て説教せしが「ウエストミンスター、シヨルナル」と其説教を「内乱の恐る可き結果に關する嚴肅なる説教」と稱へ而してウエスレーは其説教中に「神より來る凡ての刑罰中我儕が免れんとを祈る可き最なる者の戦争なり蓋戦争は屢々全く宗教の迹を絶ち且つ人倫をも滅するとあればなり」と云へり、此時氏の説教の題は「但以理四章二十七節」吾諫を容れ義を行ひて罪を離れ貧者を憐みて惡を離れよ然らば汝の平安

米國に於ける
ウエスレー

或は長く續かん」との聖語なりき、當時英米共々非常なる動搖中にありしが其詳細を記するは紙數の許さざる所あれば今單に米國殖民等が提出せる不平難題は彼等の許諾を経ずして英國國會が彼等に租税を賦課したるの一事なりしとを記して止むべし

一千七百七十四年の年會報告に依れば當時米國に在るウエスレーの會友は二千二百〇四人にして其巡會傳道者はランキン、アズベリー、シャドフ、オールド、ウヰリヤムス、キング、デンプストル、及びロツダの七人なりしが斯る大騷亂の際に於て凡て是等の傳道者を適當に指揮するに決して尋常智能の能くする處にあらざるなり、此英國史中最大事件の一なる米國反亂の際英國教會の教師等（此最も彼等を要せし時に）多く米國を逃れ去りしもメソヂスト教派の宣教師アズベリーの賢明なる管理の下に英國教會に代て其位地を取り而して後來世界に於て最も廣大に且最も榮ゆべき國の最大宗教となれり

ウエスレーはロンドンを發しブリストル及び内地の諸郡を経て愛爾蘭
 一千七百七十五年

に向ひしが其リヅルフルに到る迄は別に著るしき事件の茲に記載すべき者あり素より氏の其間常々説教し冬日なりしも屢々屋外に於て之をなせり而してラインの下なるニューキヤソンに於て屋外説教をなせし際一人の滑稽漢之を妨げんとて頻りに唸り居りしが惡戯なる兒童等塵土を執て其廣く開ける口中に満てり

キヤソンル、コールフヒールドに到りウエスレー記して曰く、降雨茅屋を通ふして頻りに予が居室に注ぎしも別に目下の不便を感せず而して更に明日の事を思ひ煩ふとをせざりきと、六日後氏は病に罹りて甚だ危篤なりしも其後三日熱を冒して旅行の途に就き殆んど平常の如く各所へ於て説教せり、氏のロルガンに著するや大に發熱して遂に醫師の診察を乞ひしが醫師氏に告て暫時働を止めて休息すべきとを曰ひしにば氏答て己は所々に於て説教をるとを預定したまは其勸めに従ふと能はざる旨を云ひ且つ語るを得る間は説教せざるべからざることを述べ、氏藥を得てタンデラツに赴き夫よりリスボルンを去る三英里なる一紳士の家へ投せしが其處

ウエスレーの
大病

よて此豪勇なる傳道者遂に復び病牀に就くの止を得ざるに遭遇せり此時氏は全く勢力記憶及び精神を失ひ恰も死せるが如きも三日其舌は黒色に變じて腫れ、且つ烈しく拘攣し一時に全く脈搏を認識すると能はざるに至り回復の望殆んど絶へたり、時にウエスレーが同行者ジョセフ、ブラツド、フォルド一杯の藥を携へ來て氏に進め、足下之を飲まざる可からずと云へり、ウエスレー後此時の事を記して曰く、此時予の思へり予若し飲み下すを得ば彼と喜ばせん爲に之を飲むべし蓋之を飲むも予少の利害をければなりと而るに之を飲み下す否や直に嘔吐せしむ夫より心臓の鼓動を始め脈搏舊に復し而して、病狀頓に一變せり、と、六日の後氏はダブリンへ向て出發せしが是實に朋友等の驚異に堪へざりし處あるも氏は自ら神を信賴すと云へり斯て一週日を出ずして常の如くダブリンに於て説教せり○是れ實にウエスレーの多事なる生涯に於てすら尙記憶すべきの異事なり氏が此危険なる疾病中留まりし家のデリアゲイのゲイオル氏の住宅にして後にウルフェンデン夫人となりたる當時十六歳のゲイオル嬢は母と共に

「義者の篤き
新なる力ある者
なり」

に最も懇切なウエスレーを看護せり(ゲイオル氏の敬虔として最も尊敬す
べきメソヂスト信徒にして邑中一の講義所を建て又傳道者は爲し一室
を設け之れを預言者の室と名けたり)此時人々大いウエスレーの生命を危
ぶみ數人の親友の夫のヘセキヤの古事に倣ひ神ウエスレーが齡に十五年
を増し加へ給はんとを祈れり然るに斯く祈れる時ゲイオル夫人突然起て
祈り聽られたりと叫びしが不思議にもウエスレーが病狀頗る善徵を現し
し夫より漸々快復して一千七百七十五年六月より一千七百九十一年三月
迄即ち恰も十五年と數ヶ月の間生存せり我儕をして奇異の念を抱かしむ
るもの獨り之のみにあらずアレキザンドル、マーサルは當時ケントのシー
ルチスに在りしがウエスレーは實に死せりとの新聞紙の報道を読み而し
て已れ之を信する能はずと云ひ夫より説教に出るに當り先づ聖書を開て
左の語を發見せり「見よ我汝の齡は十五年を増し加ふべし」以賽亞三十八章
五節彼れ講義所に赴き而して神がヘセキヤになし給ひし聖約を目下ウエ
スレーが事よ於て應ひせ給はんとを祈れり是等ハ實に苦るしき事實にし

て我儕は記録中又記載さるゝまゝ之を陳ぶ不信者は之を見て嘲笑すべし
然れども基督教徒の之に由て愈々夫の古來教會の歴史中無數の實例を以
て其眞なるを確證したる義者の篤き祈は力ある者なりとの聖語に確乎勵
かざるの信仰を置くなるべし

ウエスレーの病は實に激烈なりしも暫くにして癒へ其結果として後よ
残りしもの只此後數月間其美なる頭髮の常に脱落したるとのみなりき
ダブリンに留まると三週日として全く常体に復し而して七月二十三日
ロンドンに向て出發せり氏パーキケイトに上陸し年會を開かんが爲にリ
ーヅに進みしが其間年會準備は爲し一二日間ポーサンケット嬢の宅に留
まりし外常以前の如き熱心を以て説教し而して朋友等の警告懇求ある
も拘りらず毫も其勞働を減せざりき氏ハ一千七百八十一年よ於て左の
如く記せり「此時(一千七百七十五年)より予は神の恩恵に由て以前と同一の
路を進行せり即ち毎年四五千英里を旅し而して二年毎に遍くグレート、ブ
リテン及び愛爾蘭を巡回せり予は神の恩恵よ由て今も尙二三十年前と同

「其」の事を
目的とす」

じく之を爲し得るなり凡そ百三十の同役者等は予と同く斷へず此事に従事せり我儕の凡て只一の事を目的とす是れ利得も非ず安逸に非ず娛樂も非ず又人の稱讚にも非ず只ロンドン、デブリン、エデンボロー、否、力の及ぶ限り通く三王國も眞正の宗教を布かんとの一事として是即ち我儕の唯一の目的たるなり我儕の意見又の禮拜の法式も於ては各人の撰み任ず只其人の心を支配する者は神及び隣人を愛するの愛にして公議、仁愛、眞理を實行を以て其愛を日々の生活上に顯はさんことを希望するのみ故に我儕は凡て神と人とを愛する人には其人の意見又禮拜式の如何是等の事に就て人各々只神に向てのみ責任あるものありを問ひて交親は右の手を與ふるなりウエズレーの生涯の問斷なき活動の生涯にして勞働の恰も氏が生存は缺く可らざるの要素なりしを如し

リーツ年會

リーツ年會の八月一日は開會し二日の后之を閉ぢし其來會者の多きと多年の間見ざりし處にして各自々由に辨論せし事も亦前後も其例少なきかしの程なりウエズレー記して曰く予は多くの傳道者其職務を執るの資格なく從て全く其任に堪へずとの書翰數通を得れば斯る重要なる申告を精細に檢察せんと欲し先づ凡て其書翰を公然年會の前に於て朗讀し而して誰にても是等の書翰の言ふ處に異論ある者は自由に之を陳述せんとを請へり然るに人々種々の異論を提出したるに我儕一々之を審査し其中困難なる二三件の委員を撰んで之を審査せしめたり斯く精細なる審査の末我儕の皆其訴の無根なると又神は實に其等の役者を其葡萄園に遣はし而して之は必要なる資格を與へ給ひしことを認知し而して互に從來に勝る親密なる一致をみせり

年會の終りたる翌日よりウエズレー再び巡回を始めブラットフォード及びグレート、ホールトンに於て説教し夫より馬車にてロンドンに歸り五日の後復てウエズレー、プリストル、及びコルンウォールに向て出發し而して十月六日ロンドンに還れり氏は此年爾餘の時日の幾分をロンドンに費し其他を例の小旅行即ちベッドフォード、シャー、ノルスマンプトン、シャー、オックスフォード、シル、ボツキングハム、シル、ノルフォーク、ケント、及び

レイの旅行に費せり

一千七百七十六年 七十三歳

病弱なるフレ
ツチエ

此年に於てウエスレーが爲せし第一の事は一千八百のロンドンメソヂ
 スト教徒を會して神との契約を新たにせしとなりきマデレーのフレツチ
 エルと劇しき咳嗽と之に従ふ吐血の爲ま大に惱み居りしがウエスレーは
 氏が健康を回復するには長旅行に若くはあしと信じ而して左の如く云へ
 り「故に予は氏に數月の間予と共に英國及び蘇國の各地を旅せんとを勧め
 且つ告て「卿若し疲るゝか又自ら之を善とするときは予が馬車に乗りて
 可あり然れども卿が体力の許す限りハ乗馬の方遙かに勝ることを記臆す
 べし」と云へり」フレツチエルの久しく過度の勞働をなし而して其活動の時
 代は今殆んど過ぎ去れり氏は此後九年間生存せしも其中二年ハ身体保養
 の爲めウエスレーとの旅行及びニューイングトンのグリーンウード氏及
 ビプリストルのアイルランド氏と共に閑靜ある生活に費し又三年餘ハ瑞
 西に費し夫より英國に歸て一千八百八十一年十一月十二日ポーサンケッ

ト嬢と結婚し而して遂に一千七百八十五年八月十四日に没せりウエスレ
 ー記して曰く「氏の予が勧めを以て神の攝理の然らしむる者なりと思考し
 喜んで之を承諾せり予が常例に従て我儕一千七百七十六年の初春ハ出發
 し初めは氏の体力ハ適應する緩慢なる旅行をなし夫れより漸々行程を増
 せり斯て我儕一千百或ハ一千二百英里を旅し此年ハ終りに至てロンドン
 に歸りし時は氏が健康上著るしき變化を見たり予と信ず氏若し予と共に
 尙ほ數ヶ月間の旅行をなしたりせば殆んど全く其健康を回復するを得た
 りしとを然れども氏の親友等は氏が之を爲すを許さず遂ハ親切ある併し
 智慮なき朋友等の爲にロンドンハ留められしが予が巡回中に氏が吐血ハ
 種々の徴候と共に再發し病勢愈々加はりて遂に醫師をして眞正の肺病ハ
 りと言ひしむるに至れり」と

ウエスレーはフレツチエルを以て己が補佐又後任とあさんと欲したる
 や明かなり然れども神意の在る處之に異ありフレツチエルの別ハ一大事
 業をなすの使命を帯び而して之を成就せしむ其ウエスレーが後任となる

一千七百七十六年

四百八十一

の一事ハ全く氏が受けし使命にあらざりしなり

フレッチェルフレッチェルの健康を失ひしと同年ウエスレーが夫のトーマス、コークトーマス、コークと相識るに至りたるは眞に奇遇と云ふべし、コークはブレコンブレコンに生まれ同所に於て教育を受けたる人にして當時年二十九、オックスフォードオックスフォードより學位を受け又監督教會の接手禮を領して當時サウス、ペセルトンサウス、ペセルトンの牧師となり居たり、トイントンの近傍に住せしブラオン氏ブラオン氏もウエスレーの説教集、其日誌及びフレッチェルフレッチェルの「チェックス」等等を貸與せり、一千七百七十六年の八月ウエスレーがキングストンキングストンに於てブラオン氏の客たりし時、コーク往てウエスレーと面會せしがウエスレーのこれお就て左の如く記せり、一千七百七十六年八月十三日—予はトイントントイントンに於て説教し後ブラオン氏と共にキングストンキングストンに赴き其處にてオックスフォードオックスフォードのジョーザス大學を出でたる教師ドクトルコーク氏ドクトルコーク氏と遇へり氏の予を見ん爲に二十英里の所より此も來りしが予の親しく氏と談話し而して此時より互に親密なる交りを開けり予の此交の必ず長く續くべきを信ず、此時コークは身を只一教會

を收するに限るの適否を疑ふとの意見を陳べしがウエスレー之を聞き手を拍て兄弟よ往け往け往て凡ての人に福音を宣傳へよと云へりコークの憂と喜とを以てペセルトンペセルトンに歸り夫より大に傳道の法を正確嚴密よし己が教區を一の循環となし而して毎週次週問ふ於て開くべき各集會の時と處とを記載し日曜日毎ふ其第二式の後之を朗讀せり、其茅屋穀倉に於て説教する等の如き一般に氏が改革のメソヂストメソヂストの法式に倣ひ組織的の之を整理せしが氏が反對者等の酷だしく氏を嫌惡し而して其教長は氏に離別の説教をなその機を得ざらしめんが爲に公會に於て突然コークの免職を宣言せり是より於て事全く定まりコークは往てプリストルのウエスレーが年會に屬せしがウエスレーは一千七百七十七年八月十九日記して左の如く云へり予は博士コーク氏と共にトイントントイントンに赴けり氏は牧師職を免せられ而して其榮名を別を告て其命運を我儕と共にせんことを決せり是よりトーマス、コークとメソヂストメソヂスト巡回傳道者の一人となり後メソヂスト外國傳道の大組織者とあれり

北部巡回

三月三日(日曜日)の夜ウエスレーロンドンを發してプリストルに赴き夫より北部の諸會を巡訪せり氏の七月十九日共旅行を終へてロンドンに歸りしが今回旅行中の事は概ね前年と同じく只此年に於ては例年より多くの會堂に於て説教することを許されたるのみ是れ蓋し教會教師等の偏見漸く去り從來放棄されざる可憐の燃木多少顧みらるゝに至りし一證と云ふべきなりウエスレーの北部旅行は常に勞働、旅行、説教、祈禱、傳道者の會議、及び病者訪問等の一大繪畫にして恐くは千人中一人も斯る重荷を負て腰を屈せざる者いなるべし然るも既に頭に霜を載きたる此老翁の斯偉大なる勞働を執て心中尙快活常々喜と樂と満てり氏は毎北部旅行に於て多少其傳道地を廣むるとなるが今回の旅行に於てもチエストルフヒールドにて初度の説教をなせり

ロンドン年會

氏は八月六日年會をロンドンに開き三日にして終りしが記して「我儕の過去の諸年會に於て大なる愛と一致とを見たり然るも當年會に於ては未だ嘗て見しとまさき一般の嚴肅端莊なる精神を見たり」と云ひ又トーマス、テイロルの諸事皆整然秩序的に之を辨理し而して各人の品性を檢察するに最も精密を極めたり然るも予の此精査に堪へざる者の甚だ少なかりしことを喜ぶなり」と云へり傳道者も對する不平の聲一般に甚だ喧しくありしを以てウエスレーは親ら此事を處理するに己の義務なりと思考し記して左の如くへり「或傳道者の全く其任に堪へず或者は其職務を怠りて恰も一日に一二回の説教をなすのみを以て己が職務と思考するが如き觀ありとの異論を聞き予は屢々耳よする斯る異論を永く絶滅せしめんが爲に一般の傳道者殊々斯る批難を受くべしと思考するも傳道者を査察せしが其結果として一人は任に堪へざるが爲に他の二人の失行の爲に其職を免せられたり而して我儕の凡て他の傳道者が其職を執るに充分なる資格を有するを見て大に満足せり故に予は此后永く斯る異論を聞かざらんと希望す」

ロンドン年會の終るや否やウエスレーは八月十一日(日曜日)の午後コルンウォールに向て出發し後プリストルに歸りて凡そ一ヶ月間其地方に留まれり氏の預期せし如くプリストル會友を其家々に訪ひしが之をなす爲

兩虎變じて羔となる

に毎日少るくも二時間を費せり氏はミッドソメル、ノルトンの會堂に於て説教せしが其聽衆中には此地の教長もありたり此處までウエスレーが人と爲りの一斑を知り得べき一事起り氏に寄宿學校を有する定住傳道者ブシ氏の家へ滞宿せしが其滞在中二人の兒童拳及び靴を以て烈しく争闘せり是より於てブシ夫人は彼等をウエスレーの許に携へ來りしむウエスレーの彼等と語り而して左の一句を誦せり

「巢よある鳥の睦まじき」

同胞する童子が

互にいかり闘ふに

Sとも恥づべきことぞかし」

“Birds in their little nests agree,

And 'tis a shameful sight,

When children of one family

Fall out, and hide, and fight”

ウエスレー兒童等に「汝等和らざる可らず往て互に握手せよ」と云ひければ彼等其如くせり又汝等互に頸を抱て接吻せよ」と云ひければ彼等復之に従へり是に於て氏二切れのパンと牛酪とを取り之を合一して彼等と之を分ち取らしめ而して「汝等互にパンを擘けり」と云ひ兩手を彼等の頭上に接て之を祝せり是より兩虎變じて愛すべき羔とあり而して彼等の終生此老翁の祝福を忘れざりき此中一人の後ヘルクス市の市長となりしが屢々非常なる感喜を以て此事を人々お物語りしと云ふ○ウエスレーロンドンに歸り十一月十三日夫の弱體なる教友フレッチャムと共に復ノルウヰッチに向て出發し同二十一日ロンドンに歸り氏は此後ケントに旅し歸りて後左の如く記せり十二月三十一日「我儕ハ此國に於て其大なる事業を續け給ふ恩惠の爲に謹んで神を讃へ以て此年を終れり一千七百三十八年に於て予と予が兄弟が信仰に由て救はるとの奇異なる教理を宣べ始めてより今に至る迄實は一年百一ヶ月をも中止停息せしとなかりしなり」

一千七百七十七年 七十四歳

一千七百七十七年

傳道書の講義
を以て新年を
迎ふ

富者宜しく貧
者を訪ふべし

ウエスレーの手には常に業務の充てるありて一切虚日をかかりしが此年の如きも傳道書の講義を以て新年を迎へ數回之を重ねたり氏は之お就て左の如く云へり予は未だ嘗て今時の如く明瞭に此書の意義及び其美を了知せしとなく又斯く精密に其各部の互に連絡し居るとし識認せしとなし實に此書全体の論旨の神を外おしては毫も幸福なしとの高大なる真理を證するにあらざるなり氏は又ロンドンに在る傳道者を會し曩きにオックスフォードの學生を教訓したる如く彼等を教誨し且つ其敬虔の徳を増進せしむる爲に毎朝一時間を費せり又親ら各會友を訪ひ而して其中許多の者の大なる貧苦の中に沈み居るを見て左の如く云へり神を畏るる凡ての富者は何故常に貧者を訪はざる乎其閑時を費やすの道之に勝ざる者あらんや彼等ハ實に各々其功力を循ひて其賞を得る時よ至て之を知るべし

二月の初めは當り氏は急にプリストルに赴きしが是れ其會友中政府に向て不平を抱く者ありたれば之を沈靜せんが爲にして彼等をして執政と權威ある者にと服し云々の題よて説教せり二月八日ロンドンに歸り三月

誕生日

十日よ至り其處を去てプリストルに赴き十七日の後再びロンドンに歸れり當年は北部を巡視すべきの年なりしも自ら記して予は新講義所建築中はロンドンを離るゝと能はずと云へり四月六日(日曜日)北部旅行を始め而してロンドン講義所の爲に往くゝ金を募りランカシャーに到りしは四月二十一日右新講義所の礎石安置式を行はんが爲に其處より途を轉じてロンドンに歸り一週の後タイン河畔のニューキャッスルに向て出發し其處に四日留まりて後又南方よ向ひ途中各所よ於て説教し五月十七日ロンドンよ歸れり氏はロンドンよて建築委員會を開き是れ氏が當時ロンドンよ於ける主要なる事務ありし五月二十五日(日曜日)三たび北方に向て出發せり六月二十一日復ロンドンよ歸り一週日の後左の如く記せり六月二十八日予は今日を以て七十回の齡を完結せり神の特別なる恩恵に依り予が健康並び予が身体及び精神の諸官能は二十四歳の時と異ならざるなり

ロンドンに滞留すると九日おして六月三十日傳道旅行の途に上りウエ
 一千七百七十七年
 四百八十九

プリストル年會

プリストルを経て七月二十八日プリストルに着し八月五日に年會を開けり此年會より列りたるトーマス、テールは我儕にブロードミート講義所に於ける日曜日朝の禮拜は九時半より殆んど午后一時及び同五時よりウエスレー屋外に於て夥多の聽衆より向て説教し後プリストル會の大集會より於て會則を講演し且つ多くの有益ある事を言ひ而して年會初日は夜より二十分時に過ぎざる説教をなせしことを告げ且つ八月七日自ら記して夫の有徳なる偉人フレッチェル氏年會々場に入り來りしが予は氏を見て涕禁ずること能はざりき氏懇懇に一場の短話をなし後嚴肅より別を告げざり嗚呼氏の眞に敬愛すべき善人なり予は未だ嘗て此時の如く多くの涕を見しことなしと云へり此時フレッチェルは身體非常に瘦衰し恰も幽冥界より歸る者の如き容貌を以てアイルランド氏の腕に倚り議場に入り來りしが之を見るや否や會衆皆起立しウエスレーは自ら進んで之を迎へたりこの一見將に死せんとするが如き聖徒許多の勇敢なる巡回傳道者等に向て説教し始めしが未だ十數言の其耳より達せざるより會衆皆涙に咽びたりウエスレー

年會に於けるフレッチェル

はフレッチェルが過度に説話せんとを恐れ卒然氏の側らより跪き祈禱を始めしが衆皆之に倣へり此時ウエスレーが祈求の要點は今暫く世に在て其務をなすを得んが爲に其友に少しの年を假し給はんとにして氏は非常の熱心と信仰とを以て之を哀求し終りに大なる確信と勢力を以て氏は必ず死せざるべし氏は生き存へて主の事業を宣傳せんと叫び以て衆人の心を悚動せしが今後の事實はウエスレーが此言の過まらざるを證せり蓋しフレッチェルは素より既に死の河邊を逍遙し天光氏が頭上を照らし居りしも其天城の門を越へしは是より八年の後にありしなり

一千七百七十六年の年會記録に在る米のメソヂスト信徒凡て三千百四十八人なることを記載しあるも一千七百七十七年の年會記録より毫も米國に關するの記事なし然れども米國のメソヂスト教派素より死し居たりしにはあらざるあり當時米國に在ての戦争最も劇烈にしてランキン及びピッツダの如き此年十月英國より歸りシヤドフォールドも亦久しからずして歸國し斯て迫害困難の中在て忠實に勤めたるアズベリーを獨り其國に残

米國メソヂスト傳道者

一千七百七十七年

せり斯の如く米國に在るウエスレーの巡回傳道者にして義務を重んじ奮然單行してイエス、キリストの平和を人民に宣べ傳へたる者は當時只アズベリーありしのみ

フランシス、アズベリー

フランシス、アズベリーは世に比類稀なる基督教の使徒にして我儕のウエスレーに對するに殆んど同等の尊敬を與へざるべからず我儕の過る一千八百年間も於て基督教會の役者中克己、勞働の點に於てフランシス、アズベリーの右に出る者なく而して氏も並び得る者も甚だ少なきことを信ぜ然るも全基督教會否其中のメソヂストと稱する一派中に於てすら此偉大なる老翁を識る果して幾許ぞや アズベリーは一農夫の子にして年十七の時よりスタツフォールドシールに於て説教し一千七百七十一年に至り米國に航せんと欲して囊中一錢なくプリストルに來れり米國に於て氏が最初の説教の題は「我イエス、キリスト」と彼の十字架に釘けられし事の外は爾曹の中に在て何をも知るまじと意を定めたりしが是れ氏が四十五年の間森林原野を跋渉したる行事と能く符合せり、一千七百七十六年氏は旅行

及び説教の外毎日書百頁を讀み又三時間の之を私祈禱に費その規則を設けたり氏は屢々最も質朴粗惡なる茅屋に宿どり又鍛冶匠なき曠野に於て其馬の蹄鐵を脱したる際は此米國メソヂストの老監督手づから素皮を取り之を以て馬蹄を包み以て蹄鐵に代ふる等の事をなせり氏は馬上毎日三十英里乃至五十英里を旅せしが其路は或は山あり沼あり橋梁なき河流あり或は道なき森林ありて屢々其馬の全く困憊し又は跛とあるとあるのみならず氏自ら雨雪曝され飢餓に迫まりしと往々おして之ありし此未だ瀛船旅客馬車、汽車等の便なきのみならず殆んど大なる道路すらなかりし時に當り四十五年の間アズベリーは毎年五千英里に下りざる旅行をなし時小或は其旅程六千英里以上に至るとさへありたり氏は通常旅行に馬を用ひしは行路甚だ困難として或は山岳を攀援し或は懸崖を下り鳥獸及びインディアン人の外住む者なき幽谷を迂り伴侶又嚮導者なくして茫漠たる原野を横ぎり又時と激流を渡るとあり或は一步を過たば忽ち泥中を葬らるべき危険なる沼澤を徒渉すると往々なりし而して通常少なくも一日一回の

説教をなし日曜日と於ては三回の説教をなせり、斯くて在米中説教の數は二万以上に上りしと云ふ、氏の必ず己が訪ふ處の家族と共に祈禱するを例とし而して若し一家の中に一日以上滞留する時は其家の食事と同じ度數の家拜をなさしめ且つ其家より來りたる者は必ず共に祈禱し、去る後之を去らしめたり、氏の無數の天幕集會及び四季會に出でしのみならず毎年遠隔せる各地の年會七箇を主理せり、加之氏が一年中其朋友及び傳道者等を送る書翰は平均凡そ一千通ありき、然るに此大なる役務の爲に受けたる俸給は旅費の外一年僅ふ六十四弗に過ぎざりしなり、氏の幼時の教育を受けず而して其生涯の多分の馬上、講壇、又は喧噪なる男女小兒犬等の群集せる茅屋中より費し而して其茅屋の中屢々凍へたる手氷りたる墨汁殆んど用も可らざる筆及び綴よりたる紙を以て説教、日誌、及び書翰を書かざる可らざるの境涯に遭遇せり、又氏は此未墾の新國にて熱病に罹り其伴侶等も亦頭痛、齒痛、寒熱、及び咽喉病等を病めり、フラジシス、アズベリーは幼時の教育を受けず又其生活は前陳の如くなるも、氏は決して無學の人とあらざりしなり

氏は殊に能く拉典、希臘、及び希伯來語と達し而して聖書を讀むに原辭を以てしたるのみならず又諸種の文學に通じ能く時勢と並行せり、氏の演説家と稱すべき者にあらざりしも尙ほ壯嚴有力にして能辯なる説教者にてありしあり、氏の丈高くして少しく瘦せたるが特に著るし、其清潔なることなり、氏の質素なる濃褐色の服裝をなし縁廣くして丈低き帽を戴けり、此米國メソヂスト最初の監督は概ね馬背にありしが其駱するに堪へざるに至ては或は杖に倚り或は輕車に乗て尙ほ餘年の傳道事業に執掌せり、氏は一千八百七十六年齡七十にして世を逝り遺骸はホルテイモールの墓所より葬りし、會葬者の數は無慮二万五千人なりき

ト
米國メソヂス
一千七百七十七年には米國滞在のウエズレーの傳道者として嘗て英國より來りし者は只アズベリー一人のみなりしと雖も氏は必しも孤居せしにあらざり、當時十五の巡回廣く各地に散布し三十四人の巡回傳道者各々其任地に在て勤勞し而して信者たるの名に背かざる會友の數六千九百六十八人に下らざりしなり

ウエスレーの
巡回

是よりウエスレーの記事に移らん。氏はブリストル年會後ロンドンに於て一週日を費し八月十八日急ムコルンウォールに赴き夫より愛爾蘭に航せり。是より先きダブリンに於てジョン・ハンブソン及びサムエル・ブラッドポルンの二人三十四人の會友を放逐せしが彼等會友共處置に服せず爲にウエスレーの此行を煩はすに至れり。ウエスレーは二日間雙方の陳ぶる處を聽き而して十月十八日(土曜日)再びロンドンに歸り其後一週日をオックスフォード・シールに費し而してハイ・ワイコムに於て説教せんとせしがセームスなるもの人をして講義所の窓にて大鼓を打たしめ之を妨げたるを以て祈禱讚美等をなして説教の時刻を送れり。次週はノルスマンプトン・シールの傳道旅行に費やし而して二週日の後ロンドンと其近傍の諸組の集會をなせり。氏は此年殘餘五週日をベッドフォード、ハンティンドン、ヘルトフォードの三郡及びバス、ロンドン等に費せしむ。バスに於ては新講義所の礎石を置きロンドンに於ては瑞西も赴くフレッチェルに別れを告げたり。氏曰く「我儕は祈禱と感謝を以て舊年を送り新年を迎へたり。此時四五

人の定住傳道者予と共に祈りしむ。予の其所禱の質朴流暢にして毫も裝飾なく主意に於ても言詞も於ても能く理に合ひ聖經に符ふを見て大に感歎せり。是れ一千七百七十七年を於けるウエスレーの守夜會にして當夜の説教なく勸話なく只ウエスレーと氏がロンドン定住傳道者數人の感謝祈禱ありしのみなり。

慈善會の設立

爰に尙記憶すべき一事あり。即ち慈善會を設立しして此會は現今存立する同種の諸慈善會の先導者となれり。今其由來を尋ねれば、當時ロンドンに六人の人あり。單に唱歌祈禱の目的を以て毎日曜日の午後順次私宅に於て集會を開きしむ。久しからずして周圍の病者を訪ふとを始めた。而るに彼等其病者中甚だしく貧苦を迫る者許多あるを見て之を救はんことを企てしむ。之をなすは先づ貯金をおすの必要を感じ各自の義捐を加へて他の朋友等の寄附を請ひ暫くよして一會を組織するに至り名けて「ストレンダウ・ウエスレー・ソサエティ」會」と云へり。此會漸々プリストル及び其他の各所に起りしが一千七百九十年に於てウエスレー之が規約を草せり。氏其日誌中に記して曰く「三月

十四日(日曜日)午前予は夫の我會の爲にわらずして全く疾病困苦を沈みたる友なき人々の爲に設けられたる慈善會を開けり予は過る數年内お起りし我儕が會の前に世お斯る會の設けられしを知らず若し果して之なしとせば是亦メソヂスト教派産物の一たるなりと

一千七百七十八年 七十五歳

ウエスレーは此年の始め二ヶ月間之れをロンドンと其近傍に費し三月の始めに至り愛爾蘭に向て出發し七月迄滞在せしが其間特別に我儕が注意を惹くべき異事なし夫の暴民迫害の日は既過ぎ去りウエスレーは往く所として尊敬を受けざるはなく許多の處に於て人々の氏に向て大に好情を表せり氏がチエルモールの乗馬演習所お於て説教したる時の如きは陸軍使令官總兵士に出席を命じ而して己も他の士官等と共に出席せり又コルクにて説教せし時は赤青二隊の義兵出席せし赤隊は側面青隊の正面の回廊に座を占めたり氏はダブリンお於て二十人の傳道者と小年會を開き教會分離の問題に就て討議せり氏曰く我儕充分に此問題を討議

愛國に航す

愛國年會

したる後益固く從來の意見に従ふこととなれり即ち神の只過去に於て教會の内にある我儕を祝し給ひしのみならず今尙之を祝し給へば我儕教會を去るに至當の事に非ることを益々深く認識せりと

ウエスレーは英國年會をリーズお開かんが爲に七月十九日ダブリンを去り途中リヴァプール、ホルトン、ベリー、ロックデール、ハリファクス、ブラッドフォード及びホルスタカお於て説教せしがホルスタルに於ては一万二千乃至一万四千の聴衆群集せりと云へりウエスレーのリーズ年會に就て左の簡單なる記載をなせり

「一千七百七十八年八月四日(火曜日)我儕は此日年會を開けり來會したる傳道者の多きと未だ嘗てあらざる所なり予は木曜日の夜迄毎日期夕二回の説教をなせしお遂に音聲を失ふに至れり依て次日の説教は之を二人の傳道者に依託し土曜日に至りて全く年會を閉ぢたり」
又ベンソン氏は左の如く記せり

「我年會は今終りたるが之れ予が是迄出席したる年會中最良のものに

一千七百七十八年

四百九十九

リーズ年會

てありきウエスレー氏は常々好情を表せられ而して氏が最も有益なる諸説教は非常なる聴衆を得たり氏は淡白簡明以て傳道者に接し親しく之を査察せしが遂に二人の傳道者を失行の爲に年會より除名せり現今に於けるが如く此時に於ても一所に滞在する傳道者も就ては多少困難あるを免かれざりしに此四日の年會中一日の専ら之が爲に費せり現今の或メソヂスト信徒の此事に於てウエスレーの隨意の處置をみせりと思考するが如しと雖も是れ大に然らざるあり當時人々傳道者は先づ措きの傳道者の任地に關し發言權を有せんことを望み而して之を有せしが恰も現今に於けるが如く當時も於ても彼等自ら大に不適當なる傳道者を己が爲に擇ぶと往々みして之ありたり

多くのメソヂスト傳道者の年會后一日の休暇を欲し之を得るを以て樂みとなすと雖も獨りウエスレーは然らず氏は八月八日(土曜日)に年會を終り次日デユースベリーの市場に於て數千の人々に説教し夫より急にロンドンに歸り又コルンウォールに赴きウエスレーの圓形劇場に於て凡そ二

万四千の聴衆に向て説教せり氏はコルンウォールを發し九月四日ブリストルに着し而して此月の終り迄此邑と其近傍の各所に滯留せり此年の剩餘は之をロンドンと例年の小旅行即ちボツキングハム、オックスフォード、ベッドフォールド、ソルスアンプトン、ヘルトフォールド及びケント等の旅行に費せり爰に一の附記すべき事は此間にウエスレーが英國教會の請に依りロンドンにある四ヶ以上の會堂に於て夥多の會衆に説教せし事にして是れ明かき英國教會が其一旦斥けたる傳道者を再び受容するに至りし事を証する者なり

獄舎訪問に就て

本年の年會に提出されたる問題中に「我儕が力の許す限り凡ての獄舎を訪ふと如何」との一問ありしが其答は「是れ素より力を盡してなすべき事にして是より大なる仁愛のあかるべし抑此事の始めよりウエスレー兄弟が殊に力を盡せし所にして其傳道者等も多く其例に従へり

一千七百七十七年八月十四日ウエスレー記して曰く予は「アルミニヤンマガジン」の趣旨其雜誌の組織性質を草せりと此雜誌は九十年の間絶

「アルミニヤンマガジン」の發行

へず連続して今日に至りたるものにして世界の各部に於て夥多の購讀者を有す恐くは是れ當今世上の定期刊行雜誌中最も古き者あるべし

一千七百七十九年 七十六歳

英國の國難

一千七百七十九年の英國の民心大に恟然たりし年にして西班牙の使節の英國書記官の手に宣戰の書を交附してロンドンを去り國務大臣は民兵を倍するの計策をなし而して各活版所は海軍の増加に關し特に繁忙を極めたり當時佛國の歡聲に代へて英國の諸方よりの侵入特に夫のエリザベス女王の時代又侵入したる艦隊より一層恐るべき西班牙の新艦隊侵入の報に由り上下大に動搖し剩さへシブラルタル及びベルギーの戒嚴及び米佛人其他諸國の兇暴の徒を以て組成したる一艦隊を率ひたるパウル、ジョーンズ英國の全東岸を威嚇する等一として英國國民を擾動せしめざるは亦かりき然るに内にしてはジョージ三世一勝利の以て國民に報すべき者を有せざるのみならず米國戰爭は從來の國債に加ふるに既に六千三百万の多額を以てしたり剩さへチャール、フォックスは國の樞密會議又賣國の奸物

國難中のウエズレー

交はり居るを以て國を斯る状態に陥らしめたりとの宣言をなして益々民心を恟々たらしめ人民の國中到る處大に周章狼狽せり○然るにウエズレーは此非常なる國難の時に當り例の如く國中第一流の忠君愛國者たることを表示せり氏は二月八日に於て左の如く記せり予は多くの人々夫の惡の預言者等が我國に來らんとする重き厄難を預言するを聞き多く落膽失心するを見詩篇第四十三篇第五節を引き以て彼等をして手を天に舉げしめんとを勉めたり而して二日の后即ち國民一般の斷食日に於ては夫のアラハムゴンドムの爲に神に憐れを請ふたる事實を題として説教せり

ウエズレーの死

一千七百七十九年ウエズレーが巡回記事を始めに先だち尙ほ一の記すべき事あり 一千七百七十八年五月三十日ウエズレー八十五の齡を以てパリに死せしか其死は凡て不信者の首領たる者の當に預期すべきの死ありき彼が臨終の狀況に關しての世々種々の奇談存すと雖も恐くは左に記するもの如く其出處の確實なる者なかるべしウエズレージョージ三世の侍講の一人ウエズレーの有害ある著書を蒐集し將之を出版

一千七百七十九年

せんとするを聞き憤懣に堪へず或人に左の如き書翰を送れり

「拜啓昨年九月ブリストルの近傍に於て一紳士在パリスのフレツチエ
ル氏より受けたる一書翰を小生に示され候が小生は右紳士に請ふて左
の一部分を寫し取り申候即ち

「ゾオルテール氏はオルレアン候の侍醫にして氏が不信者となしたる
モンシール、トロンクリルスを招き左の如く申され候予は足下が予が命
を助けんとを願ふ足下若し予が日を今六ヶ月延ばすとをなさば予の予
の財産の半ばを足下に與ふべし若し否らざれば予の悪魔の許に往かん
而して足下をも其處お携へ往くべし」

頭に冠を戴きたる者より過大の禮物を受けしハ斯の如き人お御座候
否我教會の神學者にして陛下の侍講たる者の今將出版せんとするもの
は斯る人の著書に御座候嗚呼陛下若し之を知り給へば如何若し斯る著
書の出版者にして其著者又は著書に對して頌詞を附加するが如きとわ
るよ於てハ直よ其等著書の眞價を世に明示すると小生が義務なりと信

じ申候敬白

一千七百七十九年一月四日

ジョーン、ウエスレー

北部巡回

我儕今ウエスレーの旅行(此旅行ハ五ヶ月に亙れり)に追隨するよ當り一
々其詳細を叙するハ必要ならずと思考するを以て只其大略を記述すべし
氏先づニューキャスルに赴き夫より蘇格蘭に到り北の方アイヴォルチ
スに達せり氏記して曰く予は此邑の預想外に甚だまぐ飲酒の悪風に溺れ
居るを聞き毫も憚りなき明白眞率なる言語を以て説教せしが予は其勞の
虚しからざりしを信ず予は暫く會中又在て働さしが其間ハ會友十二人從
來の會友より五六十人又増加し而して其中多くの人々は眞に善く己が信
ずる者を認識せり斯く是迄神の事業を防止せんと勉めたる凡ての勞力ハ
全く徒事に属したりと氏は蘇國に留まると殆んど一ヶ月其間到る處よ於
て大なる敬愛を受け且つ屢々特別ある主の能力の顯現を見たり六月二十
二日其愛するニューキャスルに着し次日左の如く記せり六月二十三日
(水曜日)「此日子は此處に休憩せり是を予が大に愛する處にして亦予が愛

一千七百七十九年

五百五

する人々の在る處なり然るも予は他も愛すべき世界あるを信するが故に起て此處を去り他に向はざる可からず斯くて氏は翌朝此地を去てテイ
 ース河畔のストックトンに向ひ英國の東海岸に沿ひ往く、説教をなし
 て遂にグレート、グリムスビーに達しリンコルンシャーの諸會を訪ひ夫よ
 りドンキヤストル、セフヒールドに進み而してドルビー、ノッティンガム、
 レーセストル、ヒンクレー、及びコヴェントリーを經七月二十三日ロンドン
 に着せり

ロンドン年會

會友減少の理由

一千七百七十九年に於けるウエスレーの年會は八月三日を以て開きし
 が此年會にてロンドンを除くの外他の十九の巡回は皆會友の減少を現
 したれバウエスレー其理由を問ひ遂に左の三事と歸せり即ち 一、屋外説
 教を怠りしと及び新たな所に傳道するを試みざりしと 二、國王に對
 て惡感情を抱き且つ有司等を誹議したること 三、然れども其主要なる理
 由は世の煩慮の増長にして全く世に従屬するに至りしと是なり、此年會
 於て左の事即ち有司を誹議する者及び國民の將來に關し凶事を宣言する

者はメソヂスト傳道者たる能はざるとを議定し而して巡回傳道者等の説
 教後自宅即ち妻の許に急ぎ歸るとありとて之を譴責し向後ハ説教后會の
 集會をなしたる後に非れば決して己が家に歸る可らざるとを誠告せり且
 つ蘇國に於ける事業を復興せしめんが爲に可成的屋外の説教をなし各村
 邑に傳道と試み且つ家々往て各會友を訪ふべきとを彼等に告示せり
 年會の終るや否やウエスレーは其兄弟及び家族と共にウエールズに赴
 き其處は二週日の間留まりて夥多の靜肅ある聽衆ハ説教し九月四日プリ
 ストルに歸り其處に一ヶ月間滯留して周圍の諸會を訪ひ夫よりロンドン
 に還れり氏は十月十一日ノルスマンプロンシャーに向て出發し次週には
 ノスセックスも其次はノルフォルクも小旅行をなし而して后例年の如
 くロンドン會の査察をさせり氏記して曰く予は多少會友の増加を預期せ
 しに豈に計らん大に減少したるを發見せり是れ我傳道者相互の間は嫉妬
 心あるの致す所たるや明なりと

ロンドンに於ける會友減少の理由
 パスに於ける

一千七百七十九年

五百七

きありウエスレー記して曰く「神の愛爾蘭の北部に於けるスミス氏の働きを大に恵み給ひたれば予の氏がハス滯在中其地の會は於て毎日晝日夜の説教をなさんとを請托せり然るに予が其地を去るや否やマクナブ氏烈しく予が處置を反對し且つ是を以て傳道者全体に關する事件ありとし又傳道者の皆年會の命は由て各其任地にある者にして予の命を受けざるにあらざると及び教師の彼等の權利を蹂躪すべからざるとを主張し教師殊にスミス氏も就て種々の悪口をなせり是に於て或者はスミス氏を辨護し或者はマクナブ氏も屬し遂に一會分裂して非常なる擾亂を來たせり」と是れハスに於ける爭論なりしが其結果如何十一月二十二日ウエスレー其兄弟と共に此紛擾を治めんが爲にロンドンを出發してハスに赴き爲し一集會を開けり氏曰く「予の殆んど二十年前之に類似したる事件の起りし時筆せし文書を此集會の前にて朗讀せり而して其中予が特ふ彼等の注意を促がせし傳道者の規則は未だ年會の起らざる前予が制定せし者あり」との一項又特は第十二項凡て傳道者は予が任する時又處ふ於て傳道すべしとの

点ありしがマクナブ氏の執拗も此規則に逆ひ斯擾亂を惹起せり翌朝傳道者は集會に於て予はマクナブ氏に向ひ氏の我儕が主要なる規則は從はざるを以て之に從ふの心起る迄は我傳道者たるを得ざる旨を告げたり十一月二十四日(水曜日)予は同一の文書をブリストル會の前よて朗讀せしが是れ此擾亂の火炎延て其地に及びたればなり此事件の爲ハスに於ける小數の者我儕より離れしと雖ども他の者は充分満足して我會を止れり」と是れウエスレーの日記に記載さるる者なるが尙八ヶ月の後氏は左の如く記せり「マクナブ氏スミス氏と争ふてハスの信者中に烈火を投じ而して憤怒嫉妬互に他人を議る事及び誹譏、讒謗等の媒介を爲し爲し今日迄之を醫せんとするの勞其功を見ざるあり」

ウエスレーは此事件に關し凡ての罪過を唯りマクナブ氏に歸すと雖も是果して至當の事ある乎我儕之を疑はざるを得ずアレキサンドル、マクナブは未だ中年なりしと雖も決して凡庸の人とあらざりしなり我儕ハス氏が其人望に於て又有力なる説教者として彼ハ匹敵し得ざりしや否甚

だ之を疑ふなり、マクナブの罪過は不正なる教理を教へたる事非ず不道徳又ハ不適任の故にあらず又條例に不注意なりし事も非ず(彼は忠實に其任せられたる役務をなして成効し大に人民の望を得たり)して單に夫の講壇上の勢力に於て已より劣るとあるも勝るとなき愛爾蘭の一旅客に其講壇を譲るべきウエズレーの命令を拒みたるの一事なり然るにウエズレーは之を以て直に彼を傳道者中より除却せりウエズレーは之を行ふたとどひ幾許の苦痛を感じたりとも我儕は斷じて其處置を以て不當となさざるを得ざるなり、然るに惡事を矯正するに敏なるウエズレー専らホイソン氏其他ロンドンの傳道者等の仲保に由り遂にマクナブ氏と和せしがウエズレーの之に由て大に其兄弟の心を傷へり(因ふ云ふ氏がバスに於ける所行は主として其兄弟チャーハスの強迫に由り去るものあり)マクナブ氏は一千七百八十年の年會に於て舊職に復しセフヒールドを擔任するとなりしが是れ實にウエズレーと同氏との譽れあり

最初の聖書會社

グレートブリテン(否、恐くは世界)に於ける最初の聖書會社は夫の一千七

百七十九年設立されたるものにしてメソヂスト教徒の創始に係れり、ジョージ・カスソンス及びジョン・デヴィーの二人或日ウエスト、ストリート講義所の長吏會後歸途談話の末(ソホ、スクエール)に近づきたる頃兵卒等が懷中聖書を供給する爲に資本の募集をなさんとを決し而して朋友十數人と共に此目的を達せんが爲に一の會を組織し毎月一回オックスフォールド街のドブソン氏宅に集會せりクラファムのジョン、ソールントン氏も亦其賛成者の一人となり、此會は聖書の第一包荷をウエズレーのウエスト、ストリート講義所より發送し此會の爲になしたる第一の説教も亦同講義所に於て、ペリシテ人怖れて言ひけるは神陳營に到る又言ひけるは嗚呼我儕庸なるかな今に至る迄斯る事なかりきとの題を以てコルンズ氏之をなせり斯くして、海陸軍聖書會社なるもの起りしが其英國及外國聖書會社(一千八百〇四年に創立されしもの)に先だつと十五年なり、此會は現今尙活潑なる運動をなせるが是れ恐くは現時存立する聖書會社中最古の者なるべし

一千七百八十年 七十七歳

一千七百八十年

北部巡回

一千七百八十年の英國歴史中殊々著るしき年にして戦争は四方に烈しく商業は暴瀰停滯し而して租税は益々重きを加へたり。〇ウエスレーは此年の始め二ヶ月間をロンドンと其周圍の地方を費し二月二十八日に到り北部旅行の途に就けり氏は這回始めてデルフに於て説教せしが自ら左の如く記せり。四月七日予は山上の一小村デルフに赴きしが神の事業は正に著るしく此處に發起せり予が着するや否や一教師使を遣はして予が彼の會堂にて説教するを喜ぶ旨を傳言せり人々之を聞き群をなして直に此村を去る殆んど一英里なる彼の會堂に集まりしが未だ十分時を出でざるに彼れ前言を取消を旨を言ひ送り我儕爲すべき所を知らざりしも幸にして獨立會の委員等は其會場を貸與しされば其所よて集會を開き夥多の聽衆直に家々滿つるに至れり而して神は實に此集會に於て其道の証を奇し給へり。此北部旅行中ウエスレーの始めてハウオールの會堂に於て説教するを拒絶されたり氏記して曰く四月二十三日(日曜日)リチャードソン氏予がハウオールの會堂に於て説教するを好まざれば神の攝理は予に他

「貧者の便利を忘るゝ勿れ」

の會堂を與へり即ち予は午前と午后の兩回ビングレー會堂にて説教せしが此會堂は前者に比すれば大に廣濶なりし」と氏の又此旅行中ブラックホルンに於て初度の説教をなせり氏記して曰く四月二十七日予の爽快ある心を以てトッドモルデン會堂に於て説教し午後ブラックホルンに赴けり時に邑中擧て動搖するの状況にして斯無數の人民を容るべき會場あきま苦めり蓋我儕は日光の故に由り屋外に集會するを得ざりしあり遂に止を得ず説教所に於てせしが邑中の重要ある人々皆來會し居たり。此地のバンニング氏のウエスレーの一將なりしが一日ウエスレーと共に當時建築中なる近傍の講義所に到りし時ウエスレーハ氏に向ひバンニング氏よ予の子よ一の願あり此講義所には首導唱歌者の爲に一脚のビニー(長椅)を備ふるの外他はビニーを設置す可らず且決して貧者の便利を忘るゝ勿れ貧者は神が其教會を建て給ふ材料にして富者の善き觀臺たるも善き材料に非ざるなり」と云へりと眞に味ある言と云ふべし。四十年前に於てはウエスレー國教會より却けられ敢て其講壇に立つとを得ざりしが當時の到る

所教長、副教長、教師、其他の人々より彼等の會堂に於て説教せんを請はるゝに至れり是れ豈に氏が名望の愈々高まりし一証にあらずや、五月十一日
 ウエスレー、ニューキヤッスルに着し夫より蘇格蘭に進み歸途、ニューアル
 ク、ヌーア、此所は二十四年前暴徒等市場のメソヂェスト講壇を焚き泥土砂
 礫を以て傳道者トーマス、リーを撃ち刺さへ之をトレント河に投入して無
 残も沈溺せしめ尙之を以て足れりとせず一人の畫工畫器を携へ來りて
 最も可笑状態に氏を繪どる等實に暴悪なる迫害をなせし處なるがウエス
 レーは全く豹變せる當時の状況を左の如く記せり、一千七百八十年六月十
 二日、ニューアルク的朋友が予が説教すべき場所に就て分れ争ひしが遂
 ん三面は塞がりて一面と市街に向へる便利の場所を得て之を説教所に充
 てたり其所には容易く二三千人を容れしが彼等は非常なる注意を以て予
 ん聽けり只一人は大男あり甚だしく酒に酔ひ大聲を發して妨害をなせし
 が其妻は彼を襟を捉へ平手にて二三度其耳を撃ち而して犢の如くに之を牽
 き去れり然るに彼後に妻の手を逃さず偕へん聽衆中に入り來りて羔の如く

ニューアルク
 及びウエスレ
 ーに於けるリ

誕生日

靜かに佇立せり、氏はセフヒールドに於て己の誕生日を迎へて左の如く記
 せり、六月二十八日、予は此日を以て七十八歳に入るの初日ありと思惟
 し、難し、予は神の恩恵により今夫の二十八歳に入りし日と同様、感ずるな
 り是れ専ら予が絶へざる勞働と早起と朝夕の説教とにより神が予をあし
 給へる所のものあり、此後氏のロンドンに歸り一週間滞在の後年會の爲に
 其兄弟と共にプリストルに向て出發せり、氏記して曰く、八月一日、此日年
 會を開く從來の年會に於ては多く時の爲に拘束されしを以て此年會に於
 て之に關し左の如く決せり、神の事業は關する諸事を充分に考察するを得
 ん爲、今后年會開會の日數を九日乃至十日とす、此年會は八月一日より同
 九日に至りしが其主要なる事務は過去諸年會記録の再査なり、又此年會
 於て種々の變更をなし殊に組會の改革をなせり、即ち各組會は從來の不
 適任なる組長を除き一層活ける有益なる組會と爲し特に組長に任せらる
 べきもの、只に正當なる智慮あるのみならず又眞に敬虔あらざる可らざ
 るとせり、又若し傳道者の午前五時、二十人の聽衆を得ば必ず説教をべ

プリストル年
 會

組會の改革

傳道者の要務

きものにして若ま其より小數なれば唱歌祈禱をあして止むべきことに決せり、又ウエスレーの傳道者等に向て左の如く云へり「諸子注意せよ、諸子の職掌は幾何回説教すべきとに非ず、又此會或は彼會の看護をあそとにも非ず、諸子の職掌は力の限り可成多くの靈魂を救ひ可成多くの罪人を悔改に導き而して全力を盡して之を教育し全く之を聖之なくしては彼等主を見る能はずとならしむるにあり、且記憶せよ、凡てメソヂスト傳道者たる者はメソヂスト條例の各項目を大どかく小どなく悉く遵奉すべきものあるとを諸子の實は是等を行ふ爲に諸子が有する凡ての才能を要するなり、又年會員の皆傳道者の精神の薄弱あるは専ら斷食を忘るゝ由るを及び彼等は平常明白ある義務を怠るに由て絶へず神の聖靈を悲ましめたるを承認せり」

此プリストル年會の後ウエスレーはユルンケオールに向て出發し八月の終り又至てプリストルに歸り其所あて次の一ヶ月を費やし而して十月七日ロンドンへ還れり一週日の後又トンプリツヂ、ウエルス及びケンブリ

邑の巡回を始め之を終て後例の如くノルスマンプトン、シェール、オックスフォード、シール、及びベッドフォード、シールに小旅行をあし年末の一ヶ月の専らロンドンにて費せり氏の其日誌中左の記載をあして此年を終れり「十二月三十一日(日曜日)―我儕の神との契約を新たよせり、此時の集會の予が記憶する集會中最大のものにして恐くは昨年の會衆より多きと二百人なりしなるべし而して我儕大なる恩恵を被むり或者は罪の赦に關し深く神の愛を感じし或者は全心を以て神を愛するの力を得たり」

一千七百八十一年 七十八歳

ウエスレーは此年愛爾蘭に航せんと欲せしも或沮碍の爲よ之を果さず而して是に費すべき時日は之を英國及びウエールス中臨時の巡回を費せり、氏は今七十八歳に達したるが其驚くべき勢力と勞働とに關し正當なる觀念を得んが爲に我儕が數年來なせしより一層精密に其行爲を記述するは蓋し肝要の事なるべし

ウエスレー記して曰く「一千七百八十一年一月一日―我儕は例の如く午

七十八歳の老翁
七日間毎日
三回の説教を
なす

リン年會

り、氏の二日の後エプウォルスに着し左の如く記せり予は七日の間毎日三回の説教をなせり然れども予に在ては毎日一回なせしと毫も異なることなかりき、氏リンコンシルに留まること十二日なりしが其間又説教せしと二十回以上に上れり、次の十日間をリンコンシル中許多の他の會を訪ふとに費し七月二十三日ヨルクシルに進み而して八月の始に至りてリンツに達せり蓋し氏は此所まで年會を開かんと欲するなり
一千七百八十一年の年會は記憶すべき年會にして其開會に先だち八月五日(日曜日)リンツの會堂に於て禮拜式を行へり是蓋し前後未聞の事あるべし此時説教したる者はウエスレーにして氏とコーク、フレッチェルの二氏を合せ総て十八人の教師出席し主の晩餐の氏と十人の教師之を司どり之の與かりし者凡そ一千一百人なりき、ウエスレー記して曰く八月六日予の會議中よ起る難問題を商議する爲にフレッチェル氏博士コーク氏及び他四人の兄弟等に毎夜會せんを請へり、我年會は八月七日に開會せしが此時予が招きに應じて來會したる傳道者の數は凡そ七十人なりきと

ウエスレー夫
人の死

年會の終るや否や氏は直に傳道旅行に出發しセフヒールに於て説教したる後博士コークと共に馬車にて晝夜兼行してロンドンに向へり斯てロンドンに留まると二日八月十九日(日曜日)の夜馬車にてコルクウォールに赴き其處にて八日間に十三回又下らざる説教をなせしが其五回は郊外に於てし一回はウエンナップ、ピットに於て二万以上の聽衆に向て之をなせり
九月六日プリストルに歸り而して例の如く此地方に一ヶ月を費せり
世には第五誠を背きたる婚姻の外他の不幸ある婚姻あるとあるがウエスレーの婚姻は即ち其一なり氏ハ三十年の間夫の一千七百五十一年おける粗忽なる行爲の報果を収めたりしが今漸く此不幸より脱するを得たり、氏は十月七日プリストルを去り途中デグイゼス、サラム、ウインチェストル及びワイト島に於て説教し同十二日ロンドンに到着せしが同日其日誌より左の如く記せり予は予が妻の月曜日(十月八日)に眠りたることを知らせらるるより彼の其夕葬られたりしが予が之を聞きしは一二日の後にありき、斯る妻の爲に哀悼するに殆んど偽善なるべし、三日の後即ち十月十五日氏の

一千七百八十一年

五百二十一

前四時に集會をなし而して凡て敵の手より我儕を救ひて安然に新年を迎へしめ給ひし神を頌讚せりと二月十二日氏はノルフオルクの一週日旅行を始め之を終りて後ロンドンに歸りしが歸途十回も下らざる説教をなし且つ冬季短日の候に於て二百英里以上を旅せりロンドンに留まると數日よして三月四日(日曜日)愛爾蘭に赴かんと欲してロンドンを發しバス及びプリストル地方に二週日を費し三月十九日プリストルを去り十一日の后マンチェストルに達せり其間説教をなすと二十回に下らざりしが其數回は郊外に於てなせりウエズレー早く愛爾蘭に達せんを望んで四月十二日リヴルプールより乗船せしが出港後幾許もなくして大風に逢ひ之が爲お大に惱まされて二日の間の豆より大なる物を呑み下す能はず頭より足に至る迄惣身苦痛を來たし臥牀の中に在て自ら身を動かすと能はざるに至れり是れ氏が四十年來海上に在て嘗て經驗せざる苦痛なりしなり時よ海は益々激浪を起しウエズレーと共同行者の馬は烈しく荒れ甲板上の戸口の閉塞され水の船艙に満ると深さ三英尺及び舵は全く用をなさず

海上の難

して船は烈しく風下の海岸に向て吹き遣られたりウエズレー曰く予はプロイド、スノーデン、及びブラッドフォールド氏等と共に祈りし其祈は恩恵の聖座に達し幾許もなくしてホーリーヘッド港に着せり予は如何にして此よ着いたるやを知らず是れ我儕二晝夜の間大に風浪に惱まされざる後おてありしあり予は反覆熟考して此愛爾蘭行の神の聖旨おあらざることを認知したれば猶豫なく直に驛車に乗り次夜チェストルに着せりと氏は斯く愛爾蘭行の目的を損つ遂に各地の傳道旅行に出發し五月十六日ウオルセストルに着して其循環に留まると一ヶ月其間凡そ三十回の説教をなせり氏進んでマン嶋に到り八日の滞在中遍く嶋の各部を巡回し而して説教せしと十二回に下らざりき當時此嶋の人口三万中二千以上のメソヂスト信徒と英國の定住傳道者に劣らざる二十人の倔強なる定住傳道者ありたり氏のマン嶋を去り途中コツコルマウス、バランテ子及びカライに於て説教し而してニューキャスルに着し其地方に八日を費やし十回乃至十二回の説教をなし夫よりニューキャスル、ヨルク間の諸會を歴訪せ

七十八歳の老
翁七日間毎日
三回の説教を
なす

り、氏の二日の後エアウォルヌに着し左の如く記せり予は七日の間毎日三回の説教をなせり然れども予に在ては毎日一回なせしと毫も異なることなかりき、氏リンコンシルムに留まること十二日なりしが其間又説教せしと二十回以上に上れり、次の十日間をリンコンシルム中許多の他の會を訪ふとに費し七月二十三日ヨルクシルムに進み而して八月の始に至りてリーツに達せり蓋し氏は此所まで年會を開かんと欲するなり

リーツ年會

一千七百八十一年の年會は記憶すべき年會にして其開會に先だち八月五日(日曜日)リーツの會堂に於て禮拜式を行へり是蓋し前後未開の事あるべし此時説教したる者はウエズレーにして氏とコーク、フレッチェルの二氏を合せ総て十八人の教師出席し主の晚餐の氏と十人の教師之を司どり之に與かりし者凡そ一千一百人なりき、ウエズレー記して曰く八月六日予の會議中又起る難問題を商議する爲にフレッチェル氏博士コーク氏及び他四人の兄弟等に毎夜會せんとを請へり、我年會は八月七日に開會せしが此時予が招きに應じて來會したる傳道者の數は凡そ七十人なりきと

ウエズレー夫
人の死

年會の終るや否や氏は直に傳道旅行に出發しセフヒールドに於て説教したる後博士コークと共に馬車にて晝夜兼行してロンドンに向へり斯てロンドンに留まると二日八月十九日(日曜日)の夜馬車にてコルンウォールに赴き其處にて八日間に十三回又下らざる説教をなせしが其五回は郊外に於てし一回はウエンナップ、ピットに於て二万以上の聴衆に向て之をおせり九月六日プリストルに歸り而して例の如く此地方に一ヶ月を費せり

世には第五誠を背きたる婚姻の外他の不幸ある婚姻あるとあるがウエズレーの婚姻は即ち其一なり氏ハ三十年の間夫の一千七百五十一年おける粗忽なる行爲の罪果を収めたりしが今漸く此不幸より脱するを得たり、氏は十月七日プリストルを去り途中デヴィゼス、サラム、ウインチェストル及びワイト島お於て説教し同十二日ロンドンに着せしが同日其日誌に左の如く記せり予は予が妻の月曜日(十月八日)に眠りたることを知らせらるるより彼の其夕葬られたりしが予が之を聞きしは一二日の後にありき、斯る妻の爲に哀悼するに殆んど偽善なるべし、三日の後即ち十月十五日氏の

一千七百八十一年

五百二十一

オックスフォードシールの諸會を訪へんが爲に出發し之を終りてノルfolkは赴き夫よりロンドンに還りて十一月五日よりロンドン諸組の集會を始め而して左の如く云へり予は此會に於て著るしき會友の増加を見たり予は此増加を以て重もに少數の青年等が毎朝五時の祈禱會を善く守りしとに歸す氏は夫よりノルスマンプトンシール、ハンティンドンシール、ベッドフォールドシール、ソスセックス、及びケントに旅しロンドンに於て此年を終れり

英米間の戦争は今尙連續し英國は益々困難を極め内閣常に動搖せしむ遂に其更迭を以て兩國間の事爰に其局を結べり

一千七百八十二年 七十九歳

ウエズレーは例の如く此年の始め二ヶ月間ロンドンに留まりしが其間に最も注意すべき事件は雜書會社の創立あり是れ世界に於て雜書會社の嚆矢として夫の一千七百九十九年に創立されたる宗教雜書會社に先だつと十七年なり今茲に創立されたるウエズレーの雜書會社は同様の体裁

雜書會社の嚆矢

を以て今日に繼續せずと雖ども一千八百六十七年於てシタイー、ロードに於けるウエズレーの書房より發賣したる雜書の部数は百五十七万部に下らずして一千八百七十一年於て其出版したる雜書は一千二百五十種以上ありしなり

三月三日ウエズレー馬車にてブリストルに赴き其處に二週間留まりて後例の長き北部旅行の途に就けり氏の途中マデレーに於てフレッチェル夫妻を訪ひしが彼等ウエズレーに向て己等が百方方を盡したるにも拘りらる人々の敢て會に來り屬せざることを歎訴せり然るに此副教長と其新婦(ミス、ボサンケット)のなし能はざりし處ウエズレー之をなせり氏二回の有力なる説教をまじり而して後人々々向て凡て基督信者の交りに加はらんと欲する者は散會後氏とフレッチェル氏の許に來らんことを求めしお之に應せし者九十四人(男女の數殆んど相半ばせり)なりきウエズレー曰く「我儕の其人々々基督教協會の性質を説明せしが彼等喜んで之に入會せりと、氏は夫よりコングレグレーションに進みしが其處にてハカルズイン派の信者等

北部巡回

フレッチェルのなし能はざりし所ウエズレー之をなせり

メソヂストの群羊を害せんと力め居たり、氏はマクレスフィールドに於て「グッド、フライデー」及び「イーストル、ソンデー」を過せし、「グッド、フライデー」はデヅイッド、シンプソン氏の會堂に於て二回の説教をなし且つ一千三百人に聖餐を施しシンプソン氏之を補佐したり、「イーストル、ソンデー」に於ても亦同所を於て二回の説教をなし而して八百人、聖餐を施せり其夜復メソヂスト講義所を於て説教し而して愛餐を行ひしが此時完全なる愛の幸なる生活をなさんと言ひ出でたる者十六人乃至十八人ありき、ウエスレーが訪ひし凡ての所と記載するは甚だ繁雜なれば只一二ヶ所に於ける事實を記して此旅行の記事を終るべし、ケルンに於て氏の博士ドグラス氏宅の階子より倒れに轉落せしが幸にして甚だしき傷害を蒙らざりき、ヨルクに於て八十歳の誕生日を迎へ而して左の如く記せり「神に讃むべきか、予は業務を執るゝ困難痛苦を感ぜざると尙二十五歳の時に於けるが如し予は之を以て今尙左の數事に歸す (一) 神が予をして其召さし目的を成さしめんが爲に予が上に置き給ふ神の力 (二) 予が毎年なす處の四五千英里の旅

誕生日

行 (三) 夜よても晝にても予が欲する時に睡眠せると (四) 毎朝一定の時刻に起き出づると (五) 予が絶へず時に朝に於て説教すると

ウエスレーは四ヶ月間の旅行の後即ち七月二十日ロンドンへ還り其處にて年會を開けり氏記して曰く我儕八月二日(金曜日)を以て將に開かんとする年會の上、神の恩恵あらんことを祈るの日又斷食日として之を守りしが神の開會中常ならぬ恩恵を我儕の上に降し給へり實に諸方より來集したる傳道者等の單に此恩恵を受けん爲に來りしとするも其來會の勞は敢て空しからざりしを知る」と此年會に於て討議したる種々の問題中安息日に關するの問題あり從來メソヂスト信徒の日曜日に於て時に理髮所に往て髮を理むる者あり或は義兵として陸軍の演習をなす者あり又或は斯る演習を參觀する者等ありされば此年會の向後會友の日曜日に於て理髮すると禁ト而して安息日を聖く守る理髮職の者は可成之を救助すべきと又メソヂスト教徒として安息日に義兵として演習をなし又ハ相當の教誡を加へられたる後尙斯る安息日の演習を參觀したる者は之を退會せし

ロンドン年會

教會の教師等
とウエスレー

ひるとなせり
當時教會の教師等としてウエスレーの友となる者絶へず増加せり彼等は漸々ウエスレーの心志動作を了知稱讚して之を厚待し其友たらんことを求め且つ事に臨みては其意見を聞かんとを望めり

八月十五日ウエスレー西方に向て出發せしが曩きも氏が反對者ありし監督ラヴィングトン氏の住せしエキセトルに於ては雷々人々厚き友情を以て氏を迎へたるのみならず右の監督も日曜日も氏を自宅に招きて饗應せり此時其食卓に列しゑる者他に五人の教師と四人の市尹なりき氏進んでフリマウスに到りスクエールに於て説教せし時一隊の兵卒軍樂を奏して其處に進み寄りしに指令官説教者を見るや否や直に軍樂を停止し兵卒等を會場に近づけて之を聽かしめたりウエスレー曰く「彼等は予が祝福をなす迄全く靜肅にして毫も妨害をなさず場中の靜かなると恰も夜中の如くなりき」と

教長タムソン

コルンウォールにて氏の舊友セント・ゲニス教會の教長タムソン氏の死に

氏とウエスレー

瀕せるを聞けり氏が始めてタムソン氏の會堂にて説教せしより今既三十七年の星霜を経過せしが其間彼等の誠實な其友誼を守れり此將も死せんとする教長は今一度ウエスレーを見んとを願ひしにウエスレーは最良の馬を借り馳せて教長の宅に赴き後左の如く記せり予は其家に着してタムソン氏が僅かに生命を保持し居るを見たり氏は此時尙明確なる感覺を有し已に最期の狀況に關して多くの疑惑を懷き而して今死する事を好まざるのとならず却て之を恐れたり依て予は氏を慰藉し固く神に信頼せしむるを勉め而して氏の望に従ひ主の晩餐を施し後其許を去りしが其去る頃の氏が心情は來りて氏を見し時の心情に勝りて大に平和喜樂ある狀況なりき○ウエスレー馬を驅てタムソン氏の宅に向ひ急げる途中一人の舊友に邂逅せしむ之に就て氏の如く記せり予は途中白髮の老人に遭ひしが彼手を捉へて「君よ、足下は予を知り給はざるかと云ひしかば予「否」と答へたり然るも彼語を繼て「我父我父予の憫然なるジョン・トレンパスなり」と云へり是に於て予は彼がロインセストンに於て今夕予と語らんとを望みし

一舊友に邂逅す

が彼之を諾して其如くなせり、彼は暫時非常なる困難に陥り他人の爲に生
 墻と結び池溝を掘り以て僅かに露命を繋ぎ居りしが其困難の中より神に
 頼み求めしを以て神は之に答へて彼に平和を與へ且つ甚だ危篤ありし一
 紳士の病を癒し其後數人の病を癒すとを得させ給ひ従て彼の名聲漸く人
 々の中に廣まりて當時は相應の生活をあすに至れり彼曰く「今予の何を
 需めず予の嘗て有せざりし福を有す」と、抑此ジョン・トレンバスとは何人な
 る乎是れウエスレーが最初の巡回傳道者の一人にして一千七百四十三年
 又傳道を始め數年間ウエスレーの麾下に在て勤勉勞力せし能辯なる熱心
 家にして耻づべき處なき役者にてありしあり彼の識見深かりしよあらず
 と雖も其民間より人望ある殆んど人々に崇拜さるゝの狀なりしが憐れむ
 べし後の二十年間に於て彼の罪と耻と不幸との下底に沈めり抑も彼をし
 て斯る悲境に陥らしめしものゝ人民の虚しき稱讚にして彼は漸く自負誇
 大の惡風を生じ且つ屢々不信實なる舉動を現はせり、彼を妻を娶り讀書を
 止め鋤犁を把り飲酒喫煙に耽り人に諂ひ而して其語り得る所の僅かよ牛

馬の事とに過ぎざる下等頑愚の人民と伍し後は獵師となりて生活を營み
 しが遂に潜賣の嫌疑を蒙るに至れり實に彼の生涯は一の小説を成せしが
 今はウエスレーが言ひし如く「ジョン・トレンバス再生せり」二人奇遇の后一
 ケ月にしてトレンバスウエスレーに左の如く書き贈さる「神は予を赦し給
 ひしも予は己を赦す能はず予は貴重なる時日を浪費し幾多の年を失ひ且
 つ榮ある刈禾を忘れり此惘然なるトレンバスは凡ろ一千七百九十三年又
 癡癡の爲にコルクに死せり

アダム、クラ
 ルク

是等はウエスレーがコロンウォールに於て遭遇したる舊友なるが九月
 六日プリストルに還るに及び一人の懇切にして正直忠實なる青年と會へ
 り是即ちアダム、クラルク氏にして氏は正に少年の時代を終へて愛爾蘭よ
 り此地より來りし者あり氏の價一ペンニーの麵麩と半ペンニーを以て買ひ
 得たる林檎とを以てボルミングハムよりプリストルに來り而してキング
 スウード學校に著せし時は僅かに一ペンニー半を有せしのみなりき氏の
 校長シンプソン氏より冷淡なる待遇を受け剩さへ其愚昧横恣なる夫人は

氏が疥癬を患へんことを慮りて全身にマヤクソン油を塗るべきことを命せり而るに此軟膏の悪臭氏が鼻を衝くと鼯鼠イヌネの悪臭よりも甚だしかりき而して其與へられたる食物は只少量の麵麩と牛乳のみにして三週間餘は氏に對し一人の親切なる行爲を表はす者なく而して氏がシンブソン夫人を恐るゝとは恰も悪魔を恐るゝが如くなりきウエスレーニロンウオールより此地より来りクラルク氏に面會し氏が頭上に手を按て之を祝し數分間氏が上に神の恩恵あらんとを祈り後氏をメソヂスト傳道者としてウヰルトルに遣はせり、アダム、クラルクは是より五十年の後ロンドンに於て死せしが氏の其品性上非難すべき處なき巡回傳道者、當代屈指の博學深識の大家、夥多の書を筆したる著述家、哲學者、及び諸王侯の友にして凡そ氏を識る者は皆之を愛せざるなし

ウエスレーは十月七日プリストルを去てロンドンに向ひ途中ワイト島のニユーポルトに於て説教し左の如く記せり、此處は迫害の時期既に去りて福音傳播の期正に成熟せり、ニユーポルトに於て第一のメソヂスト講義

エリザベス
ウオルブリッ
ヂ

所はノード、ヒルに於ける一室としてウエスレーが謂へる迫害とは大鼓、錘、及び鈴鐘等を鳴らすと、腐卵、木片及び石を投ずると、室中の燈火を消さんが爲め雀を放つこと、及び室内の禮拜者をして息を塞がしめん爲に煙筒の頂を塞ぎ戸を閉づる等のとあてありしなり、夫のロベルト、ウオルブリッヂがウエスレーの説教を聞き改悔してメソヂスト信徒となり、是は此時此ニユーポルトに於てのことにして後彼はメソヂスト定住傳道者となり、彼が姉妹エリザベス、ウオルブリッヂは當時十二歳なる美髮紅顔の少女にてありしが別に高等の教育を受けしとなく或家の下婢となりて儘かに口を糊せり然れども性輕快おして奇智に富み殊に美裝を好み此女メソヂスト傳道者ゼームス、クラツプの傳道に由て改悔しメソヂスト信徒となり終身其教を守れり其父はタニエ、マイルマン氏の牧したる教會の信者なりしか氏は彼(父)が南洋諸嶋傳道の爲に出帆する暫時前に於て其(父)履歴を雜書として出版せりエリザベスの兄弟ロベルトはメソヂスト定住傳道者たるに四十年にして一千八百三十七年ニユーポルトに於て死しエリザベスハ

先是二千八百〇一年三十一の齡を以て世を逝れり其臨終に彼を訪ふたるレ、リツチモンド氏は此女の傳記を著はし名けて「ウエスレーの娘」と云へり氏は其傳記中に此女傑がメソヂヤスト信徒あると言はず此書は其賣高數百萬卷に上り三十餘の國語に翻譯され而して三十年前迄此書に由て改悔したる者三百五十人に上れり

ウエスレーの十月十一日ロンドンに著し而して例の如く其處及び英國南部の八九郡中に於て此年爾餘の時日を費せり

一千七百八十三年 八十歳

一千七百八十三年の始めに於けるウエスレーの日記中に左の記事あり二月十日(金曜日)予は再びペロテット氏を訪へり氏は今九十の高齡に達し其風采は甚だ尊敬すべく其心は全く愛を以て満てるが如し而して其理會力の如き只僅かに損耗せるのみ予は氏が今暫く生存し而して氏を見氏に聽く人々の福祥たらんとを希望して止まざるなり是れ凡る四十年の間斷へず友誼を厚ふしたる親友に就てウエスレーがなしたる殊勝ある記載

にして今一の我儕が注意すべき記載は一月十九日予は午后にセント、トーマス會堂に於て説教し夜に至りてセント、スウヰン會堂に於て説教せり當時風潮一轉して予は自ら應ずる能はざる程に四方教會の招を蒙れりとの一事なり一千七百八十三年と一千七百三十九年との相違果して何如ぞや

ウエスレーの元來資産を有せし人にあらず其諸種の企圖の爲に募集したる金額は實に莫大なりと雖ども自ら受けし處は夫の一年四十パウンドを受けたる一小牧師の俸給に足らざりしなり氏はロンドンの年季決算會に於て左の如く記せり二月二十一日(金曜日)我儕の年季決算會に於て一年間の出納を檢査し而して毎年歳入の金額三千パウンド以上に上れるとを了知せり然れども是皆諸種の費用に消費せるものにして其中予が毎年受たる金額は三十パウンドを過ぎざるあり

三月二日氏はブリストルに向て出發し十二日間其地方に於て或は説教し或は諸組會の會合をなし後大に身体の不快感を感せしも尙ほ二日の間續

ウエスレーが
俸給一小牧師
の俸給に及ば
ず

大病

て之をなしたりしが遂に病床に就かざる可らざるに至り烈しき咳嗽を起し熱を發し大に身体の衰弱を來たせり、先是氏の次朝より愛爾蘭に向て出發するの予定をなし既にストラウツド及び其他沿道の諸所に其巡回の時日を報知したりしも病の爲に予定の如くなを能はざりしが幸にしてプリストルは在りたるブリアン、コリンズ氏ウオラセストルに至る迄ウエズレーは代りて巡回するをなれり是に於てコリンズ氏の三月十七日ストラウツドに向て出發せしがウエズレーは其日稍々快氣を感じ輕忽も同日午後コリンズ氏の後を追ふて出發しストラウツド會に於て簡單なる勸をなせり然るに次の三日間の容体非常に悪しく全神経系統烈しく惱亂し其咳嗽の如き最も甚だしくして全身拘攣し勢力全く身体を離れて只に思考するを得ざるのみならず自ら動くことなし能はざるに至り、ウエズレーが病狀危篤の飛報遠近に達するや傳道者等の相集まりて尙暫く彼の命を延ばし給はんとを神に哀求せしがウエズレーは其時より速に快方に赴き、斯く三日の間危篤なりしにも拘はらず、第四日の朝に至り自ら左の如く記せ

り劇烈なる拘攣全く熱を奪ひ去れり予之を見るや否や直に驛車を命じて出發し午後ウオラセストルに着し其處にてコリンズ氏に追ひ及びべり氏の予定の各所へ於て予が代理をなし而して人々に大なる益を與へたり、翌朝予は簡單なる勸をなし而してホルミングハムに赴けり氏は其處にて身体を通電し而して四十五分間の説教をなし夫よりヒンクレイに赴き靜肅なる聴衆に向て三日の間朝夕の説教をなせり、其他諸會を巡訪しつゝ、ホーリーヘッドに到り四月十三日ダブリンに着せり氏は三週日の間ヘンリー、ブルック氏の客となり而してダブリン會の痛歎すべき分裂を治せるとに盡力せり氏は四日間愛爾蘭の傳道者と年會を開き而して左の如く云へり、會中凡て平和と愛とを以て充滿せり、又曰く予は我英國の傳道者等が皆此國の傳道者等と同精神ならんとを望む、此國の傳道者の中には甚も爭論などの精神あるとなく其單純にして教誨し易きと予が何れの傳道者社會中にも見ざる處なりと、五月八日英國に向て出帆し十日の后マンチエストルに着せり此處にて氏は聖餐式を行ひ之と與かる者千三四百人の大數なりし

が自ら「マンチエストル」に於て斯る大觀は未だ嘗て之みき所にして「ロンドン」を除ては斯る夥多の人々の斯く深く神に敬虔なる所他に之なしと信ず」と云へり、氏の五月三十一日「ロンドン」に歸着せり

和蘭行

六月十一日「ウエスレー」は「ブラックンベリー」「ブロードベント」及び「ホヰツトフヒールド」の諸氏と共に和蘭に向て出發せり、氏の四十餘年の間絶へず「メツヂェスト」諸會創立の爲に勤勞せしが今に至る迄決して一日の休憩安逸を貪りしことなし、我儕此和蘭行を以て斯る種類休養の者となすを得べきや否やを知らずと雖も此行ハ氏の從來の旅行と其目的を異おしたるハ明らなり、從來の旅行は於ては新たハ「メツヂェスト」會を設立するハ又は既に設立されたる會を強大ハするを以て其目的とあせしも此旅行ハハ毫も斯る目的ありしに非ず、「ムール」氏曰く「氏ハ此行ハ一ハ自己の休養の爲め一ハ外國の眞に敬虔ある人々と相識り相親しみて己が精神を一層公大に又一層談博ならしめんハ爲なり」と今「ウエスレー」が此行あるに至りし次第を擧げんに、先是氏が大ニ敬重せし定住傳道者「ウヰリヤム」「フェルグソン」氏和蘭ニ

此行あるに至りし理由

移りしハ氏の敬虔なる大ニ一般公衆及び上流社會、執政官等の注意と惹くに至れり、氏は多く「ウエスレー」及び「メツヂェスト」教徒の事を語り且つ朋友等ハ「ウエスレー」ハ説教集を配布せしが其結果として人々一般に其老練の傳道者を見親しく其口より聞かんとを願へり然るハ爰に一の困難とも云ふべきハ「ウエスレー」ハ多少希伯來、希臘、拉典、英佛、獨、西班牙等の語には達し居りしも少も和蘭語を知らざりし事なり然れども此障碍ハ「フェルグソン」氏の子「ヨナサン」を以て通譯者となしたるに由て除去され「ウエスレー」ハ遂に前三人と共ニ旅程ニ就けり

和蘭に於ける「ウエスレー」

此行ハ氏は大ニある快樂を與へたり、宗教家も有位高官の人々も皆氏を歡迎敬重し其「ロッツテルメム」の會堂に於て二回の説教をなしたる時の如きハ聽衆實に夥多にして氏をして「假令予ハ單ハ之が爲に和蘭に來れりとするも尙其來りしとを喜ぶなり」と言ハしむるに至れり又「ヘーグ」に於てハ高貴なる婦人の家にて十二人の婦人と二人の武官とに哥林多前書十三章の首め三節を講説し而して祈禱をさせしハ其祈禱ハ「ヤヤナン」某一句毎ニ之

誕生日

ウエスレー和
爾行を喜ぶ

を口譯せりウエスレー記して「予は寔に善く此時間を用ゐたるを信ず」と云へり氏はハールレムよりアムステルダムに渡航するの際船中にて朋友等と共に讚美歌を歌ひ而して人々の之に耳を傾くると見て一場の說話をみしフエルグソン之を口譯せりウエスレー曰く「此時我儕の心は皆互に相密着しアムステルダムに着せし時は人々多く祝福の辭を陳べて我儕を別れたり」とオトレクトに於てハ氏左の如く記せり六月二十八日予は此日を以て正に八十の齡を完了せり而るに神の恩恵より眼目朦朧せず三十年前の体力神氣と異なるなし神よ願くは予をして決して無益に世に存らへしめ給ふ勿れ」ウエスレー和蘭に留まると十七日自ら大に此行を喜べり氏記して曰く「予ハ此小旅行に伴ふたる多少は煩勞又費用に就て毫も怨嗟すべき理由なし此旅行は予が面前に一新世界を展開し其土地家屋人民風俗等一として予が嘗て見ざりしものと非るはあく實に皆新奇の觀を呈せり然れども予が共々談話したる人々の皆英國に於ける予が朋友と同様の心情精神を有する人々にして予ハオトレクト及びアムステルダムに在て恰もプリストル

及びロンドンに在るの感をなせり」ヘীগ及び其他多くの主要なる都邑に於て善き働きあり其信者の心の單純なると及び衣服の質素なるとは當初の英國メソヂスト信者と相匹敵し其愛情に於ても敢て他に譲らざるなり我儕は實に割き難きの情を割て互に別を告げたり二人の姉妹は我儕がヘীগを去る時我儕を送りて十二英里隨伴し來りアムステルダムの一人の兄弟は三十英里餘を隔つるオトレクト迄我儕を送り來れり予は若し尙長く世に在るとを得ば少なくとも隔年には彼等を訪はんとを期す予はプリストランド及びウエストフェリヤの兄弟を訪ふべかりしも奈何せん時日は許さるより遂に之を果たさざりき此兩所に於ては輒近大に神の榮ある事業發生せりと

ウエスレーハ七月四日ロンドンに還り十日の後年會の爲にプリストルに向て出發せり

此年會の記録に記さるる會友の總數ハ四万五千九百五十五人あるは是れ單に英蘇愛三國の會友に止まるものにして此他米國ハ一万三千七百四

プリストル年會

十アンタギニアに於ては此年始て熱帶地方に於ける第一のメソヂスト講義所建築を竣功せり、夫の神の事業の大に進歩し居たるノヴァスコシヤも就ても亦更ふ記載あるとなしウヰリヤム、ブラツクの書をウエスレーに寄せ、熱心な氏が此地に傳道者等を遣らんとを請へり、然るにノヴァスコシヤのメソヂストの一巡回として年會記録に上るに至りしは漸く一千七百八十五年の事にして實に當時刈入物の多く工人の少なかりしを知るなり

大病

此年會中ウエスレー復び危篤なる病に罹れり醫師ドラモンド氏の毎日二回の診察をなし氏が朋友等は死期既よ到れりとし氏も亦拘攣或ハ胃腸不達し急卒の死を致すとあらんと思惟せり氏其忠實ある看護者ジョセフブラッドフォールドに告て曰く予熟らく予が過去の生活を回顧すれば予や其己が拙劣なる方法に従て聊か同胞人類に善を爲さんと勉め絶へず各地を漂行する茲に五六十年而して今予と死との間恐くハ只數歩のみならず、此時に當て予己が救の爲に何の頼るべき者を有するや予が爲した

る事業受けたる苦難の中にハ毫毛の頼るべき者なく只左の一言の以て哀訴すべきあるのみ曰く「我ハ罪人の首あり、されどイエス我爲めに死せんと、ウエスレー生死の間に懸ると十八日後僅かに快方に向へるを見其自ら言へる如く、空しく日を送るを思て」プリストルの認罪者等と一時間を費し次日二回の説教をなし其翌日即ち八月二十五日(月曜日)に於ては再び其愛する傳道旅行の途に就けり、實に手を徒ふして生さんより寧ろ死するはウエスレーが望む處なりしなり

氏はホルスタルに向て進みしが其旅行日子は十六日に亘り里程は五百英里ふ上り加之其間沿道の各所にて幾多の説教をなし遂に九月十三日一ヶ月前に在ては死出の域に出入せし老翁殆んど平常の壯健を以てプリストルに還れり、氏は十月六日迄プリストル近傍に留まり其間密に説教せしのみならず貧困者救助の爲めに金を募り且つ自ら貧しき受惠者を其家に訪へり、氏曰く予ハ彼等の中に毫も怨嗟の精神なく却て眞に神を樂む者の多くあるを見て大に驚歎せり、彼等は皆其受けたる僅少の救助の爲に甚

傳道者ウエスレー

く感謝し居れりと、斯る人の人民も喜ばれ又斯る人の其周圍に窮民を吸引するの磁石たりしとは決して怪むべきとよわらざるなり然れども時どしでは人民の蟬集却て氏の迷惑を來たせしとなきよわらず、凡そ一ヶ月の後ウエスレーノルウヰツチニ在り將又其處を去らんとするに當り許多の乞丐氏が馬車の周圍に集れり此時氏の囊中は殆んど空虚にして只僅かにロンドンに到るに旅費を餘せしのみなりしが彼等が請求の餘り煩はしきより心に不快を感じ少しく圭角ある語氣にて予の一切汝等に與ふべき者有たず、汝等の子が何處に於ても貧民を救助し得ると思ふやと云ひ捨て頓て馬車に乗らんとせしむ如何なる機なりしか足滑べりて地上に轉倒せり此時氏は恰も神自ら氏が輕卒ある言語の爲に氏を責め給ひしが如く感じジョセフ、ブラッドフォールドを顧みて宜し、ジョセフよ、宜し、是れ予が受くべき當然の報なるのみ、蓋予縱令他も彼等も與ふべき嘉き物を有せざるも少くも善言を以て之に與ふべき者ありしなりと云へり○氏は此年の剩餘を例の如くロンドンと其近傍の諸郡に費せり

ウエスレーの勞働は實に他も其比を見ざる處あるが之れ既も高齢ある翁の勞働たるを念ふ時は殆んど驚歎に堪へざるあり氏は決して身体の大健偉なりし者に非ず又之を營養するも滋味美食を以てし之を興奮するに旨酒を以てしたるに非ず其身体は寧ろ小にして其重量百二十二パウンドに過ぎず(十四年前と全く同重)而して其齡の既に八十にして毫も肉慾を貪るとなく毎年八ヶ月の間は多くの貧者と食卓を共にし各種の室又寢牀に眠り妻なく子なく又自宅をも有せざるの人にてありしなり、然るも其心や常に快活にして恒に喜に満ち其輕快敏捷あると恰も少壯青年の如くにして遍く三王國を飛行し屋内、屋外、會堂、講義所、茅屋、假舎の別なく毎日二回の説教をなし加之氏と其敬虔なる傳道者等比働きに由て發生したる許多の會の複雑なる事務を綜理せり、氏の實に驚くべき人にして世は斯る人を見る真に稀なり、氏一たび義務の道を見るや大膽に之を踏み、何者も氏を恐れしむる能はず又何者も神の托命し給へる事業より氏を誘導し去る能はざりしなり、主一たび氏に往けと命じ給ふや其事の何如も困難なるも何如

よ大なる危険其前に横はるも保護と祐助を主に一任し其能力に頼りて勇進せり

一千七百八十四年 八十一歳

ウエスレーの書翰に由れば氏は年老ふるに従て却て若くなりしが如し、氏は此年一月十日ロンドンよりヨルクシャーのフェーリーブリツヂに近きレツドシャムに在るウオルトル、セロン氏に送りたる書中に左の如く云へり

「昨年六月二十八日を以て小生の全く八十の齡を終へ申候、元來小生は若年の時より眼力弱く手震ひ其他種々の病の爲に至て不自由なる身にて有之しも神の恩恵に由り全く其等のものは打勝ち今の小生が人間(血肉)より離す能はざる者と思考する者の外一切斯る病痾を有し不申候是れ全く神の爲し給ひし處に御坐候、小生は足下にも恐くは小生が用ゆる良薬の必要あらんかど存申候其良薬は他にあらず即ち運動と空氣變異の二者に御坐候」

氏は年老ふる
に従て却て若
くなりしが如
し

七ヶ月間の旅行

二事を書き

ウエスレーは此年初の二ヶ月を専らロンドンに費し其間只暫時マンチエストロに赴き後又病院の爲に慈善説教をなさむ爲めノッテングハムに往きしとあるのみ、氏のシタイ、ロード會堂に於て契約會を開きし之に參會したる者一千八百人以上に上れり、氏の又ロンドンの傳道者等と印度の宣教師を派遣するの可否を議せり、○三月一日此既に八十を越へたる老翁恰も少童の如き輕捷と活潑とを以て七ヶ月に亘る旅行の途に上り先づプリストルに到り夫より蘇格蘭及びブリッツを経てウエールに到り英國の西方を巡回して十月九日ロンドンに歸着せり、我儕は今簡單に其記事をあすべし

ウエスレーは能く機會を利用して凡ての智慧を求め以て我儕に示すに凡て人の如何も頭に霜を戴くとも尙學ぶ所あるを得べき者あるを以てせり、ウイルトシールのブラッドフォードに於て氏の如く云へり、予は通俗の謬まりを發見せり即ち驚の籠中に永く生を保つ能はずとは其一にして其歌ふは一年中僅かに一二ヶ月の事ありとい其言あり、サムエル、レ

一千七百八十四年

イチルの有する三羽の鷹は十一月より八月に至る迄殆んど毎日朝より暮
に至る迄眠ふなり

氏はラインの下なるニューキャスルに近きレイン、エンドに於て三月
の寒風凛烈なる夜月明に乗じて郊外説教をなせしが聴衆の多きと講義所
に容るべき人数の四倍に上れり又ホルスレムに於ても同く聴衆夥多に
して講義所に容るゝを得ざるを以て止を得ず郊外に於てせり而してマン
チエストルに於ては復活日に聖餐を與かりしもの凡そ一千人トーマス、テ
ーロルは一千二百人と云へりありたり氏インゾオルテスに赴くの際御者
途を過まり強雨中十二英里半を徒歩せしが毫も疲勞を感せずと云へり、ウ
エスレーは斯く蘇格蘭の首要なる都邑を巡回したる後ニューキャスル
に來り其處までホットンデー(復活後日)に於て夥多の聴衆を向ひ三回
の説教をなし一週日の後再び傳道旅行の途に就けり氏はストックトンに
於て神の常ならぬ働きの児童の中に起り六歳より十四歳に至る六十人餘
の児童は大に感服して熱心に己が靈魂の救を求め居るを見たり氏記して

児童中のリッ
アイヴアル

誕生日

曰く予が講壇を下るや否や一群の児童予を圍みて一齊に皆跪けり是に於て
予も共々跪き彼等の爲に祈りしが「嗚呼是れ如何なる美觀ぞ宜べかり氏
が左の語を加へたる」多くの人々再び會場を馳せ返りて我儕を合し胸中
は火一人より他人に移りて遂に殆んど感動せざる者なきに至れり是れ地
に於て新奇の事にあらざるや實に神の其働を小兒の中より始め給ふありと
氏東岸に沿ふてホルに到り夫よりホックリントン及びヨルクを経てエ
プソオルスに着し其處にて誕生日を迎へ該邑の市場に於て説教せりウエ
スレー記して曰く六月二十八日此日子は八十二の齡を迎へたる予の
身体及び精神の勞働は堪ゆるとは恰も四十年前に於けるが如し予は敢て
之を第二の原因に歸せず一に万物の主宰なる主に歸するなり夫れ主は其
聖旨に従て生命の大陽に佇立するとを命じ給ふなり予が身軀の壯健なる
とい八十一歳の時も二十一歳の時と異ならず却て少壯に時には頭痛齒痛
其他種々の痛みを有せしも老年に至て全く是等より脱出し得て一層強健
なり此時ふ當り我儕は只主万事を主宰し給ふと云ふの外なし我儕生ける

一千七百八十四年

五百四十七

間は當に主の爲に生くべきありと、ウエスレー一週日の間リンコルン郡の諸會を訪ひ夫よりヨルクシャーの西方諸邑を経てボルンレイに達せり氏は始めて此地に來り左の如く記せり「ボルンレイの傳道は多年之を試みしも毫も結果を見る能はざりしが今は貴賤貧富の別なく人々四方より群集し皆熱心に耳を傾けたり只一人あり烈しく叫んで説教を妨げんとせしが其妻走り寄て之と止めたり即ち一手を以て彼を捉へ他手を以て其口を蓋ひ以て一語をも出すを得ざらしめしあり斯くて神は其働を始め給ひしが予の其働の速かに消失せざるべきを信ずウエスレーが此言は眞に能く應驗せり氏はボルンレイを去りオトリレイに赴き其處にて二日間休息し是れ實に驚くべきとなり夫より七月十八日に至りペンダレイ教會に於て二回の説教をなせり此時聴衆多くして堂に入る能はず戶外に立て之を聽けり氏記して曰く「開會前に予の安息日學校に到りしが其處には二百四十の児童ありて數多の教員之を教へ而して教會の牧師之を綜理せり一教區内に於て斯く多くの児童安息日毎に聖書を讀むとを學ぶと共に禮儀作法を

安息日學校に就て

も學び而して大に罪を犯すとを免かる予と到る所漸々斯る學校の起るを見る神は恐くは是等に關しての人間より一層深き目的を有し給ふなるべし誰か知らん是等の學校の將來基督信者養成所たらざるべきとウエスレーの安息日學校に關して記載せしは之を以て始とす元來安息日學校は既に久しく存立すと雖ども此時迄公衆の注意を惹くとふかりしがウエスレーの疾く其要を看破し大に之が擴張を唱道せり既述べし如くペンダレイに於ての會堂にて説教を始むる前先づ安息日學校を訪ひ而して斯る學校に基督信者養成所との最良の名稱を與へたり又リーツに於ても之と同様な學校の設けあり即ち邑を七區に分ち其中に二十六の學校ありて二千有餘の生徒を有し四十五人の教員之を教へたり是等の學校は毎安息日午後一時に開き児童等と讀書習字及び宗教等を教へ三時に至りて各々便宜の會堂に參集せしめ後學校に伴ひ歸て之に有益なる書を読み聞らしめ而して後詩篇を歌ひ且つ祈禱をなして閉校せり是等の學校にての男兒と女兒とを全く分離せしめたり又四人の訪問者なる者ありしが其職務は日

曜日の午后右二十六の學校を訪ふて出席者を點檢し若し欠席者あれば其宅又は市街に往て之を索ね出すにてありき又五人の教師是等の學校を訪ふて演説をなせり而して一千七百八十四年七月を以て終る第一年の費用凡る二百三十四パウンドなりと云ふ

ウエスレー諸所の市邑村落を訪ふて遂ふリーツに達し其處にて年會を開けり即ち氏は左の如く記せり

「七月二十五日(日曜日)予ホルスタムに於て數千の聽衆に向て説教しリーツに於ても之より劣らざる夥多の聽衆に向て説教せり 七月二十七日(火曜日)年會を開き四人の兄弟等は長き討論(此討論に於てハフレツチエル氏最も勉めらる)の後遂に其誤謬を承認せしかば我儕は全く彼等を恕せり 七月二十九日(木曜日)此日は國民の感謝日なりしが會堂は我儕を容るゝに足らざるを以て講義所に集まり予自ら祈禱を誦し説教を著し而して五人の教師の補佐を得て一千六七百人に主の晚餐を施せり 八月一日(日曜日)我儕教師の會堂ありたる者十五人なりき 八月三日

リーツ年會

(火曜日)我儕大なる愛の中に年會を閉ぢしが皆大に之を惜めり」

是れウエスレーが此重要なる年會に關する簡單なる記載なるが我儕は少しく之を補充せざるべからず夫の米國獨立戰爭は既に終を告て爰に國民の感謝祭を擧ぐるに至れりウエスレーが國民の感謝日とは即ち之を指せるなり此日午前五時おはトーマス、ハンビー、我惠爾に足れりとの題を以て説教し而して夫の殆んど比類なき聖餐式の前おはウエスレー哥林多前書十三章一節より四節を題として説教せり晚餐式に於て氏を補佐せし教師はコーク、フレツチエル、デロン、ベイレー、及びバンアソンの五氏なり、午后に至り年會の議事を始め而して同夜ウエスレー再び是を第一として大なる誠なるこの題を以て説教せり、此重要なる會議中氏は種々の困難なる事務を辨理したる外凡て八回に下らざる説教をなせり、此時の議事中米國に於けるメツヂェスト諸會の監督會政組織問題は其主要なるものの一ありしが之れ八十餘年間嘗て諍論の絶へざりし一問題なり是に關しウエスレー及びコークは痛く攻撃されしも尙能く其身を辨護するを得たり、我儕は

議事中之大問題

米國の教況、
メソヂスト信
徒中の困難

今より可成的單簡に此事を記述すべし

當時既に局を結びたる夫の米國戰爭中米國メソヂスト教派の進歩は實に驚くべきものにして一千七百七十四年には會友二千〇七十三人なりしが一千七百八十四年に一萬四千九百八十八人となりて僅々十年間に一萬二千九百十五人の増加を見たり而して其循環の數ハ凡て四十六にして巡回傳道者八十三人其他數百の定住傳道者ありて各々其役務に従事せり然るに是等ハ皆教會の聖禮典に關してハ全く牧者なき羊の如き狀況なりき英國教會の或教師等は軍中へ入て軍務を執り其他ハ教師等ハ敬虔と常識とを缺き剩さへ彼等ハ殆んど皆メソヂスト教徒に反對し力を極めて之を迫害せり監督ホワイト氏曰く英國教會は漸々衰微するに至れり是れ一又は人々之を以て敬虔の徳を増進するに於て益する處なしとし二又は人々之を維持するを以て徒に無益の重荷を負ふとなりと思考しよばなりと又夫の獨立戰爭の極を結ぶに至りし頃教師ドクトルホーク氏は左の如く云へり「ゾオルジョニヤに於ける會堂の多くの全く破壊せられ或は修繕す

可らざる程に毀損せられたり而して教會の教區九十五中二十三は全く廢滅に歸し残り七十二中三十四は教役者を缺けり而して九十八人の教師中残りたる者は僅かに二十八人に過ぎざるあり而して今一八の英國教會の教師ジャラット氏は曰く「大多數の教師の説教せし處ハ夫の自然神教に勝る處幾許もなかりしなり」と實ハ彼等は眞理宣傳者の殘酷ある迫害者又讒謗者にてありしあり事情既に斯の如くなりしを以てメソヂスト教徒は其傳道者に向て聖典を施行せんことを要求せり實に彼地メソヂスト會中ハ數月或ハ數年の間嘗て聖禮典の舉行なかりしもの許多ありたり是より五年前即ち一千七百七十九年に於て南部の傳道者等ハ最早其會友に主の晚餐を施し又其小兒及び試中の者ハ洗禮を施すとを否むとを好まず彼等の中に於て最も先輩なる三人の手より接手禮を受くるに至れり然るにアズベリーの大み之を愛ひ漸く一年の後に至り辛ふじて彼等ハ聖禮典を行ふとを止むるを得たり即ちウエズレーより勸言を得る迄之を止めしなりアズベリー書をウエズレーに寄せ此地に於ける傳道事業の廣大あるとゾオ

ルジョニヤに於ては聖禮典に關し信者等の心大に安からざるより遂に分裂するに至りざると及び信者の小兒にして洗禮を受けざる者數千人あり且つ信者の一般に主れ晩登を受ざるに既に多年の間なると等を述べ而して一千七百八十四年三月廿日には左の如く言ひ送れり我儕は大に補助を要す足下若し一人の教師及び數人の足下の善しとさるゝ傳道者を送らば寔に大幸の至りなり併し足下の推薦なき傳道者の一人も之を要せず予が最大の望み足下を此地に見んとするが之れ只に予一人の望にあらすして米國數千の信徒の熱望なり」ウエスレーの米行は素より出來べからざるとありしを以て氏に先に監督ロース氏に請ふて一人の傳道者又教師の按手禮を施さんとを求めたり然れども該監督の之を拒絶したれば今は奈何ともする能はざるに至り遂に氏は博士コークを遣はさんと思ひしがコークの如く答へたり

「拜啓小生が米行に就ては最早足下を煩はすまじと存候ひしも足下の御勸諭は今一度小生をして此事に就き爰に愚見を陳述するの止を得ざるに至らしめ申候

ウエスレーコークを米國に遣はさんと欲す
ウエスレーに寄せたるコークの書翰

若し足下の充分ある信用を置き且つ足下が充分ある感化力と才智と徳行とを有すると思考さるゝ者を彼地に遣はされなば其歸國するに至り彼國に關する種々の事は一々充分に足下之を御了知相成るを得べしと雖も小生が如き後者即ち必要な資格を缺きて前者即ち足下の御信用に於ては敢て自ら當らずと雖も聊か之を有すと信ず之に不適任ならんことを恐れ申候若し然るとなくば小生が渡航も無益には有之間敷候右申述べ候通り若し斯る人米國へ往復致候へば足下之によりて書翰の盡す能はざる所を御詳知相成るを得べく且足下御逝去の後に至ても尙兩國の諸會及び傳道者等を一致結合せしむるの方策と相成可申候若し小生が靈界に移さるゝ前に足下御逝去の凶事起らば小生に是等の王國(英、愛、蘇)に於て手を離さべからざる許多の必要な事務あると殆んど必然の事と御坐候敬白

ダブリン府の近傍に於て

一千七百八十四年

五百五十五

一千七百八十四年四月十七日

トーマス・コーク

此書翰の言ふ所一種奇体なりと雖ども其意味する所は恐くハウエスレー若しコークを以て充分なる感化力才智及び徳行を有する者とせば彼ハ喜んでウエスレーの代理者として米國メソヂスト教徒に到るべしと云に
あるべし然るに此事ハリーツの年會迄其儘にて過去れりポーソン氏の自著のドクトルホワイトヘッド氏の傳記中ハ接手禮の事はウエスレー自撰の商議員會に於て自ら之を計畫したることを云へり其會員の一人にして其時出席したる者なるが之に關して左の如く記せりウエスレー氏ハ此事を言ひ出せる時傳道者等は大に驚き或者は之に反對せり然れども予ハ此時ウエスレー氏の心略ハ決し居たるを見て此事の決行さるべきを明知せり遂ホコーク、ホワットコート、及びヴァシーを米國に遣ハす事となりま
スコークは年會解散より六日の后ウエスレーは左の書翰を送れり

「拜啓小生が他人に接手禮を施すの職權を足下より足下の接手によりて受る事と足下がホワットコート及びヴァシーの兩氏に接手禮を御施

接手禮の事

之ハ關シコークがウエスレーに寄せたる書翰

し被成候事とは之を考ふれば考ふる程最も適當なると存候其理由ハ
(一)之れ最も聖書に符ふとして又初代教會の慣例に最も適合すると思へれ且つ(二)小生或は米國に於て今足下より受け得る丈けの凡ての便宜權力を使用するの必要ハ逢遇すること可有之候、フлакンベリー氏ハリーツにて小生に左の事を告げられ候即ち同氏ハアズベリー氏の書翰を見し其の中にアズベリー氏は已れに委任されたる事業の綜理者としてハ假令其一部分の綜理者としても誰をも受け容れざるべきを陳べしとの事に御坐候、小生は素よりアズベリー氏に對して毫も私心を懷く者に無之却て大に同氏を敬愛する者よて彼地に到りても若し必要に迫るにあらざれば万事其許可を得て之をなし終始其後ハ在て事をなさんと決心致居候へ共斯く國隔たり且つ足下ハ屢々小生を彼地に御遣ハし被成候事ハ素より出來ざる事にて有之べければ此際凡ての場合に處するの便宜を備へ置くとの寧ろ肝要の事と思考致候、小生は彼地ハ於ては只式ハ從て足下より受けたる職權を使用するを得バ夫にて満足致申候

一千七百八十四年

五百五十七

併し若し小生に其正式フオर्मアルの職權なくして他人に按手禮を施し申候は、或の之を離し或の之に反對する者も之れあるべく從て大に不都合を來たし可申候、小生が屢々疑惑致候事ハ專業進歩の爲り避く可らざる必要ありと自認する場合の外斯る職權を使用すべきや否やの事に御坐候爰に又ホワットコート及びヴァーレー兩氏に關して申述ふべき事は夫のランキン氏が云へる在米の教師中ハシャラット氏を除くの外小生と事を共にする者は恐くは一人も之れなかるべくシャラット氏と雖も小生と共に他人に按手禮を施すとを承諾すべきや否や甚だ不確かなるの一事小御坐候故に小生が二人の長老を作ふ事は最も適當ふして策の得たるものと思考致候、之を約言すれば當地に於て爲し得べき丈の準備は大どなく小どなく皆之を爲し置く事最も至當の事と存候、是等の事は皆〇〇氏の宅なる足下の室に於て執行被成候て然るべく而して後フレッチェル氏の勸に従ひ足下が小生等と任命被成候職務の證明書を小生等に御渡し被下度候、ホワットコート及びヴァーレー兩氏按手禮の爲は小

生クレイトン氏を伴ひ來り申すべければ足下生等二人の長老と共に之を御施し成さるを得べく候

足下此事をなすを避け給ふに由て大に物議を免かれ給ふべしとのランキン氏の説の如きは實に取るに足らざるものに御坐候、抑も小生が他人に按手禮を施すの場合は實際に之あるべきや否や未だ知るべからざるにて若し之なきときは物議などの起るとハ素よりあるまじく、併し若し之左る場合あるに於ては足下が小生は足下の命に依て之をなせしとの事實を公然御承認被成候事は之れ止を得ざるとして可有之候若し然らざれば小生ハ恐くハ足下の命を始めて之を四方難者の攻撃に堪へ申問敷候、何卒是等の事ハ關し能く御熟考あらんと切願に堪へず候謹言

一千七百八十四年八月九日

トーマス、コーク

此書翰は依り我儕はウエスレーにハ毫も自ら他人に按手禮を施すの心なかりしと及び己と同教會の長老にして同等の職權を有するコークを在

此事はウエスレーより出て
一にあらざ

一千七百八十四年

五百五十九

米の傳道者に按手禮を施さしむる爲に米國に遣はさんとしたることを知るを得べし夫のドクトルホワイトヘッド氏の博士コーク氏はウエスレー氏が彼に按手禮を施すの權と同等の權即ちウエスレー氏に按手禮を施すの權を有せしむる言は素より至當の評言ありウエスレー氏は決して自ら此事をなさんと企てたる者に非ず只コークの願ふ由て之を爲すと承諾せしのみあり然れども氏は自ら他人に按手禮を施すの權ある事お就て毫も疑を有せざりしとい事實にして氏は是より四十年前にロールドキング氏の初代教會論を讀んで監督と長老とは全く同位オキソの者なることを確認し一千七百五十六年に左の如く記せり予は今尙教會監督政治組織を以て使徒等の實行きたるものにして其書翰の言ふ處に符合せるものなることを信ずと雖ども之が聖書の規定指命する所の會政なりとい信せざるなり予は監督ステリングフォード氏の「アイレニコン」を讀みし以來疑きに熱心は此説を主張したることを大に恥ぢたり同氏はキリストも使徒等も教會政治に關しての嘗て一定の組織を規定指命したるとなき監督政治の神權に出る

等の事は初代教會の決して耳にだもせざりし處なることを誰も反駁するを得ざる程に証明せり又一千七百六十七年一友お寄せたる書中又氏は再び監督の按手の外正當の按手なしと信ずるは全く誤謬なることをステリングフォードより由て充分に認知したることを云ひ又一千七百八十年に「予は誠に主の晚餐を行ふと同一く按手禮を施すの權を有することを信ず」と謂て夫の高派教會主義の氏が兄弟を震怒せしめたり斯く氏が自ら按手權を有するとの意見の或批難者が言ふ如く老衰の後に至て始めて主張したるものにあらすして四十年來の強固なる確信なりしなり

ウエスレー氏がホットコート及びヴァンシーに按手禮を施せし事に就てハ氏が英國教會員たるの安危に關するの外別に困難なるとなかりしも其コークに之を施したるとお就てハ大に疑議を免かれざりしなりコークは既に執事及び長老の按手禮を受けて英國教會の教師となり其職權に至ては毫もウエスレーと差等あるとおかりしに尙何の按手禮を要するとありし事實にウエスレーハ更に其必要を見ざりしもコーク之を請求したるあり

夫れウエスレーはメソヂスト教派の創立者該教徒の父にして米國に於ても其嘗て相見しとなき信者の數既に一万五千の多きお上れり彼等は獨立戰爭終結の後は英國教會の會友にあらず長老教會の會友にあらず英國教會の脱會者にあらず又クエーカー宗徒おもあらずして純然たるメソヂスト教徒よてありしを其中に絶へて聖典の舉行なく從て彼等大お之を願望せり實に彼等の基督信者として斯る聖典に與るの權利を有せしなり然れども誰か之を行ふ可きや常識は之に答て彼等を改悔せしめし傳道者之を行ふ可しと云ふなる可しと雖も爰に一種の人ありて監督又は長老より按手禮を受けたるものに非ざれば之を行ふを得ずと云て神の召き給へる傳道者之を行ふとを禁じ爲めお大なる障礙を來たせり今爰に横はれる一問題の米國に於ける傳道者は按手禮なくして聖典を行ふべき乎將たウエスレー或は其他の者英國より往て彼等に按手禮を施す可き乎との一事ありしがウエスレーは例の果斷を以てコークを遣はす事に決しコークも亦之を承諾せり然るに其出發前コークの別は自ら按手禮を受けんとを望め

ウエスレーコークに按手して之を米國メソヂスト傳道事業の総理となす

コーク等米國に航す

コークアズベリーに按手禮を施す

り是れ何の爲なりし乎蓋し左の一理由お外ならざる可し前に陳べし如くウエスレーは米國一万五千のメソヂスト教徒の敬愛する父なりしも氏自ら米國を赴く能はざれば遂お博士コークを遣はすとせり然るもコークは在米の諸會及び傳道者等恐くは彼が職權を承認せざる可しと云々せしを以てウエスレーは此障礙を除かんが爲めプリストルの一私室に於て小集會を開き手をコークの頭上に按て彼を米國メソヂスト傳道事業の総理（是れウエスレーの語なり）とあし且つ此職權の證明書を彼に付與せりウエスレーが爲せし事は之に過ぎずして氏はコークを総理となすの外他意おらざりしあり

コーク、ホワットコート、及びヴァンシーは米國に向て出帆し十一月三日彼地に着し而して十二月二十四日ボルティモールに於て傳道者の會議を開けり此時の來會者は殆んど六十人なりき三日の後コークアズベリーに按手禮を施し而して此二人他の傳道者等に長老及び執事の按手禮を施せり我儕は米國のメソヂスト教徒等お其會をメソヂスト監督教會と稱せると